浜松城下町遺跡３

Hamamatsu Castle Town Site
The 13th excavation report

浜松市教育委員会

2021 年 3 月

Hamamatsu Municipal Board of Education,March,2021

浜松城下町遺跡 3

Hamamatsu Castle Town Site

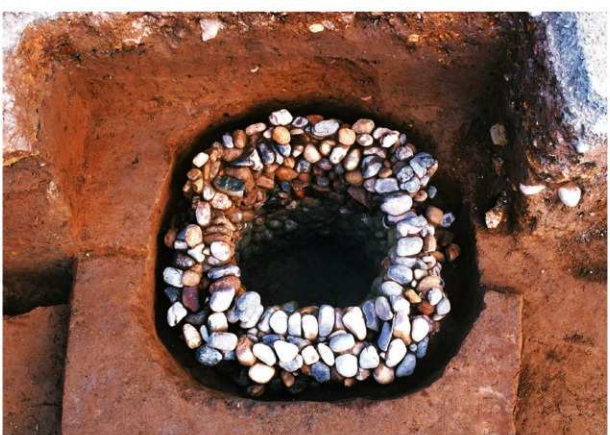
The13th excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2021

浜松市教育委員会

1　13 次調査　東地区 A 区　道 SF01　完掘全景（西から）



2　13 次調査　西地区 D 区　井戸 SE02　井筒内完掘状況（南から）

13 次調査の出土遺物

例　言

1　本書は浜松城下町遺跡（13 次調査）の発掘調査報告書である。
2　発掘調査は都市計画道路植松伊左地線の道路改良工事に先立ち実施した。発掘調査は、浜松市（土木部南土木整備事務所）の依頼により、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、実務は浜松市から委託を受けた株式会社四門が担当した。調査にかかわる費用は、浜松市が負担した。
3　発掘調査にかかわる面積と期間は、以下のとおりである。
調査面積　450 ㎡
委託期間　令和 2 年（2020）6 月 25 日～令和 3 年（2021）3 月 26 日
（うち現地調査期間　令和 2 年 8 月 17 日～ 10 月 26 日）
4　現地調査は、井口智博（浜松市市民部文化財課）の指示のもと、塚本和弘・清水香枝（株式会社四門）が担当し、辻広志（株式会社四門）が補佐した。遺構写真撮影及び遺物写真撮影は、塚本が行った。
5　調査で作成した図面の編集、出土遺物の整理作業や諸記録の作成、納品作業等は、塚本の指示のもと、清水香枝・澤田万里・永津良子・植松早苗・水島絵理・古川登・木村靖子・佐々木英二・田中羽留香・東山華（株式会社四門）が行った。
6　本書の執筆は、第 1 章 1・2（2）・3、第 2 章 1、第 3 章 2 を井口智博が、第 1 章 2（1）を鈴木敏則（元浜松市博物館長）が、その他を塚本が行った。本書の編集は、井口の指示のもと、塚本・辻・東山が行った。
7　現地調査及び報告書作成にあたり、下記の方々や機関からご指導、ご助言をいただいた。記してお礼を申し上げたい。（順不同・敬称略）
小野正敏、藤澤良祐、中野晴久、惟村忠志、増山禎之、後藤建一、中川律子、戸塚和美、岩原剛、金子建一、足立順司、野崎正博、湯浅治久
8　調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

凡　例

1　本書に記載された座標値は、世界測地系に基づく国土座標第Ⅷ系によるもので、m 単位である。平面図の方位北は、座標北を示す。
2　標高は東京湾平均海水面（T.P.）で、m 単位である。
3　土層や遺物胎土の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖 2015 年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
4　調査区名は、東地区（A 区・B 区）と西地区（C 区・D 区）の 2 地区 4 区とした。
5　遺構番号は、東地区と西地区を網羅した連番で、01 から付した。
6　遺構略記号は、下記のとおりである。
柱列（SA）、溝（SD）、井戸（SE）、道（SF）土坑（SK）、小穴・柱穴（SP）、不明遺構（SX）
7　挿図の縮尺は各図中に明示したが、遺構図は 1/40 を基本とし、遺物については 1/4 を基本とした。
8　遺物実測図の断面網掛け使用例は、下記のとおりである。
須恵器 ■（K=100%）、貿易陶磁器 ■（K=60%）、陶器 ■（K=40%）、磁器 ■（K=20%）、土師器・土師質土器 □（K=0%）

浜松城下町遺跡３

目　次

例言・凡例
巻頭図版
第１章　序　論…… 1
　1　調査に至る経緯…… 1
　2　遺跡周辺の環境…… 2
　（1）地理的環境 …… 2
　（2）歴史的環境 …… 3
　3　浜松城下町遺跡の調査履歴…… 4
　4　調査の方法と経過…… 6
第２章　調査成果…… 11
　1　確認調査の成果…… 11
　（1）確認調査の概要 …… 11
　（2）基本層序と遺構検出面 …… 11
　2　本調査の成果…… 12
　（1）概　要 …… 12
　（2）東地区の遺構と遺物 …… 12
　（3）西地区の遺構と遺物 …… 33
第３章　総　括…… 58
　1　発掘調査の成果…… 58
　（1）各時期の遺構と遺物 …… 58
　（2）道 SF01 と井戸 SE02 …… 66
　（3）小　結 …… 71
　2　今後の課題と展望…… 71
出土遺物観察表
図版
抄録・奥付

巻　頭　目　次

巻頭図版 1　1　13 次調査　東地区 A 区　道 SF01
　　完掘全景（西から）
　　2　13 次調査　西地区 D 区　井戸 SE02
　　井筒内完掘状況（南から）
巻頭図版 2　13 次調査の出土遺物

挿図目次

Fig.1　浜松城下町遺跡の位置 …… 1
Fig.2　近世城下町の構造及び浜松城下町遺跡の調査履歴 …… 5
Fig.3　地区割模式図と今回の調査グリット配置 … 7
Fig.4　調査区配置図 …… 8
Fig.5　作業写真 …… 10
Fig.6　調査位置及び土層柱状図 …… 11
Fig.7　遺構全体図 …… 13
Fig.8　全地区 南壁面図 …… 14
Fig.9　東地区 遺構全体図 …… 15
Fig.10　A 区 SK01 遺構図・出土遺物 …… 16
Fig.11　A・B 区 SP01 ～ 12 遺構図・出土遺物 …… 18
Fig.12　A 区 SX01・02、SD05・06 遺構図・出土遺物 …… 20
Fig.13　A 区 SX03・SD14 遺構図・出土遺物 …… 21
Fig.14　A 区 SX04 遺構図・出土遺物 …… 23
Fig.15　A 区 SX05、B 区 SX06 遺構図・出土遺物 … 24
Fig.16　A 区 SD01・02 遺構図・出土遺物 …… 25
Fig.17　A・B 区 SD03 遺構図・出土遺物 …… 27
Fig.18　A 区 SD04 遺構図・出土遺物 …… 28
Fig.19　B 区 SD08 遺構図・出土遺物 …… 30
Fig.20　B 区 SD09 遺構図・出土遺物 …… 31
Fig.21　東地区 遺構外出土遺物 …… 32
Fig.22　西地区 遺構全体図 …… 33
Fig.23　D 区 SK02 ～ 04 遺構図 …… 34
Fig.24　D 区 SK05、SX08、SD27 遺構図・出土遺物 35
Fig.25　C・D 区 SP13 ～ 26 遺構図・出土遺物 …… 37
Fig.26　D 区 SX09・10 遺構図・出土遺物 …… 39
Fig.27　D 区 SX10 出土遺物 …… 40
Fig.28　C 区 SX07、SD10・13 遺構図・出土遺物 … 42
Fig.29　C 区 SD11・12 遺構図・出土遺物 …… 43
Fig.30　D 区 SD15 ～ 18・21・24 遺構図 …… 45
Fig.31　D 区 SD15 ～ 18、SD15 ～ 18 包含層出土遺物 …… 46
Fig.32　D 区 SD19・20・22・23 遺構図・出土遺物 49
Fig.33　D 区 SD28・29 遺構図、SD28 ～ 30 出土遺物 52
Fig.34　D 区 SE02 遺構図・出土遺物 …… 54
Fig.35　西地区 遺構外出土遺物 (1) …… 56
Fig.36　西地区 遺構外出土遺物 (2) …… 57
Fig.37　出土遺物成果 (1) …… 60
Fig.37　出土遺物成果 (2) …… 61
Fig.38　旧街路図上の本調査区の位置 …… 67
Fig.39「青山家御家中配列図」中の調査地周辺 …… 70
Fig.40「遠江敷知郡浜松御城下略絵図」中の調査地周辺 …… 70

表目次

Tab.1　実施工程表 …… 9
Tab.2　13 次調査 地区別出土遺物分類表 (破片数) …… 58
Tab.3　中世前期 湿美湖西産陶器器種一覧表 (破片数) …… 62
Tab.4　中世陶器 器種一覧表 (破片数) …… 63
Tab.5　近世陶磁器 器種一覧表 (破片数) …… 65
Tab.6　出土遺物観察表 (1) ～ (12) …… 73 ～ 84

図版目次

PL.1　1　東地区 A 区　完掘遠景 (西から)
　　2　東地区 A 区　完掘近景 (西から)
PL.2　1　A 区　SD05・06 完掘状況 (西から)
　　2　A 区　SD03 完掘状況 (西から)
　　3　A 区　SD03 断面 (西から)
　　4　A 区　SD04 断面 (北から)
　　5　A 区　SD04 遺物出土状況 (南から)
　　6　A 区　SD04 完掘状況 (南から)
PL.3　1　A 区　SD01 遺物出土状況 (西から)
　　2　A 区　SD06 完掘状況 (東から)
　　3　A 区　SD05・SX01 断面 (東から)
　　4　A 区　SX03 断面 (東から)
PL.3　5　A 区　SX04 断面 (南から)
　　6　A 区　SP01 断面 (南から)
PL.4　1　A 区　SK01 石敷検出状況 (南から)
　　2　A 区　SK01 完掘状況 (南から)
　　3　A 区　SK01 石敷検出状況 (東から)
　　4　A 区　SK01 完掘状況 (東から)
　　5　A 区　西壁断面 (東から)
PL.5　1　東地区 B 区　完掘全景 (西から)
　　2　東地区 B 区　完掘全景 (東から)
PL.6　1　B 区　東壁断面 (西から)
　　2　B 区　SX06 完掘状況 (西から)

PL.7 1 B区 SP03 断面（北から）
2 B区 SP04 断面（西から）
3 B区 SP05 断面（西から）
4 B区 SP06 断面（西から）
5 B区 SP07 断面（西から）
6 B区 SP07 根石検出状況（西から）
7 B区 SD08 青磁碗出土状況（西から）
8 B区 SD09 内耳鍋出土状況（北から）
PL.8 1 西地区C区 完掘全景（西から）
2 C区 SD11・12 円礫検出状況（西から）
PL.9 1 C区 SD10 ～ 12 他完掘状況（南から）
2 C区 SD11・12 円礫検出状況（北から）
3 C区 SD11・12 完掘状況（北から）
PL.10 1 C区 SD10 遺物出土状況（北から）
2 C区 SD10 完掘状況（北から）
PL.11 1 C区 SP13 断面（東から）
2 C区 SP13 根石検出状況（西から）
3 C区 SP14 断面（東から）
4 C区 SP15 断面（南から）
5 C区 SP16 断面（南から）
6 C区 SP17 断面（南から）
7 C区 SP20 断面（北から）
8 C区 SP21 断面（北から）
PL.12 1 C区 SX07 遺物出土状況（南から）
2 C区 SD10 断面（西から）
3 C区 SD11 断面（南から）
4 C区 包含層の近世陶器出土状況（東から）
5 C区 柱穴完掘状況（北から）
PL.13 1 西地区D2区 完掘全景（西から）
2 西地区D2区 SD15 ～ 18・21・24 完掘状況（西から）
PL.14 1 D2区 SD18 断面（北から）
2 D2区 SD19・SD22 断面（西から）
PL.15 1 D2区 SK02 完掘状況（南から）
2 D2区 SK03 完掘状況（西から）
3 D2区 SK04 断面（東から）
4 D2区 SK04 完掘状況（北から）
5 D2区 SE01 検出状況（南から）
6 D2区 野溜め完掘状況（北から）
PL.16 1 西地区D1区上面 完掘全景（西から）
2 西地区D1区上面 完掘全景（東から）
PL.17 1 西地区D1区下面 完掘全景（西から）
2 西地区D1区下面 完掘全景（東から）
PL.18 1 D1区下面 SD28・29、SX8 ～ 10 完掘状況（北から）
2 D1区下面 SD29 遺物出土状況（北から）
3 D1区下面 SD29 遺物出土状況（西から）
4 D1区下面 SX10 遺物出土状況（西から）
PL.18 5 D1区上面 SD28 断面（東から）
PL.19 1 D1区下面 SX08 遺物出土完掘状況（北から）
2 D1区下面 SK05 完掘状況（南から）
3 D1区下面 SX09 完掘状況（東から）
4 D1区下面 SX09（南から）
5 D1区下面 SD29 断面（東から）
6 D1区下面 SP26 掘削状況（南から）
PL.20 1 D1区 SE02 井筒内完掘状況（南から）
2 D1区 SE02 断割状況（南から）
PL.21 1 D1区 SE02 石塔出土状況（南から）
2 D1区 SE02 石積み 14 段目（南から）
3 D1区 SE02 石積み 12 段目（南から）
4 D1区 SE02 石積み 8 段目（北から）
5 D1区 SE02 石積み 3 段目（南から）
6 D1区 SE02 基底石の状況（北から）
PL.22 1 東地区 出土遺物（1）（SK01、SX04・05、SD01・03）
PL.23 1 東地区 出土遺物（2）（SK01、SP05・12、SX01）
2 東地区 出土遺物（3）（SX02 ～ 04）
PL.24 1 東地区 出土遺物（4）（SX05・06、SD01・02）
2 東地区 出土遺物（5）（SD03）
PL.25 1 東地区 出土遺物（6）（SD05・06）
2 東地区 出土遺物（7）（SD04・08・09）
PL.26 1 東地区 出土遺物（8）（SD08・14）
2 東地区 出土遺物（9）（遺構外出土遺物）
PL.27 1 西地区 出土遺物（1）（SK05、SX09・10、SD10）
PL.28 1 西地区 出土遺物（2）（SD10・11・13・22・27 ～ 29、SD15 ～ 18 包含層）
PL.29 1 西地区 出土遺物（3）（SP16、SX07 ～ 09）
2 西地区 出土遺物（4）（SD10・11）
PL.30 1 西地区 出土遺物（5）（SD12・13・15 ～ 17）
2 西地区 出土遺物（6）（SD18 ～ 20・22・23・28）
PL.31 1 西地区 出土遺物（7）（SD15 ～ 18 包含層）
2 西地区 出土遺物（8）（SD29・30）
PL.32 1 西地区 出土遺物（9）（SE02）
2 西地区 出土遺物（10）（遺構外出土遺物）
PL.33 1 西地区 出土遺物（11）（遺構外出土遺物）
2 西地区 出土遺物（12）（遺構外出土遺物）
PL.34 1 西地区 出土遺物（13）（遺構外出土遺物、石製品、金属製品）
2 13 次調査の舶載陶磁器

第1章 序 論

1 調査に至る経緯

浜松城下町遺跡は、浜松城の城下町及び東海道の宿場町の範囲を含む中近世の遺跡である（Fig.1）。近年、当遺跡内における近世東海道の道筋である国県道等の主要道路と周辺道路において、交通集中に関わる課題が懸案となってきていた。中心市街地を東西に横切る都市計画道路植松伊左地線（通称六間道路）においても同様の懸案が顕著となっており、この課題解決に向けて道路拡幅を主とした道路改良工事が計画された。そのため工事を主管する浜松市（土木部南土木整備事務所）と浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が協議を行い、まずは道路拡幅部分について遺構・遺物の残存状況を把握するための確認調査を行うことになった。

確認調査（10次調査）は、平成31年（2019）3月18日・19日の2日間にわたり実施した。調査対象地の多くは近現代の掘削が深く及んでいたが、近世以前の遺構・遺物を確認できた部分において記録保存を目的とした本発掘調査を行うこととなった。

本発掘調査（13次調査）は、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が調査主体となり、実務は株式会社四門に委託し実施した。現地調査は、令和2年（2020）8月17日～10月26日にかけて行った。調査面積は450㎡である。

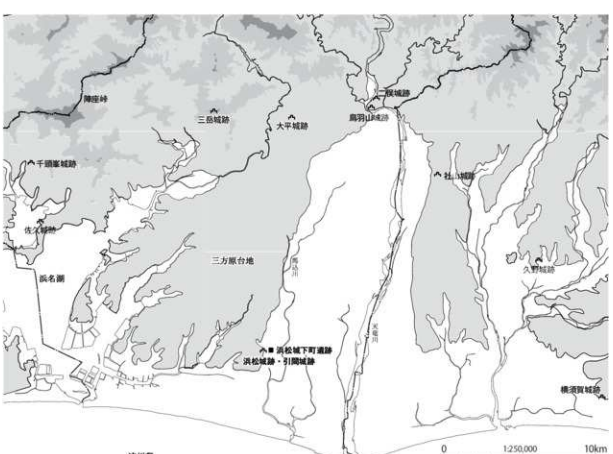


Fig.1 浜松城下町遺跡の位置

2　遺跡周辺の環境

（1）地理的環境

浜松城下町遺跡は、浜松城跡を中心とした三方原台地東縁部の丘陵から平野にかけて広く展開しており、遺跡の範囲は東西 1.8 ㎞、南北 1.5 ㎞に及ぶ。

今回の浜松城下町遺跡 13 次調査区は、浜松市中区八幡町地内に存在する。当地は天竜川平野に立地するが、西方には浜松城やその前身となる引間城が築かれた鴨江台地が存在し、その背後には三方原台地が広がっている。当地は中世の引間宿から近世の城下町の範囲に当たり、地理的には天竜川平野が三方原台地（鴨江台地）と接する地域と言える。今回の調査では、中世から近世だけではなく、7 世紀の遺構・遺物も確認され、古代の集落域でもあったと推定される。以下に当地の自然環境について、古代と中世以降の地形・地質を配慮して記述する。

浜松市の地形は大きく①天竜川平野、②三方原台地、③南部海岸平野、④浜名湖沿岸、⑤都田川平野、⑥北部山地に分けられるが、当遺跡の立地と関わるのは①と②である。

天竜川平野が天竜川の堆積作用により形成されたことは、広く知られるところであるが、三方原台地は古天竜川により、南部海岸平野は天竜川と遠州灘の沖積作用により形成されたものである。天竜川は長野県諏訪湖を源流とし、赤石・木曽両山脈の間の伊那谷を南下しながら、天竜峡から三遠南信の山岳地帯に入り深い渓谷を形成している。浜松市北部の山岳地帯を抜けると天竜区二俣町付近で大きく蛇行した後に平地部に至り、最下流部の平野南部においては砂洲を形成し、遠州灘に注いでいる。天竜川は長野・愛知・静岡 3 県にまたがり、総延長 210 ㎞を超える流域面積や流水量も多い日本有数の大河川として広く知られている。

天竜川平野は堀谷を扇央にした扇状地性平野で、南端部に三角洲が形成された平野である。天竜川は古くは、龍玉川、天の中川などと呼ばれてきた。天竜川の本流は『続日本紀』などの記事から古代においては、現在の天竜区二俣町鹿島から浜北区西部の浜北段丘の東縁を経て、浜北区小林、東区有玉西町付近を通り、現在の馬込川へと繋がっていたと推定されている。しかし、「遠江国池田荘立件状」（『平安遺文』3569）から 12 世紀後半には天竜川の本流が平野の東端部、磐田原台地側を流れていたと考えられている。「元亀三年天竜河図」（『甲陽軍鑑』所収）によると、戦国期の元亀 2 年（1571）頃には現在の天竜区二俣町鹿島付近で大天竜と小天竜に分かれ、それぞれ下流においてさらに二股に分流していたと推定される。小天竜が現在の馬込川、大天竜が天竜川に当たるが、近世に至り、築堤工事が継続的に行われ、本流は次第に平野の真ん中を直線的に流れる現在の流路に固定化された。天竜川は記録に残ったもののほかにも、幾度となく流路を変更してきたことは間違いなく、平野には複雑に入り組んだ微高地や後背湿地、旧河道の跡を古い地形図や土地利用図、土地法典などから読み取ることができる。当遺跡も分器稲荷から現在の早馬町及び野口町付近を経て、浜松八幡宮に至る南北に細長い微高地の北部に位置したと推定され、この地域を中世の引間宿とする説がある。天竜川平野における古代から中世の遺跡は、微高地とその周辺部で確認されている。

天竜川の東には磐田原台地、西に三方原台地があり、ともに砂岩、チャート、花崗岩、片麻岩、流紋岩、結晶片岩などで構成されており、現在の天竜川河床礫における礫組成と近いものである。両台地はともに更新世に古天竜川により運搬され堆積した砂礫層からなり、その後の隆起や海退に伴う開析により、両台地に分離したと考えられている。

三方原台地を構成する地質は、上層が三方原礫層でありその下層の東鴨江（浜松）累層を不整合に覆っている。東鴨江累層は中区高町、伊場、鴨江町で台地面をもち、これを鴨江台地と呼ばれ、こ

の台地末端を利用し浜松城が築かれている。東鴨江累層は三方原礫層よりも礫の風化が進んでおり、脆くなった礫を死石とかクサリ礫と言う場合がある。この累層には三方原台地西半においては佐浜泥層を伴う。

北部山地を別とすれば、浜松市の主要地域の中で東西約 10 ㎞、南北約 15 ㎞に及ぶ広大な面積を占めているのが三方原台地であり、北東部での標高は約 120 m、南部では約 30 mで、勾配約 5‰の極めて平坦な地形をなしている。三方原台地は、赤土が剥き出しになるところが多く、痩せた酸性土壌であり、しかも水に恵まれていないため、台地縁辺部を除く台地面での本格的な開発は近代以降実施された。天竜川平野に面した段丘面には東区下滝遺跡群や欠下平遺跡のように古代の主要集落が確認されているが、台地縁辺は密集型群集墳が群をなすなど古墳時代後期から飛鳥時代の墓域となっている。これらは段丘部に存在する古墳も含め三方原古墳群と総称されている。

（2）歴史的環境

原始・古代 浜松城跡及び浜松城下町遺跡周辺において、原始・古代の集落は確認できていないが、これまでの発掘調査で古墳時代後期～奈良時代の遺物が少量ながら出土していることから、小規模な集落が展開していた蓋然性は高い。また、当遺跡周辺の三方原台地縁辺部には、かつて後期古墳や横穴墓が展開していたことが知られており、浜松城内古墳（所在地不明）からは、馬具等が出土したとされる（静岡県 1930）ほか、作左山横穴では、須恵器・鉄器が出土している（向坂 1976）。

中 世 鎌倉時代には、浜松城下町の原形ともいえる引間宿が形成された。建治 3 年(1277)の『十六夜日記』には、「こよいはひくまのしゅくといふところにとゞまる、このところおほかたの名は、はま松とぞいひし」とある。また、万里集九は文明 17 年（1485）の『梅花無尽蔵』で、「引馬、市富、屋千区」と繁栄していた様子を記している。引間宿の具体的な位置は明らかではないが、江戸時代中期の『曳馬拾遺』には、「野口村、八幡村、早馬、元黙などの“元はま松”がかつての引馬の駅といわれた所である」とあり、当遺跡北東部である現在の野口町や八幡町周辺に推定されている。これらの地域には、近世城下町の区画とは異なる地割がみられる（太田 1996）。当遺跡の発掘調査においても、少量ながらも広範囲に山茶碗や陶器が出土しており、人々の暮らしが営まれていたことがわかる。

浜松城の前身である引間城は、引間宿推定地西側の小丘陵に立地する。16 世紀前葉成立の『宗長手記』によれば、吉良氏被官の巨見新左衛門尉によって築かれたといわれ、15 世紀代には整備されたと考えられる。永正 14 年（1517）には、大河内氏から今川氏親が引間城を奪い、飯尾氏を城主に任じた。引間城周辺には「椿屋敷」「蛇屋敷」などの地名がみられ、家臣の屋敷地の存在が想定される。

なお、引間城跡における表面採集や発掘調査で出土したかわらけ等の遺物も、15 世紀後半～ 16 世紀代に位置付けられ（和田 2016）、文献資料の年代を裏付けているが、引間城跡以外の浜松城城においても同時期の遺構・遺物は確認されており、徳川家康による城域拡充の以前から、浜松城城も引間城の一部として使われていた可能性が想定される（井口ほか 2016）。

元亀元年（1570）には、徳川家康が引間城に入城して浜松城と改称したとされる。『家忠日記』には、天正年間に幾度も浜松城の普請を行ったことが記されており、武田方との攻防に備えて城の拡充を図った様子がうかがえる。また、天正年間には、城周辺の寺社が移転している記録が多く残されており、城下の再編が行われたことも想定される。

天正 18 年（1590）には、豊臣方の堀尾吉晴が浜松城へ入城する。この段階で、高石垣や瓦葺建物等の整備が行われたとされ（加藤 1994）、城の姿は大きく変貌し、現在見られる浜松城の姿に近づいた。

近　世　慶長5年（1600）、堀尾吉晴が出雲へと移り、浜松城は徳川方の譜代大名が治めるようになると、再び城の姿は大きく変貌する。それまでの東正面から南正面の城となり、二の丸、三の丸の整備も進められた。城下町も、東海道の移設に伴い大きく改変された（太田 1996）。17 世紀前半以降の城下町の様相は、『遠江浜松城下絵図』等の史料からうかがい知ることができる（Fig.2 上）。

近現代　明治6年（1873）の廃城令によって、浜松城の建造物は解体され、土地は払い下げられた。城下町の景観は維持されたが、太平洋戦争時の空襲によりその多くが焼失した。戦後、街区の一部は残されているものの、大規模開発や区画整理等によって、往時の景観はほとんど失われている。

3　浜松城下町遺跡の調査履歴

調査の端緒　従来、浜松城下町遺跡は、「浜松宿」「旧引間宿推定地」という2つの遺跡として登録されており、いずれも市街地化により遺跡はほとんど残っていないと考えられてきた。そうした中で 2013 年以降、水道工事等の立会調査を行う中で、僅かながら遺物を包含する層が確認されるようになり、2015 年の 1 次調査へとつながった。その後 2016 年に、2 つの遺跡を統合・改称し、これまで範囲外であった部分も含めた「浜松城下町遺跡」として取り扱うこととなった。

1・2 次調査　都市計画道路植松伊左地線改良工事に伴う確認調査（1 次・2015 年）と本発掘調査（2 次・2015 年）である。戦国時代～江戸時代の遺構・遺物が確認されており、周辺に展開している「蛇屋敷」「椿屋敷」など武家の屋敷に関わる可能性が指摘されている（井口 2018）。

3・5 次調査　国道 257 号改良工事に伴う確認調査（3 次・2015 年）と本発掘調査（5 次・2016 年）である。城下町の南端部における調査で、近世城下町に伴う遺構・遺物とともに 16 世紀後半の遺構・遺物も認められ、城下町の形成期を示す可能性があるものとして重要である。また、奈良時代・鎌倉時代の遺物も一定量確認されていることも注目される（和田ほか 2017 年）。

4 次調査　都市計画道路植松伊左地線改良工事に伴う確認調査（4 次・2016 年）である。鎌倉時代・江戸時代の遺物が少量出土したが、湿地状の土層堆積であり、遺構は確認されなかった。

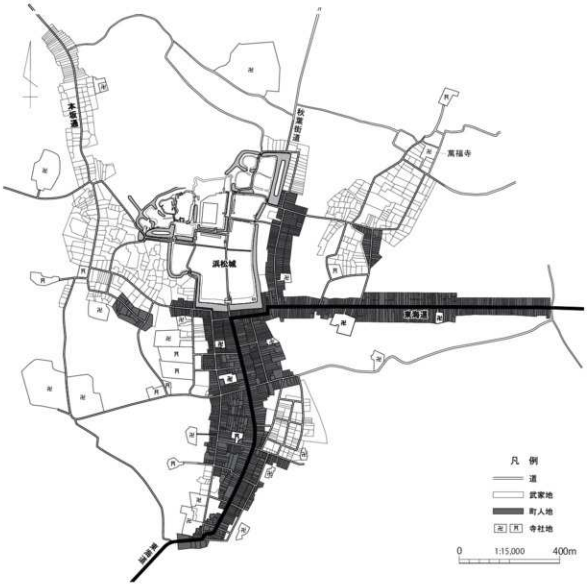
6 次調査　集合住宅建設に先立つ確認調査（6 次・2016 年）である。近現代の掘削が地下 2 m以上に及んでおり、遺構・遺物は確認されなかった。

7・8・11 次調査　国道 257 号改良工事に伴う確認調査（7 次・2016 年、8 次・2016 年）と本発掘調査（11 次・2016 年）である。城下町の南部にあたる近世東海道沿いの塩町・旅籠町・伝馬町を対象とした調査で、16 世紀後半～ 17 世紀初頭の城下町形成期に伴う遺構・遺物も認められ、17 世紀前半～ 19 世紀代の城下町成立期の遺構・遺物も多く確認された。また、7 ～ 8 世紀の遺物が確認されたほか、13 世紀代の城下町形成以前の遺構や遺物が確認された（鈴木ほか 2020 年）。

9 次調査　下水道工事に先立つ確認調査（9 次・2018 年）である。遺跡範囲の北東端に位置しており、遺構・遺物は確認されなかった。

12 次調査　集合住宅建設に伴う確認調査である。対象地は五社神社の東側隣接地にあたり、江戸時代の城下町を描いた絵図等からは神主の居住空間であったことがうかがえる。近現代の攪乱が顕著だが、攪乱を免れた部分では古代や近世の遺構が残存していることを確認した。

10・13 次調査　都市計画道路植松伊左地線改良工事に伴う確認調査（10 次・2019 年）である。鎌倉時代、戦国時代～江戸時代を主体とする遺構・遺物を確認しており、今回の 13 次調査が本調査（2020 年）である（Fig.2 下）。



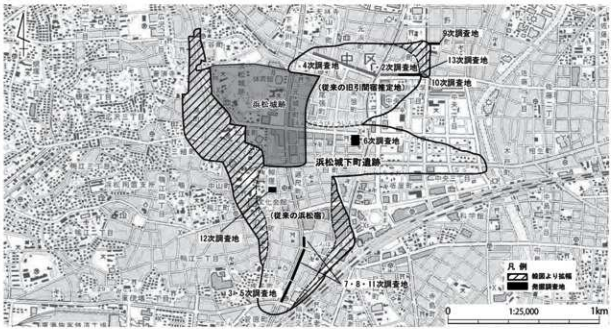


Fig.2 近世城下町の構造及び浜松城下町遺跡の調査履歴

4　調査の方法と経過

調査は、まず表土層、盛土層、攪乱層等を、バックホウを用いて取り除き、その後は人力で掘り下げて、遺構面上で遺構の検出を行った。調査区の設定に関しては、既設の水道管や下水道管などが調査範囲内に走っており、事前にその位置を確認できたものについては、破損することのないようあらかじめ調査範囲から除外した。一方掘削中に新たにみつかった管については、撤去が可能かどうか確認をとった上で対応した。調査範囲が道路あるいは住宅に隣接するため仮囲いを行い、必要に応じて控えをとり、さらに注意喚起の掲示物を設置して安全確保に努めた。

遺構の調査は、先述のとおり遺構面上で遺構検出を行い、遺構配置図を作成した。遺構の掘削は小穴（ピット）や土坑については、基本的に長軸に対し半截して断面写真や断面図をとった上で完掘作業を進めた。完掘した遺構は、完掘状況の写真撮影を行い、平面図を作成した。溝については、土層観察用のベルトを設定して掘削した。井戸など深さのある遺構については、可能な限り半截して断面写真撮影及び断面測量を行ったが、安全に掘削することが困難な深さに達したものについては、埋め戻しの際に人力やバックホウを用いて半截掘削して、安全を確保できた状態で調査を実施した。

遺物の取り上げは、層ごとに行った。遺構から出土した遺物は、遺構名ならびに層名を記載して取り上げた。遺存状況の良好なものについては、出土状況写真撮影及び出土状況図を作成したのちに、取り上げ番号を付して取り上げた。

図面の作成はトータルステーションを用いたデジタル測量を基本とし、デジタルカメラと編集ソフトを用いた写真測量も併用した。

写真撮影は、6×7判フィルムカメラ（モノクロフィルム・リバーサルフィルム）、デジタルカメラ（3000万画素以上）を使用した。リバーサルフィルムはスリーブ仕上げ、モノクロフィルムは現像とベタ焼を行った。デジタルデータは、JPEGデータを作成した。フィルム写真は、アルバムにフィルムとベタ焼を収納し、写真台帳を作成した。

浜松城下町遺跡は、これまで13次にわたる発掘調査が行われており、周知のとおり遺跡が広範囲にわたることが確認されている。今回の調査にあたっては、遺跡及び遺構の位置や遺物の出土地点を厳密に把握するために、11次調査（2019年）から用いられている地区割り（グリッド）の設定を行った。遺跡の位置は平面直角座標の第Ⅶ系（世界測地系）を使用して表示した。まず、Fig.3に示すとおり遺跡全体を網羅できるよう、アラビア数字で1～6までの番号を付し、1,000 m × 1,000 mで区画される大グリッドを設定した。これにそのグリッドを10等分して南北方向に北からA～Jまで、東西方向も西からA～Jまでの記号を付し、100 m× 100 mで区画される中グリッドとした。さらに中グリットを20等分して、南北方向が北から南へ1～20まで、東西方向が西から東へのa～tまでの記号を付し、5 m× 5 mで区画される小グリッドを設定した。

遺構の測量や遺物の取り上げは、この小グリッド単位で行い、遺物の取り上げは北西角の調査杭を使用した。グリッド名の記載及び呼称は、「3EAa1」とし遺物カードおよび平面図に記載した。

調査開始当初は、西の寺院駐車場側から東側へ実施する予定であった。しかし、季節的な事情や排土置場の問題もあり、東端より始めることとし、東側から西側へA～D区の4地区を設定し調査することとなり、計画よりもやや遅延気味に進んだ。この様に調査の順序は、A区から着手し、引き継いでB区の調査を行った。C区は、B区との間に市道があることや、調査区が住宅に接することから短期間での対応が必要であったため、調査区の一部をD区に組み入れて調査を行った。この

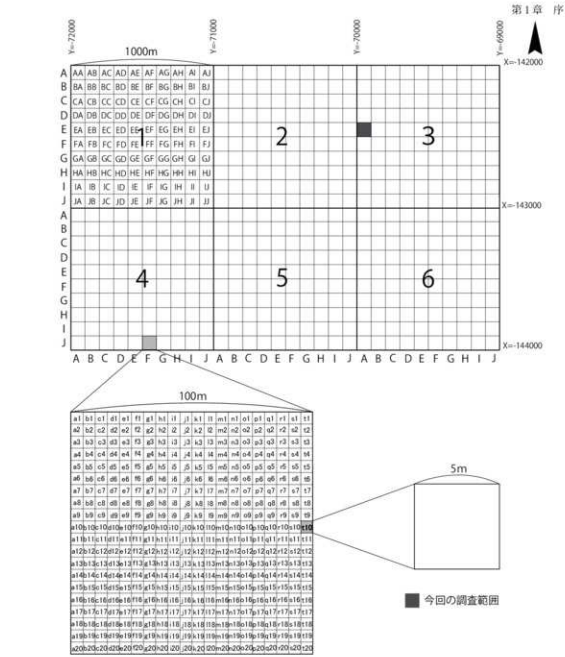


Fig.3 地区割模式図と今回の調査グリット配置

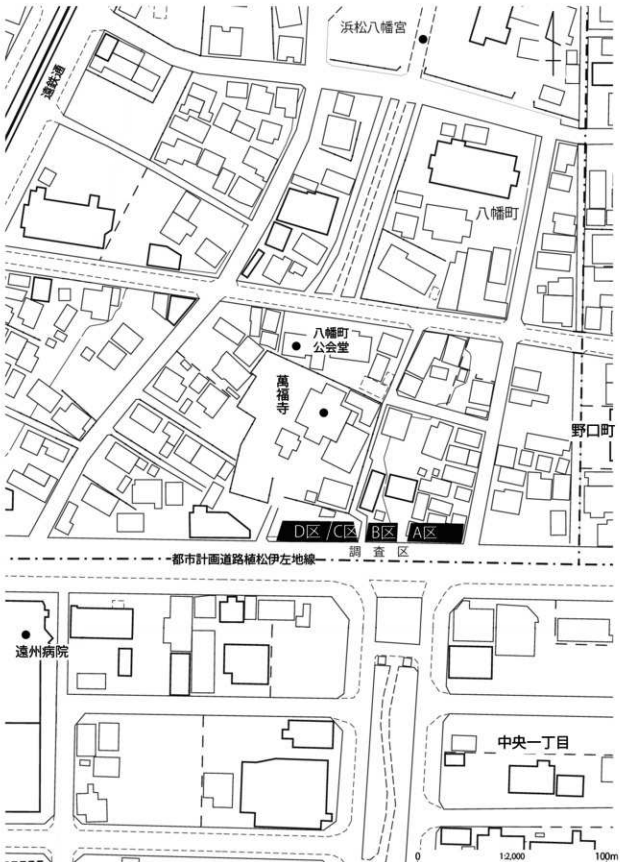
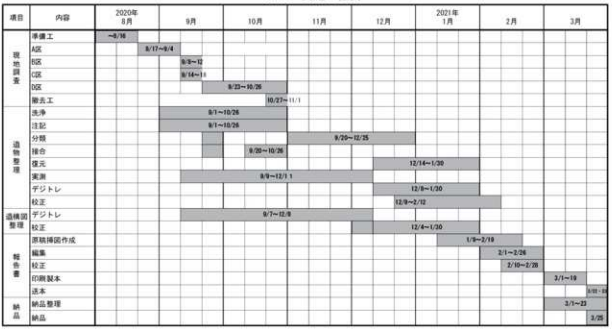

浜松八幡宮
遠鉄線
八幡町
八幡町
公会堂
萬福寺
野口町
D区
C区
B区
A区
調 査 区
都市計画道路植松伊左地線
遠州病院
中央一丁目
0
1:2,000
100m

Fig.4　調査区配置図

Tab.1　実施工程表



結果、D区の排土量が増加し、D区を西のD1区と東のD2区に二分割して調査を行った（Fig. 4）。

現地調査は8月17日から着手し、最終的には10月26日に全ての調査を完了した。また現地調査の間、遺物洗浄と遺物接合を調査と並行して行い終了した。

整理作業は、出土遺物の登録台帳作成から着手した。遺物注記は、登録台帳に基づいて登録ナンバーを面相筆を用いて行った。復元は残存状態の良い遺物を抽出して行い、素材は石膏を用いた。実測は手測りで行い、デジタル実測も併用した。実測図のトレースはデジタルトレースを行った。遺物写真撮影はデジタルカメラを使用して撮影し、集合写真はデジタルカメラに加え、フィルムカメラによる撮影も行った。報告書作成にあたっては、遺構図・壁面図、遺物実測図、挿図、遺物観察表、写真図版、執筆原稿等を用いて、デジタル編集を行った。その後、印刷製本を行い報告書として刊行するに至った。本業務における調査記録及び成果品、出土品を浜松市地域遺産センターに納め、全ての業務を完了した。

以下には、作業写真（Fig.5）と実施工程表（Tab.1）を掲げ、調査経過を示すものとする。

(引用参考文献)
第1章2（1）
静岡県 1971『土地分類基本調査　浜松　国土調査』
浜松市遺跡調査会 1981『浜松市天王中野遺跡』
浜松市博物館 1988『講座「天竜川」記録』
浜松市博物館 1995『特別展　浜松城のイメージ』
第1章2（2）
静岡県 1930『静岡県史』
向坂鋼二 1976「浜松市動物園内作左山横穴墳」『森町考古』10
太田好治 1996『浜松城跡　－考古学的調査の記録－』浜松市教育委員会
和田達也 2016『浜松における中世城館の調査－浜松城跡11次（引馬城）・伝松下屋敷2次－』浜松市教育委員会
井口智博ほか 2016『浜松城跡11』浜松市教育委員会
加藤理文 1994「浜松城をめぐる諸問題」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論文集

第１章３
井口智博 2018「浜松城下町遺跡 1・2・4 次調査報告」『平成 28 年度浜松市文化財調査報告』浜松市教育委員会
和田達也ほか 2017『浜松城下町遺跡』浜松市教育委員会
鈴木京太郎ほか 2020『浜松城下町遺跡 2』浜松市教育委員会

Fig.5　作業写真

第２章　調査成果

１　確認調査の成果

（１）確認調査の概要

今回の道路改良工事に先立つ確認調査（10 次調査）は、平成 31 年（2019）3 月 18 日・19 日の 2 日間にわたり実施した。調査は工事予定範囲に 9 箇所の調査坑を設定して実施し、調査面積の合計は約 36 ㎡である。

（２）基本層序と遺構検出面

土層の基本層序は、Ⅰ層：表土・盛土・攪乱土、Ⅱ層：灰褐色～暗灰褐色系シルト（炭化物含む、近世か）、Ⅲ層：褐色系シルト（古代～中世遺物包含層）、Ⅳ層：暗褐色系砂質シルト～微砂（基盤層）、Ⅴ層：砂～砂礫（基盤層）である。基盤層（Ⅳ層またはⅤ層）の上面は、標高 3.1 ～ 4.9 m と起伏があり、調査坑 3・4・8・9 付近では基盤層が高く遺物の出土は少量であった。一方で、基盤層の低い調査坑 1・2・5・6・7 ではⅢ層が存在し、須恵器・土師器・山茶碗・かわらけ・鉄器など、古代から近世の遺物を確認し、調査坑 7 では遺構の可能性がある落ち込みも検出した（Fig.6）。

確認調査の結果、全体的に遺構は希薄であったが、調査坑 6・7 を中心に一定量の遺物を確認することができたことから、当該調査坑付近を中心に本発掘調査が必要と判断した。

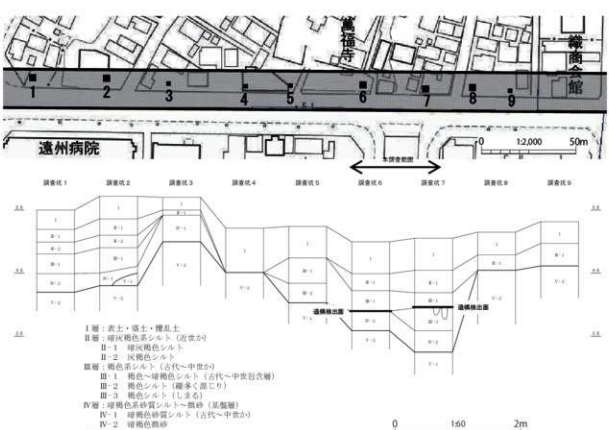


Fig.6　調査位置及び土層柱状図

2　本調査の成果

（1）概　要

前節の浜松城下町遺跡の確認調査（10次調査）における成果を踏まえて、今回の本調査（13次調査）の基本層序を、Ⅰ層：表土・盛土・撹乱土、Ⅱ層：灰褐色～暗灰褐色系砂質シルト（近世）、Ⅲ層：褐色系シルト（古代～中世の包含層）、Ⅳ層：基盤層の暗茶褐色系砂質シルト～微砂、Ⅴ層：基盤層の砂～砂礫に整理した。

調査区は、宅地化の影響ばかりでなく、戦時中の戦火によって焼失した建物等の廃棄物を埋めた処理土坑などが、調査区全域で散見された。このため、Ⅱ層の堆積層の一部が失われている地点も多くみられた。古代～中世の包含層は、東地区のA区西側で安定した堆積が見られるものの、西地区では概して10㎝程の堆積が検出されているにすぎない。また、西地区C区の西側3EAi13グリットでは、中世の盛土層が検出され、整地が行われていたことが窺えた。

遺構検出作業は、まずⅢ層上面で行ったが、遺構・遺物は希薄であった。このため、下層の基盤層Ⅳ層上面において再度遺構検出を実施したところ多数の遺構を検出した。このⅣ層上面で遺構検出を行っているため、上層からの新しい時期の遺構が混在している部分が見られることになった。このこともあり各遺構については、土層断面や埋土の状況などの検討を踏まえて、時期を識別するよう努めた。

なお、引間城や浜松城が立地する台地上とは異なり、沖積地に所在する遺跡は自然環境に大きく左右され、堆積が複雑な様相を呈していることから、壁面堆積層の慎重な観察を行った（Fig.8）。

今回検出した遺構の種類と数量は、道1条、土坑5基、柱穴26基、不明遺構10基、溝が最も多く30条、井戸2基である。地区で見ると、西地区のD区に井戸などの遺構があるのに対し、東地区のA区では比較的規模の大きな溝が検出された。

遺物では、古代から江戸時代にかけての土器、土製品、瓦、石製品、金属製品、石造品などが出土している。土器類の残存状況は、数点が完形である以外は、そのほとんどが破片である。

遺物の総点数は、Tab.2の2,586点で、その内訳は古代740点28.6%、中世1,671点64.7%、近世175点6.7%であり、中世の遺物の破片点数が最も多い。これは、出土品に中世の土師質土器が単に多いのではなく、もろく壊れやすいため、数量的に多くなっているものと見られる。出土状態では、溝や土坑などの遺構に伴うものは少なく、包含層から出土したものが多い。図化した遺物は、遺構が明らかなものを中心に行ったが、調査地点の特徴を示す遺物は、遺構外出土遺物として図化した。なお、掲載遺物については、調査区、遺構番号、器種、器形、産地、残存率、法量、色調、時期等を遺物観察表（Tab.6）に示した。

（2）東地区の遺構と遺物

ⅰ）概　要

東地区において、道1条、土坑1基、柱穴12基、不明遺構6基、溝10条を検出した（Fig.9）。A区では、近世の不明遺構が多く検出されているが、他の遺構と切り合っているため全形が分かるものはない。また、規模の大きな平行する溝が南北に延びている点が、特筆される。B区は柱穴が調査区の南側中央部にまとまって見られる。

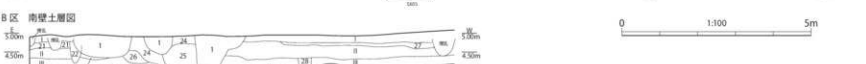
遺物は総点数1,057点で、A区で561点、B区で496点を数える（Tab.2）。その内訳は、古代119点、中世835点、近世103点で、中世の遺物が79%を占める。中世は前期の山茶碗類が164点15.5%で、

Fig.7　遺構全体図

Fig. 8 土層図 南壁土層図

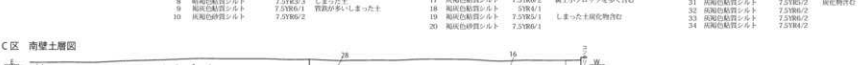
A区 南壁土層図

B区 南壁土層図



0 1:100 5m

C区 南壁土層図



D区 南壁土層図

I	表土・盛土・攪乱土	
II	灰褐色砂質シルト	7.5YR5/2
III	褐色粘質シルト	7.5YR4/3
IV	暗茶褐色砂質シルト	7.5YR3/4

1	攪乱層	
2	灰色粘質シルト	N5/
3	黒褐色粘質シルト	7.5YR3/2
4	にぶい赤褐色粘質シルト	5YR4/3
5	にぶい赤褐色粘質シルト	5YR4/3 礫を含む
6	褐灰色粘質シルト	10YR6/1
7	にぶい赤褐色粘質シルト	5YR4/3
8	暗褐色粘質シルト	7.5YR3/3 しまったた
9	褐灰色粘質シルト	7.5YR6/1 管散が多いしまったた
10	灰褐色砂質シルト	7.5YR6/2

11	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2
12	灰色粘質シルト	N5/
13	灰褐色砂質シルト	7.5YR5/2
14	褐色粘質シルト	7.5YR4/3
15	灰褐色粘質シルト	7.5YR6/2
16	褐色粘質シルト	7.5YR4/3
17	灰褐色粘質シルト	7.5YR6/2 黄土小ブロックを多く含む
18	褐灰色粘質シルト	5YR4/1
19	褐灰色粘質シルト	7.5YR5/1 しまったた炭化物含む
20	褐灰色砂質シルト	7.5YR6/1

21	灰色砂	N6/
22	明褐灰色砂	7.5YR7/1
23	褐灰色砂質シルト	7.5YR6/1
24	にぶい褐色粘質シルト	7.5YR5/3 しまりないま
25	褐灰色粘質シルト	7.5YR6/1 砂質じり
26	褐色粘質シルト	7.5YR4/3 しまりないま
27	灰白色砂	10YR7/1
28	黒褐色粘質シルト	7.5YR3/2
29	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2
30	にぶい褐色粘質シルト	7.5YR5/3
31	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2 炭化物含む
32	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2
33	灰褐色粘質シルト	7.5YR6/2
34	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2

I	表土・攪乱	
II	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2
III	褐色粘質シルト	7.5YR4/3
IV	にぶい褐色砂質シルト	7.5YR5/4

1	攪乱	
2	灰褐色粘質シルト	10YR6/2（整地層） 固くしまったた
3	にぶい黄橙色粘質シルト	10YR6/4 ブロック混じり（盛土）
4	暗褐色粘質シルト	7.5YR3/3
5	褐灰色粘質シルト	7.5YR4/1
6	黒灰色砂	2.5Y6/1
7	灰褐色粘質シルト	7.5YR6/2 混じりのないま
8	にぶい褐色粘質シルト	7.5YR4/2
9	褐灰色粘質シルト	7.5YR5/1
10	灰褐色粘質シルト	7.5YR6/2 しまったた
11	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2 しまりないま
12	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2 しまりないま

13	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2 固くしまったた
14	灰黄褐色粘質シルト	10YR5/2 しまったた
15	灰褐色粘質シルト	7.5YR6/2 小礫砂を含む粘土ブロック混じりのま
16	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2 混じりのないま（2色と同一か？）
17	黒褐色粘質シルト	10YR3/2 しまりのあるま
18	暗褐色粘質シルト	7.5YR3/4 小礫砂を含む しまりのある土
19	黒褐色粘質シルト	10YR3/2 ぢや砂混じり
20	褐色粘質シルト	7.5YR5/2 小石や土器を含む
21	褐色砂質シルト	7.5YR4/4 小礫石を含む 遺品は管散が見られる
22	褐色砂質シルト	7.5YR6/1
23	灰褐色砂	7.5YR6/2
24	灰褐色砂質シルト	7.5YR6/2
25	褐色砂質シルト	5YR6/1 しまったた
26	暗褐色粘質シルト	7.5YR4/3 しまったた
27	にぶい赤褐色砂質シルト	5YR5/3 遺品は固く良分を含む
28	にぶい褐色砂質シルト	7.5YR6/1 管散がブロック状に見られる

29	黒灰色砂	2.5YR6/1 小石混じり 管散が強くしまったた
30	暗褐色粘質シルト	7.5YR3/3 砂ブロック混じり しまったた 整地層か？ 小石含む
31	灰褐色粘質シルト	5YR6/2
32	灰褐色粘質シルト	7.5YR6/2 石混じり粘土ブロック状を呈する
33	暗褐色粘質シルト	7.5YR3/3 混じりのないま で固くしまっている
34	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2 混じりのないま
35	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2
36	暗褐色粘質シルト	7.5YR3/3 砂ブロックを含む
37	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2 砂ブロック混じりで石を含む
38	灰褐色粘質シルト	10YR4/2 管散が強く固くしまっている
39	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2 しまりのないま
40	暗褐色粘質シルト	7.5YR4/3 しまったた
41	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2 混ざりのないしまったた
42	赤灰色砂	2.5YR6/1 固くしまったた
43	褐灰色粘質シルト	7.5YR6/1 固くしまったた
44	褐灰色砂質シルト	7.5YR6/1 しまりのないま

45	褐灰色砂質シルト	5YR6/1 しまりのないま
46	褐灰色粘質シルト	7.5YR6/1 炭・石混じり
47	黒色粘質シルト	7.5YR2/1 しまりのないま
48	褐灰色粘質シルト	7.5YR5/1 しまりのないま
49	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2 しまりのないま
50	褐灰色粘質シルト	7.5YR5/1 石混じり(炭化)
51	褐灰色粘質シルト	7.5YR5/1 しまりのないま
52	褐灰色砂質シルト	5YR6/1 小礫砂
53	褐灰色粘質シルト	7.5YR5/2 しまったた
54	褐灰色砂質シルト	5YR6/1
55	灰褐色砂質シルト	7.5YR6/2
56	褐灰色粘質シルト	7.5YR6/2 3cm大の石を含む
57	にぶい褐色粘質シルト	7.5YR5/4 固くしまったた
58	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2 5XR6/3当浮層 しまったた
59	黒褐色粘質シルト	7.5YR3/2 固くしまったた 管散が多い
60	灰色粘質シルト	N6/ 管散混じり

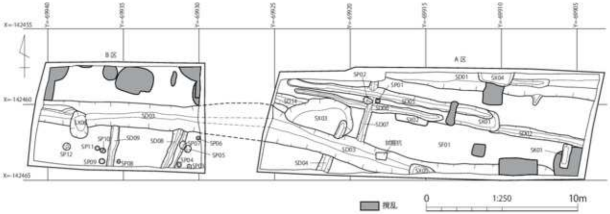


Fig.9　東地区 遺構全体図

12 世紀後半から 13 世紀前半にまとまっており、遺構の時期を反映している。後期では、土師質土器鍋類が 467 点 44.2%と半数近くを占め、15 世紀後半から 16 世紀にまとまりがある。また、古瀬戸後期の碗皿類をはじめ擂鉢などが、15 世紀中葉から後半に一定量まとまって出土している。近世は、数量が少ないものの、江戸後期の製品が見られる。

ⅱ）土坑 SK

SK01（Fig.10）　A 区の東南部隅に位置する。平面形は、東壁面が攪乱で一部削平されるが、西壁面はほぼまっ直ぐに掘り込んでおり、長方形と推定される。底面は平らで、断面は二段形を呈する。重複関係は、SD02 を切る。規模は長軸 1.59 m、短軸 0.62 m、深さ 0.41 m に対して、下面は長軸 1.15 m、短軸 0.3 m を測る。長軸方向は N-19°-E である。土坑内には石が敷き詰められていた。石の大きさは、10 cm前後で全て円礫の河原石である。石敷きには規則性は無く、土器などの遺物も混在する粗雑な整地である。また、遺構の性格は、平面の形状や石敷きを伴うことから、埋葬施設ではないかと思われる。

遺物は須恵器・中世陶器・近世陶磁器・土師質土器などが 41 点出土しているが、いずれも破片で、円礫内や埋土内に含まれていたものである。その内訳は、須恵器 6 点、山茶碗 7 点、陶磁器は常滑産 1 点、古瀬戸産 4 点、近世瀬戸美濃産 9 点、初山産 1 点、近世志戸呂産 1 点、肥前産 4 点、土師質土器かわらけ 3 点、瓦 4 点、その他（産地不明）1 点である。比較的形状が残っているもの 14 点を図示した。1 と 2 は山茶碗で、渥美湖西産の 12 世紀後半から 13 世紀前半と考えられる。3 は初山産の壺である。4 と 5 は肥前産で、4 は 18 世紀後半から 19 世紀前半の蛇ノ目凹型高台の磁器の小皿である。5 は陶器の中鉢で、17 世紀後半と考えられる。6 ～ 9 は瀬戸美濃産の陶器で、碗皿類・擂鉢・瓶などの器形がある。6 は柳茶碗である。7 は長石釉の皿で、8 は体部内面に 9 条の擂目を施す擂鉢である。9 は口縁部が欠損しているが瓶と考えられ、全面に鉄釉が施されている。10 ～ 12 は土師質土器かわらけで、10 以外は手づくね成形である。13 は丸瓦で下層より出土している。凸面には幅広い板ナデ、凹面に細かな布目に、コビキ A 技法の痕跡が残る。14 は陶器片を平らに磨いて加工していることから、砥石に転用したものと考えられる。

時期は、出土遺物の特徴から 19 世紀前半の江戸末期と考えられる。

ⅲ）柱穴・小穴 SP

SP01（Fig.11）　A 区の中央部に位置する。平面形は円形、断面形は深い皿状を呈する。重複関係は、

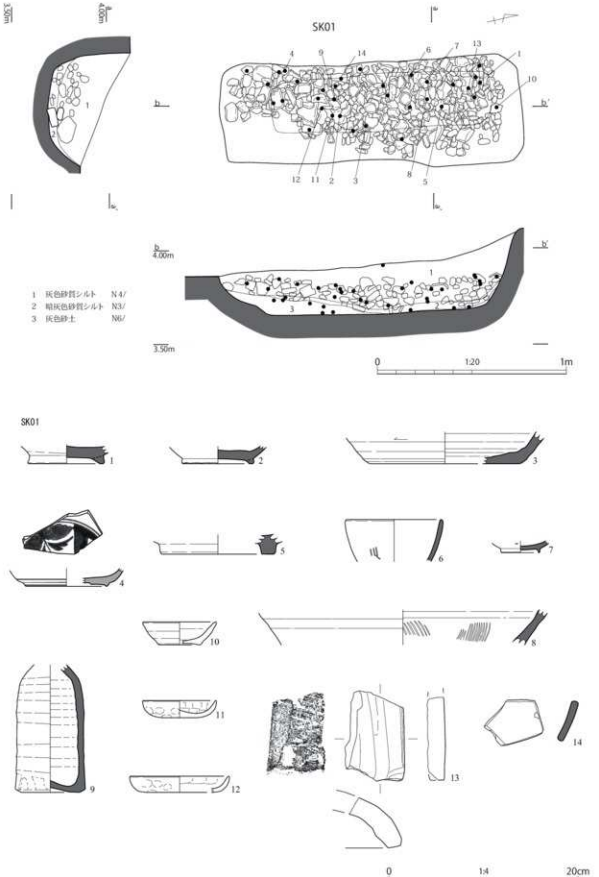


Fig.10　A区 SK01 遺構図・出土遺物

SD07を切っている。規模は直径0.32 m、深さ0.07 mを測る。

遺物は出土していない。

時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SP02（Fig.11）　A区の中央部で、隣接するSP01の西側に位置する。平面形は楕円形、断面形は検出面から、浅く皿状を呈する。重複関係は、SD07・SD06を切っている。規模は長軸0.62 m、短軸0.41 m、深さ0.16 mを測る。長軸方向はN-67°-Wである。

遺物は渥美湖西産甕が1点出土しているが、小破片のため図示はしていない。

時期は、立地条件や埋土の特徴から近世と考えられる。

SP03（Fig.11）　B区の東部南壁際に位置し、遺構南側は調査区外に延びている。平面形は楕円形と推測され、断面形はU字形を呈する。重複関係はないが、西壁側に柱痕跡が認められる。規模は長軸0.26 m、短軸0.24 m、深さ0.21 mを測る。長軸方向はN-2°-Eである。

遺物は、土師器・舶載陶磁器が3点出土しており、うち1点を図示した。15は龍泉窯系の青磁碗である。外面には蓮弁文が施される。B2類の範疇で、14世紀末から15世紀と判断される。土師器は古代の甕である。

時期は、出土遺物の特徴から中世後期と考えられる。

SP04（Fig.11）　B区の南東でSP03の西側に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.36 m、短軸0.28 m、深さ0.1 mを測る。長軸方向はN-2°-Eである。

遺物は土師質土器類が4点出土しているが、小破片のため図示はしていない。土器は内耳鍋とロクロ成形のかわらけからなる。

時期は、出土遺物の特徴から15世紀後半から16世紀と考えられる。

SP05（Fig.11）　B区の東部南側に位置する。平面形は楕円形と推測され、断面形は二段形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.5 m、短軸0.39 m、深さ0.27 mを測る。長軸方向はN-35°-Eである。

遺物は、土師質土器の内耳鍋4点と土師器1点の5点出土しており、うち1点を図示した。16は手づくね成形のかわらけである。口径10 cmと小型なもので、焼成は良好で橙色を呈する。

時期は、出土遺物の特徴から16世紀と考えられる。

SP06（Fig.11）　B区の東壁際中央に位置する。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.26 m、短軸0.22 m、深さ0.2 mを測る。長軸方向はN-43°-Eである。

遺物は土師質土器かわらけが1点出土しているが、小破片のため図示はしていない。

時期は、出土遺物や埋土の特徴から15世紀後半から16世紀と考えられる。

SP07（Fig.11）　B区の東部中央のSP05の西側に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。柱痕跡が南壁側において確認され、その底面には10 cm程の根石が検出されている。石は河原石で、表面に火を受けて黒く変色していた。重複関係はSD08を切っている。規模は長軸0.52 m、短軸0.33 m、深さ0.19 mを測る。長軸方向はN-21°-Eである。

遺物は土師質土器かわらけが1点出土しているが、小破片のため図示はしていない。

時期は、出土遺物や埋土の特徴から、15世紀後半から16世紀と考えられる。

SP08（Fig.11）　B区の南部中央の南壁近くに位置する。平面形は楕円形、断面形は皿状を呈する。重複関係はない。規模は長軸0.26 m、短軸0.24 m、深さ0.07 mを測る。長軸方向はN-15°-Eである。

遺物は出土していない。

時期は、中世後期と考えられる。

SP09（Fig.11）　B区の南部中央の南壁近くSD09の西に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆

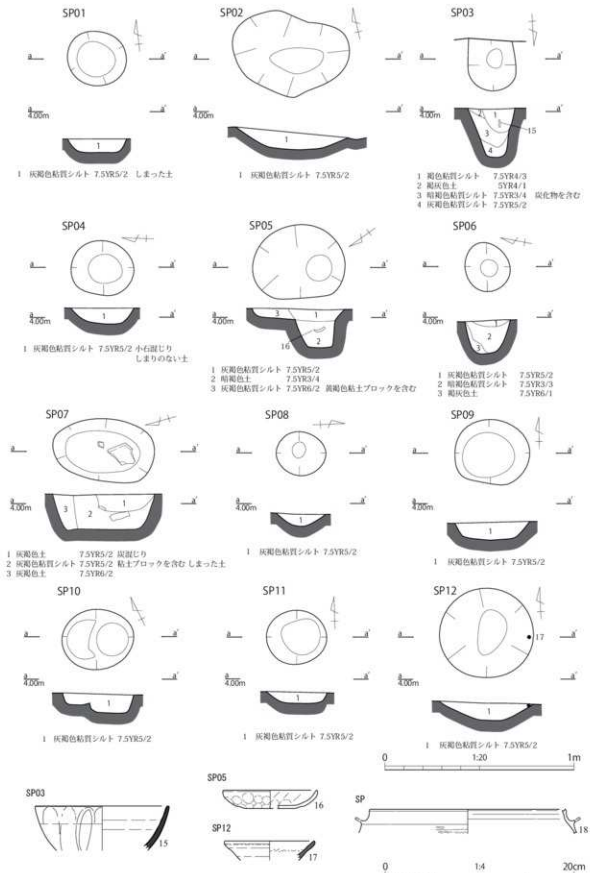


Fig.11 A・B 区 SP01 ～ 12 遺構図・出土遺物

台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.4 m、短軸 0.34 m、深さ 0.09 mを測る。長軸方向は N-16°-E である。

遺物は出土していない。

時期は、中世後期と考えられる。

SP10(Fig.11)　B区の南部中央の SP11 の東に位置する。平面形は楕円形、断面形は二段形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.38 m、短軸 0.34 m、深さ 0.09 mを測る。長軸方向は N-66°-W である。

遺物は出土していない。

時期は、15 世紀後半から 16 世紀と推測される。

SP11(Fig.11)　B区の南部中央の SP10 の西に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.31 m、短軸 0.29 m、深さ 0.06 mを測る。長軸方向は N-78°-E である。

遺物は出土していない。

時期は、SP10 と同様に周辺の様相から、15 世紀後半から 16 世紀と考えられる。

SP12(Fig.11)　B区の南部西に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.49 m、短軸 0.48 m、深さ 0.11 mを測る。長軸方向は N-9°-E である。

遺物は、土師器・中世陶器・土師質土器が 7 点出土しており、うち 1 点を図示した。17 は志戸呂産緑釉小皿の破片である。古瀬戸後期Ⅳ期古段階と考えられる。他の遺物は土師器甕 3 点と土師質土器内耳鍋 3 点となっている。

時期は、志戸呂産の陶器が上面から出土していることを考慮すれば、15 世紀末から 16 世紀前半と捉えられる。

ⅳ）不明遺構 SX

SX01（Fig.12）　A区の中央部に位置する。平面形は、西側が後世の攪乱を受け、東側で SD02 を切り、北側の掘り込みが SD05 に切られているが、残存する部分より隅丸方形と考えられる。断面形は浅逆台形を呈する。規模は長軸 2.98 m、短軸 1.29 m、深さ 0.3 mを測る。長軸方向は N-32°-W である。

遺物は須恵器・土師器・中世陶器・土師質土器などが 57 点出土しており、内 5 点を図示した。遺物内訳点数では、古瀬戸後期Ⅱ期天目茶碗と大窯期擂鉢の 2 点の陶器があるが、山茶碗類は 25 点と最も多い。19 は須恵器壺で 7 世紀のもので、他にも 7 世紀から 8 世紀の破片が出土している。20 ～ 22 は山茶碗で、渥美湖西産の 2a 期から 3a 期の製品である。21 の山茶碗は墨書土器で、底部に「門」の字が見える。23 は土師質土器手づくね成形のかわらけで中世後期のものである。

時期は、かわらけと古瀬戸製品がいずれも上層埋土から出土していることから、SD05 に関連する混入品と考えられる。これに対し、山茶碗類は遺構の下層から出土していることから、12 世紀後半から 13 世紀前半と考えられる。

SX02（Fig.12）　A区の中央部 SX01 の西に位置する。平面形は南側の掘方より方形と推定され、断面形は不明である。重複関係は、SD06 に切られる。規模は長軸 2.18 m、短軸 0.48 m、深さ 0.11 mを測る。長軸方向は N-80°-W である。

遺物は山茶碗類が 2 点出土しており、それを図示した。山茶碗類は渥美湖西産と考えられ、24 は小碗の底部で、高台の形状より 2b 期の製品である。25 は山茶碗で、高台にモミガラ痕が顕著に残るやや粗雑な作りである。

時期は、出土遺物から、12 世紀後半から 13 世紀前半と考えられる。

SX03（Fig.13）　A区の西部中央に位置する。平面形は残存部分から楕円形と推定される。断面形

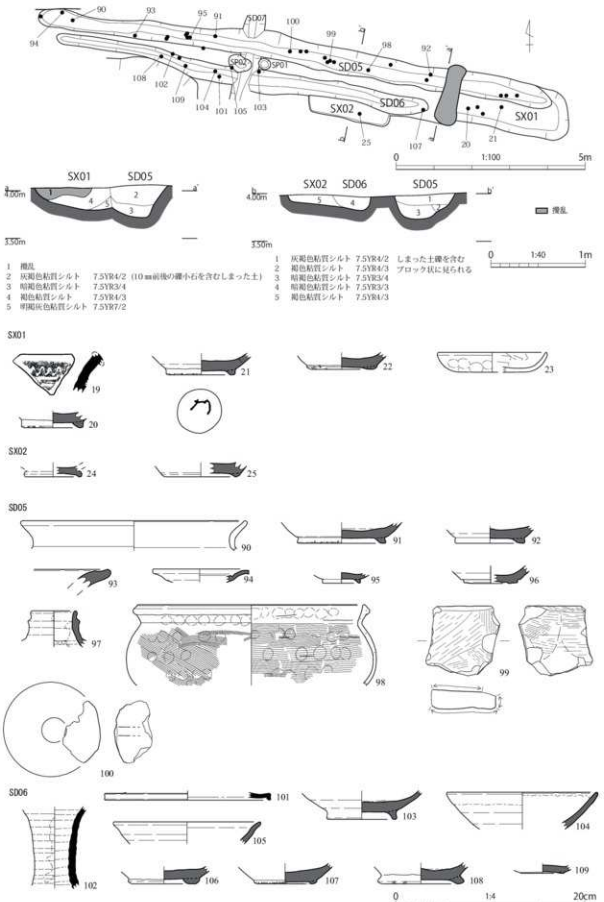


Fig.12 A区SX01・02、SD05・06遺構図・出土遺物

は皿形である。重複関係は、SD03 に切られ、SD04 と SD14 を切る。規模は長軸 4.24 m、短軸 1.28 m、深さ 0.58 m を測る。長軸方向は N-80°-E である。

遺物は須恵器 11 点、中世陶器 13 点、土師質土器 50 点の計 74 点が出土しており、内 5 点を図示した。土師質土器はかわらけと鍋類に分けられるが、後者が 46 点を占める。山茶碗類は 9 点を数え、小皿 1 点以外全て碗で、下層より出土している。26 は須恵器有台坏身である。27 は湯美湖西産の片口鉢Ⅰ類の製品である。28 は志戸呂産擂鉢で、15 世紀後半の製品である。29・30 は内耳鍋である。

時期は、出土遺物が 8 世紀から 16 世紀の土器を含み、遺構の重複関係から中世後期の時期と捉えたい。

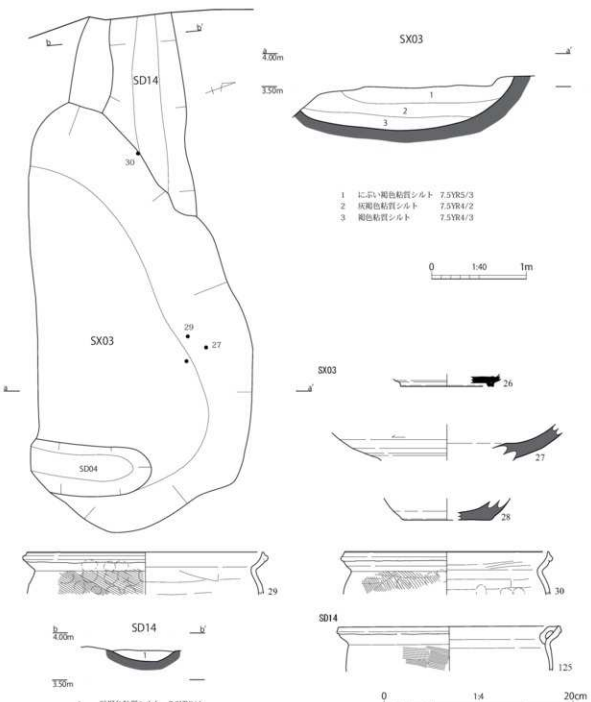


Fig.13　A 区 SX03・SD14 遺構図・出土遺物

SX04（Fig.14） A区の北壁際やや東に位置し、北側は調査区外に延びているため未調査である。平面形は楕円形と推定される。断面形は方形である。重複関係は、SD01を切る。規模は長軸2.35 m、短軸0.88 m、深さ0.86 mを測る。長軸方向はN-82°-Wである。埋土の特徴から水溜め遺構と考えられる。

遺物は須恵器1点、中世陶磁器類44点の計52点が出土しており、近世陶磁器が主体をなす。そのうち図示できたのは17点である。31は須恵器坏身で7世紀の製品である。32は初山産の匣鉢で、大窯第4段階と考えられる。植木鉢として使用か。33～35は肥前産の磁器で、33は広東碗の特徴を示し、1780年から1810年の製品と考えられる。34と35は呉須による染付である。18世紀後半から19世紀前葉と考えられる。36は口縁部を内湾させる腰張形の磁器小碗である。文様は全て呉須描きである。37～40・43・45～47は瀬戸美濃産の製品で、37～39は磁器で他は陶器である。37は瀬戸産の端反碗で、19世紀前半と考えられる。38は小型の腰丸湯呑み碗で、外面に花文が施されている。39は小杯で、文様は呉須描きである。40は太白手小皿で、見込みに梅花文が施されている。登窯第10小期と考えられる。41は志戸呂産の鉄釉掛けされた小鉢である。42は備前の中壺で外面体部下半にカキ目が見られる。43は美濃産の壺か瓶の底部で、丁寧にケズリ調整された登窯第7・8小期の製品と考えられる。44は信楽産の土瓶の底部で長石釉が施されている。45は美濃産の中瓶、べこかん形徳利で、登窯第8・9小期の18世紀後葉から19世紀前葉である。46は遺構の底面から出土している美濃産の行平である。全面に灰釉が施され、体部中央が張り、底部に向かって内湾する。また、底部から体部下半部にケズリ調整がみられ、三方向に足が付される。注口は折り返され玉縁状を呈する登窯第11小期の19世紀中葉と考えられる。47は小形な秉燭で、体部の外面が直線的に開き内面を曲線的とし、内外面に灰釉を施す特徴などから、登窯第11小期と比定される。

遺構の廃棄時期は、19世紀中葉と捉えたい。

SX05（Fig.15） A区の南壁際中央に位置し、南側は調査区外に延びていたため未調査である。平面形は楕円形と推定され、断面は底面が平らな逆台形を呈する。西壁は直立気味であり、東壁面で斜めに直線的に開く。重複関係は、SD03を切る。規模は長軸1.69 m、短軸0.66 m、深さ0.96 mを測る。水溜め遺構と推測される。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・近世陶磁器・土師質土器など、8点が出土しており、うち3点を図示した。48は瀬戸産の蛇ノ目凹型高台の磁器小皿で、内面に花草文が呉須で描かれる。高台は低く台形を呈し、体部から口縁部にかけて緩やかに内湾しながら延びる。時期は19世紀前半と考えられる。49は肥前産染付の磁器小皿である。50は土師質土器焙烙の破片で、口縁端部を平な端面を有し、底部は平らで広い。器高は低く、体部は直立気味に立ち、内外面を横ナデ調整している。16世紀の製品であろう。

遺構の構築時期は、江戸後期の内と考えられる。

SX06（Fig.15） B区の西中央に位置する。平面形は北側から東側の掘方がSD03により一部不明であるが、楕円形と推測される。断面は逆台形を呈する。重複関係は、SD03に切られる。規模は長軸1.8 m、短軸1.18 m、深さ0.7 mを測る。長軸方向はN-4°-Eである。

遺物は中世陶器・土師質土器の鍋類とかわらけで17点が出土しており、うち4点を図示した。51は湿美湖西産の山茶碗の底部である。高台端部には砂目が見られ13世紀前半と考えられる。52と53は土師質土器かわらけである。かわらけはロクロ成形で灰白色をなし、今回の出土のかわらけの中では、大型なものである。15世紀後半と考えられる。54は内耳鍋で、この器種が11点出土している。

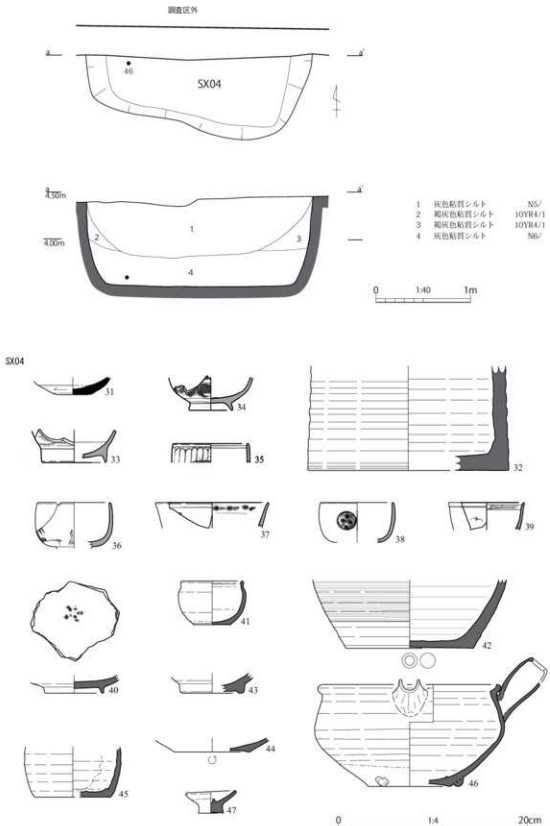


Fig.14　A区 SX04 遺構図・出土遺物

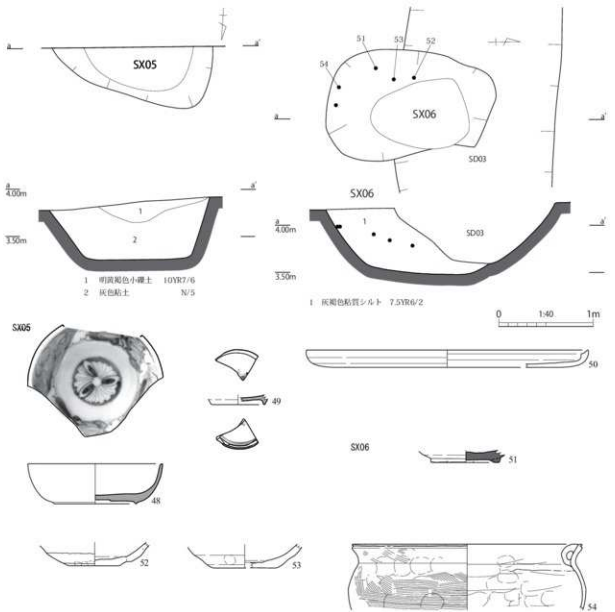


Fig.15　A 区 SX05、B 区 SX06 遺構図・出土遺物

くの字状に外反する口縁部に、粘土を内側に張り付け把手を設けている。体部は口縁部より外に張り出し、円形を呈し、外面に細かなハケ目と指ナデ、内面は板ナデと指ナデの調整が施されている。口縁端部は、外に折り返しナデ調整されており、A 類に属す。内耳鍋の中では古いタイプと考えられる。

時期は、出土遺物より 15 世紀後半と考えられる。なお、遺物の多くは、埋土の中間よりも上部にまとまって出土しており、掘削年代は遡る可能性はある。

v）溝 SD

SD01（Fig.16）　A 区の北部で検出された東西方向の溝である。調査区北壁際にあり、北側の肩も調査区外となっているため、全体像は不明である。重複関係は、SX04 に切られる。規模は長軸 14.08 m、短軸 1.68 m以上、深さ 0.46 mを測る。長軸方向は N-85°-W である。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器など 55 点出土し、山茶碗が 35 点存在した。その内 11 点を図示した。

55 と 56 は土師器甕の口縁部である。55 は口縁部を水平になるほど折り曲げ、口縁端部をわずかに引き上げている。56 は口縁部をくの字に折り曲げ、端部は単純に丸く仕上げている。両方とも体部内外面にハケ調整し、口縁部に横ナデ調整を施している。口縁部の特徴から、55 が新しく 8 世紀後半、56 が 7 世紀と考えられる。57 ～ 64 は山茶碗類である。57 は中碗で、高台の作りは丁寧で高いなど、古い様相を呈している。1a 期の製品である。58 は小碗の底部でススが付着している。59 は高台が三角形で直立気味に付けられている。古い要素も見られるが 2a 期であろう。60 と 61 は高台断面が四角形で、端部にモミガラ痕が顕著に残る。高台の貼り付けは、少し粗雑化が認められるなど、2b 期

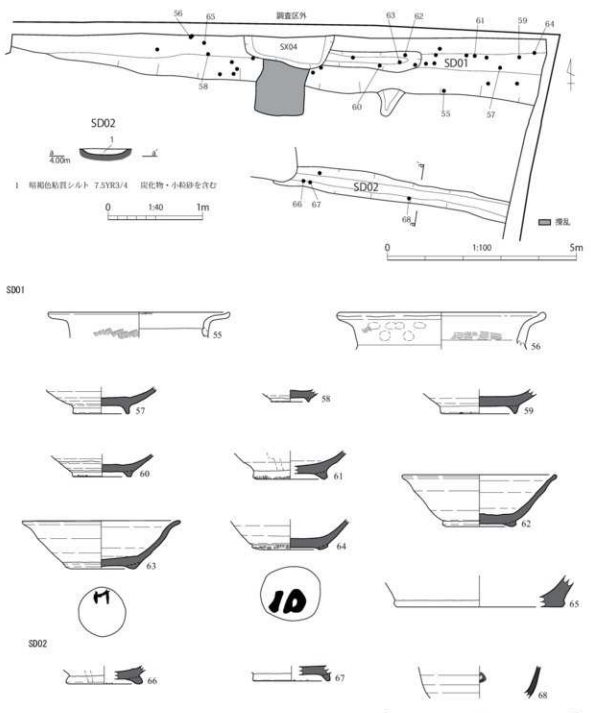


Fig.16　A 区 SD01・02 遺構図・出土遺物

と考えられる。62は口縁部を大きく外反し、端部を丸く仕上げている。高台は潰れて低くなっている。63は墨書土器で、内湾した体部から口縁部を強く外反させている。器高が低く偏平化し、高台は低く端部を面取りする。64は高台が低く、外側に開くように張り付けられている。底部外面に墨書が見られるが、判読できない。62～64の山茶碗は、形態から3a期と考えられる。65は渥美湖西産の甕である。山茶碗と同じ時期である。

時期は、他の遺構との関連から中世と捉えられる。

SD02（Fig.16） A区の東部中央に位置し、東側は調査区外に延びる。平面形はSD01と平行して走る東西方向の溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は4m前後で、東西の高低差はない。埋土は固く締まった粘質シルトで、小石を含んでいた。重複関係は、西側をSX01に切られる。規模は長軸6.22m、短軸0.5～0.7m、深さ0.06mを測る。長軸方向はN-81°-Wである。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・舶載陶磁器・土師質土器など11点が出土し、うち3点を図示した。66と67は山茶碗の底部である。66は体部外面に灰釉漬け掛けが認められる。高台が外側にハの字形に付けられ、端部を丸く仕上げるなどの特徴が、12世紀後半と考えられる。67は高台が四角形で、端部にモミガラ痕が顕著に残る。2a期と推定される。68は龍泉窯系の青磁碗で体部内面に劃花文が施される。A4類に属する12世紀後半から13世紀前葉のものである。

時期は、出土遺物より中世前期と考えられる。

SD03（Fig.17） A区からB区にわたって検出された、規模の大きい東西方向の溝である。A区では調査区中央部から、東側は肩の検出に留まり、更に東壁側では調査区外に延びる。B区では西壁側が調査区外に及ぶ。溝は緩やかにカーブを描くが、A区中央より西側は直線的に延び、B区では調査区の東西方向の長軸に平行する。底面は、A区中央で標高3.18m、B区中央で3.29m、西側壁面側で3.53mであり、東に向かって緩やかに傾斜をしている。断面は逆台形を呈する。埋土状況では、一度埋まった後、掘り返した痕跡が見られた。また、底面には沼地性の粘土が堆積しており、灌漑の機能を有していた溝と考えられる。重複関係は、SX06を切り、SX05に切られる。規模は長軸34.3m、短軸1.63m、深さ0.7mを測る。長軸方向はN-81～85°-Wである。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・舶載陶磁器・近世陶磁器・土師質土器と金属製品など138点が出土し、土師質土器鍋類が64点を占める。図示したのは20点である。69は湖西産の須恵器広口長頸壺で8世紀前半である。70は山茶碗小皿で、口縁部は底部から外反して開き、端部を丸く肥厚させて仕上げた、13世紀後半の製品である。71と72は舶載陶磁器の白磁である。71は口縁部を外反させるものであるが、小型でしかも出土例が少ない。72は型押しの皿である。白磁は形態から、15世紀と考えられる。73と74はロクロ成形の土師質土器かわらけである。75から77は土師質土器内耳鍋である。口縁部をくの字状に外反するA類に属する。体部外面に、ハケと指ナデ、内面には指ナデとヘラ調整が見られる。口縁端部の調整では、折り返すものと折り返さないものがあり、15世紀後半から16世紀と考えられる。78と79は縁釉小皿で、78が古瀬戸製品、79は志戸呂産である。80は卸目付大皿の口縁部であり、古瀬戸後期Ⅳ期古段階である。81は卸皿の底部である。82から85は擂鉢である。82は瀬戸産の、17世紀と考えられる。83は古瀬戸後期Ⅳ期古段階で、84と85が大窯第4期段階の志戸呂産である。86と87は瀬戸産の天目茶碗で、86は口縁部を少し外反させる。87はケズリ高台である。天目茶碗は鉄釉が施されており、登窯第4小期と考えられる。88は真鍮製の煙管火皿で、江戸初期のものである。

時期は、出土遺物に時期幅があるものの、17世紀前葉までと考えられる。

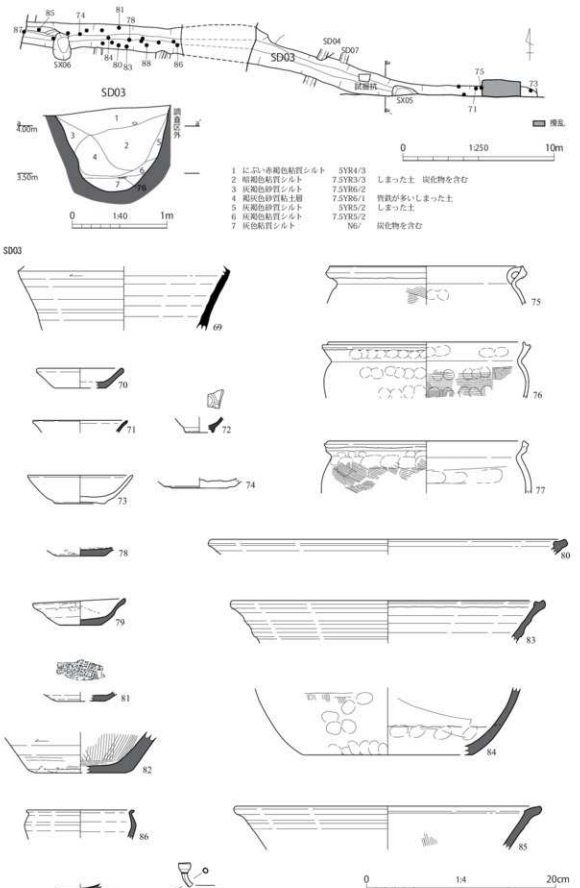


Fig.17　A・B 区 SD03 遺構図・出土遺物

SD04（Fig.18） A区の西部南に位置し、南側は調査区外に延びる。平面形はSD07と平行して走る南北方向の溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、3.5 m前後で、北に向かって低くなる。重複関係は、SD03とSX03に切られる。規模は長軸3.61 m、短軸0.56 ～ 0.78 m、深さ0.36 mを測る。長軸方向はN-25°-Eである。

遺物は、中世陶器・土師質土器など、13点が出土し、うち1点を図示した。土師質土器は内耳鍋で11点を数え、溝の底面よりまとまって出土している。89は内耳鍋A類で、口縁端部を折り返しているが、上端をつまみあげている。半球形の体部に丸底の底部を有する。内耳は粘土を縦位置に取り付け、孔を貫通させている。体部外面調整は、下方をヘラ削り、上方をハケと指ナデによる。口縁部は横ナデ調整を施す。

時期は出土遺物より、15世紀末から16世紀前半と考えられる。

SD05（Fig.12） A区の北部中央から西に位置する。平面形はSD01・SD06に平行して走る東西方向の溝である。溝は西側に向かって細く真っ直ぐに延びる。断面は逆台形を呈する。底面の標高は3.75 m前後で東西の高低差はない。埋土には、小石を含んでいた。重複関係は、SX01とSD07を切っている。規模は長軸13.76 m、短軸0.4 ～ 0.66 m、深さ0.26 mを測る。長軸方向はN-80°-Wである。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・舶載陶磁器・土師質土器の他、砥石、輪羽口など合わせて35点が出土し、うち11点を図示した。90は古代の土師器甕で、口縁部を外反させる。91 ～ 95は渥美湖西産の山茶碗で、91・92は碗底部で、断面四角形でハの字に高台が付けられている。端部にモミガラ痕が顕著に残る。93は口縁部が外側に開き、口唇部を丸く肥厚させた甕で、2b期と考えられる。94は小皿で、外に大きく外反させ端部を肥厚させた、3b期の製品である。95は小碗で、丁寧な作りをした1a期のものである。96は平碗で、97が瓶子の古瀬戸後期の製品である。98は内耳鍋で、口縁部をくの字に外反させたA類である。体部は半球形でやや偏平である。15世紀末から16世紀前半と考えられる。99は砂岩製砥石で、3面が摺り減っている。100は輪羽口の破片である。

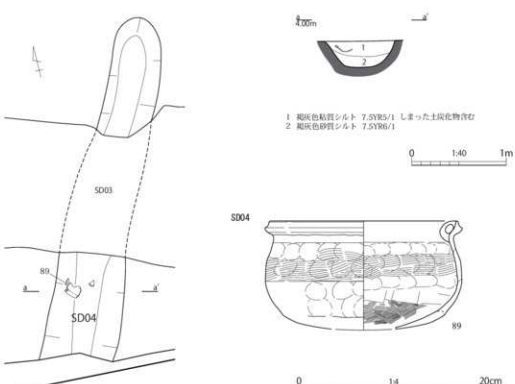


Fig.18 A区 SD04 遺構図・出土遺物

時期は、出土遺物より中世後期と考えられる。

SD06（Fig.12）　A区の北部中央から西に位置する。平面形はSD05に隣接し平行して走る、東西方向の溝である。溝はSD07と切り合う地点で少し南に振れるが、ほぼ真っ直ぐに延びる。断面は逆台形を呈する。底面の標高は3.75 m前後で、中央が低くなるものの余り高低差はない。埋土には小石を含んでいた。重複関係は、SX02を切っている。規模は長軸10 m、短軸0.3 ～ 0.48 m、深さは西側が0.03 mと浅く、中央で0.15 mを測る。長軸方向はN-80°-Wである。

SD06とSD02との延長は19.4 m以上あり、道SF01の中央に直線的に残ることから、側溝であるSD01やSD03の前身遺構とも考えられる。

遺物は、須恵器・中世陶器など17点が出土し、うち9点を図示した。101と102は湖西産の須恵器で、101が坏蓋、102は長頸壺の頸部である。坏蓋は、口縁端部を下に折り曲げ、断面を逆三角形に呈する8世紀後半の製品である。長頸壺は外面には自然釉が見られる。7世紀後半から8世紀前半と考えられる。103 ～ 109は山茶碗類で、109の小皿以外が碗である。103は高台の特徴から、2a期と考えられる。104と105は口縁部で、外側に直線的に大きく開く。106 ～ 108は高台が低く偏平な作りで、貼り付けが粗雑である。端部にはモミガラ痕が顕著に残る。104 ～ 109は3a期と考えられる。

時期は、SD02の延長上に位置していることや出土遺物から、中世前期と考えられる。

SD07（Fig.9）　A区の中央部西に位置し、北側は調査区外に延びる。平面形はSD04と平行して走る南北方向の溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、北側で3.78 m、南側が3.65 mと南に向かって低くなる。重複関係は、SD06を切り、SD05とSP02に切られる。規模は長軸4.05 m、短軸0.48 m、深さ0.15 mを測る。長軸方向はN-14°-Eである。

出土遺物は、須恵器2点、古瀬戸後期の擂鉢1点の計3点であるが、小片のため図示できなかった。

時期は、中世後期と推測される。

SD08（Fig.19）　B区の東部南に位置し、南側は調査区外に延びる。平面形はSD04と平走する南北方向の溝である。断面は西側の溝が東側の溝を切る2本の溝で、二段形を呈する。底面の標高は、3.83 m前後で平らである。重複関係は、SD03に切られる。規模は長軸2.64 m、短軸0.84 m、深さ0.2 mを測る。長軸方向はN-23°-Eである。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・舶載陶磁器・土師質土器などの土器の他、石製品を含め109点が出土し、うち13点を図示した。110と111は渥美湖西産の山茶碗である。110は高台断面が四角形であるのに対して、111は低く楕円形となっている。前者が13世紀前葉で、後者が13世紀後半である。112は舶載陶磁器青磁の碗である。体部外面に文様が施され、高台は高く立つ。龍泉窯系で、B3類に属する15世紀前半と考えられる。113 ～ 116は土師質土器かわらけである。113はロクロ成形で、口縁直下を外反させ端部を丸く仕上げる。114 ～ 116は、手づくね成形で、器高が低く偏平である。底部から体部では内湾させながら延び、口縁部を上に立てる。117はロクロ成形のかわらけに、脚が3本方向に付けられた香炉である。118 ～ 121は内耳鍋である。口縁部をくの字に外反させるA類である。口縁端部を折り返し上方につまみあげたものと、垂直方向に張り出したものが見られる。体部の内外面はハケと指ナデ調整が施される。15世紀後半から16世紀の製品である。122は砥石で折れている。3面に使用痕が見られ、表面は火を受けて赤く変色している。

時期は出土遺物より、15世紀後半から16世紀と考えられる。

SD09（Fig.20）　B区の中央部南に位置し、南側は調査区外に延びる。平面形はSD08と平行して走る。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、3.82 m前後で平らである。重複関係は、北側をSD03に切られる。規模は長軸2.68 m、短軸0.52 m、深さ0.12 mを測る。長軸方向はN-10°-Eである。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・土師質土器などの土器で、148 点を数え、その内、土師質土器鍋類が 137 点を占めている。鍋類から 2 点を図示した。123 と 124 は内耳鍋 A 類である。123 は口縁端部を折り返して、上端をナデ調整して丸く仕上げている。体部の外面は下方をヘラ削り、上方をハケと指ナデ調整されている。口縁部は、横ナデ調整を施す。底部は半球形で丸底を呈する。124 は 123 より小型であるが、同じ特徴を示している。内耳は粘土を縦位置に取り付け、孔を貫通させている。15 世紀後半から 16 世紀の製品である。

時期は内耳鍋を中心とする出土遺物より、15 世紀後半から 16 世紀と考えられる。

SD14（Fig.13） A 区の北西部に位置し、西側は調査区外に延びる。平面形は SD03・05・06 と平行して走る東西方向の溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は 3.65 m前後で、東に向かって低くなる。重複関係は、東側を SX03 に切られる。規模は長軸 2.16 m、短軸 1.2 m、深さ 0.14 m を測る。

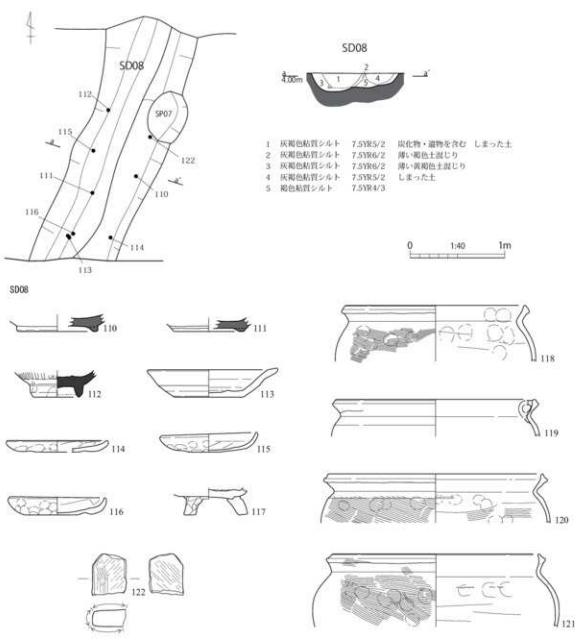


Fig.19 B 区 SD08 遺構図・出土遺物

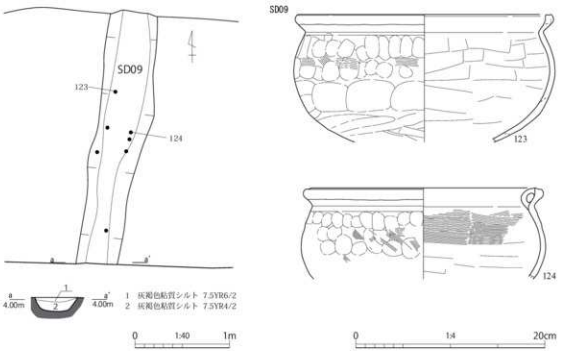


Fig.20　B 区 SD09 遺構図・出土遺物

長軸方向は N-74°-W である。

遺物は、土師質土器鍋 1 点を図示した。125 は内耳鍋 A 類である。口縁部の外反は弱く直立気味で短いうえ、体部は張らずに偏平となる。鍋類の中では新しい様相が見られることから、15 世紀末から 16 世紀前葉と考えたい。

時期は、中世後期と考えられる。

vi）道 SF

SF01（Fig.9・16・17）　A 区から B 区にわたって検出された、東西方向に延びる道路状の遺構である。道の規模は、北側の溝 SD01 と南側の溝 SD03 に挟まれた幅約 5m、確認される B 区西壁までの延長約 36 m である。長軸方向は N-81 ～ 85°-W である。西地区の C 区まで延びていると推測されるが、それから先は不明である。路面は平らに整地され、粘土質シルトで硬く締めた客土に、小石と土器片が僅かに混じる。

時期は、SD01 と SD03 の出土遺物から、中世後期から江戸前期前葉まで機能していたことが確認される。

vii）遺構外出土遺物

遺構以外の攪乱や包含層からの出土遺物を、20 点図示した（Fig.21）。126 ～ 128 は、湖西産の須恵器である。126 は箱坏で、口縁部が直線的に開くものであり、8 世紀後半と考えられる。127 は有台坏身で、高台断面が四角形をなすもので、8 世紀前半である。128 は長頸壺の底部から体部の破片で、外面に丁寧なケズリ調整が施されるものであり、7 世紀末から 8 世紀前半と考えられる。129 ～ 136 は、渥美湖西産の製品である。129 ～ 132 は山茶碗である。129 は体部と口縁部境で強く外反させる。130 は灰釉が漬け掛けされており、古い特徴を残す。131 と 132 の高台は低く、付け方が粗雑で、端部にモミガラ痕が顕著に残る。山茶碗は 12 世紀後葉から 13 世紀前半の製品である。133 と 134 は壺で、

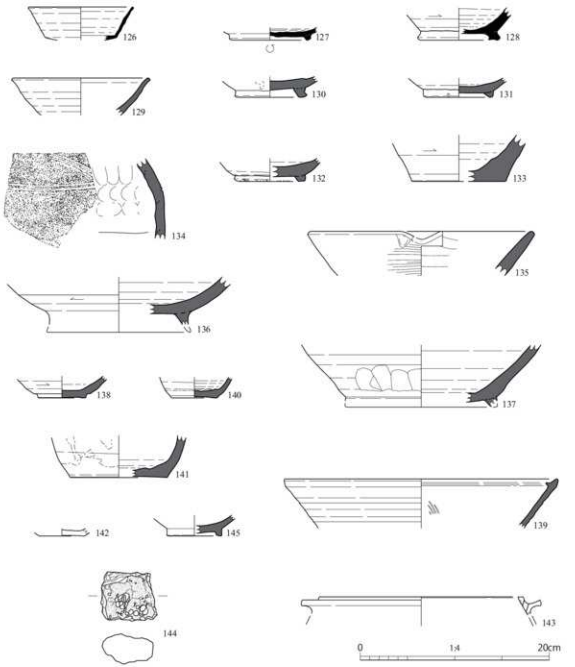


Fig.21　東地区 遺構外出土遺物

2b 期と考えられる。135 から 137 は片口鉢 I 類で、135 の注ぎ口は指で押し出している。136 と 137 の高台は、外側にハの字状に付けられる。片口鉢は、山茶碗と同じ時期と考えられる。138 から 140 は古瀬戸後期の製品、138 は平碗で灰釉が施されている。高台は低いケズリ高台で、体部にかけてケズリ調整が施される。後期Ⅲ期段階である。139 は擂鉢で、口縁端部が内面に折り返されて、口縁内側に突帯を作り、受け口状をなす。140 は鉄釉が施された耳付水注である。141 は鉄釉を施す志戸呂産の壺底部である。139 ～ 141 は、古瀬戸後期Ⅳ期段階と考えられる。142 は土師質土器かわらけで、糸切痕が顕著に残ることから 16 世紀と考えたい。143 は羽釜で、15 世紀前半であろう。144 は重量 158 g の鉄滓片である。145 は美濃産の小瓶で、登窯第 7 小期と考えられる。

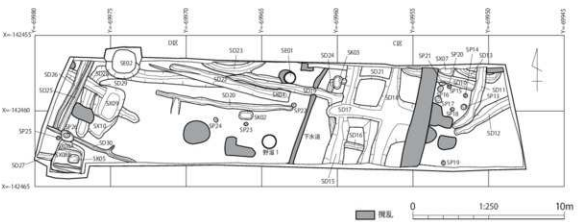


Fig.22　西地区 遺構全体図

（3）西地区の遺構と遺物

ⅰ）概　要

西地区では、土坑 4 基、柱穴 14 基、不明遺構 4 基、溝 20 条、井戸 2 基と、東地区に比べ溝が多く検出されている（Fig.22）。C 区では調査区の北側に溝がまとまっており、その上面は円礫を多く含み石敷き状を呈していた。この遺構周辺からは、城下町の時期を反映する陶磁器類が、まとまって出土した。D2 区と C 区との境には、東西幅 5 m程の落ち込みが見られた。この落ち込みは南北方向に延びており、5 条の溝が切り合った状態で検出されている。この地点では、山茶碗類がまとまって出土したほか、上面で 16 世紀後半の陶器が出土した。また、整地が繰り返し行われた状況が確認され、排水機能を有する重要な地点であったと考えられた。D1 区では、調査区中央から南側にかけて攪乱が著しく、Ⅲ層の堆積を確認できる地点は少なかった。そのため、攪乱部分を先に掘り下げ、確認できたⅢ層上面に高さを合わせて遺構検出を実施し上面とした。更に、Ⅲ層の粘質シルト約 10 cmを人力で荒掘し、攪乱の底面に合わせるように平らにして、検出作業を行った。よって、D1 区は 2 面の調査を行っている。下面では古代の遺構が確認されるなど、新たな知見が得られた。周辺には、古代の生活域が存在したと推定された。

遺物は、総点数 1,529 点であり、調査面積は東地区とほぼ同じであるが、出土遺物量は 18.2%も多い結果となった。各区では、C 区で 252 点、D 区で 1,277 点を数え、遺構の検出数に比例して、D 区が圧倒的に多くなっている（Tab.2）。その内訳は、古代 621 点、中世 845 点、近世 63 点で、古代が 40.6% を占め、高い比率を示している。C区は、江戸後期の近世陶磁器が、溝周辺よりまとまって出土している。D 区では、下面の溝内より復元可能な内耳鍋が出土するなど、15 世紀後半から 16 世紀の居住域が想定される。古代の遺物は、7 世紀後半から 8 世紀の須恵器と土師器がある。7 世紀後半に多様な器種がみられ、この時期に当地域周辺が新たなに居住域となったことが確認できた。

ⅱ）土坑 SK

SK02（Fig.23）　D2 区の西部中央において、SD20 に隣接し、存在する。平面形は隅丸方形と推定され、断面形は皿形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.91 m、短軸 0.56 m、深さ 0.11 mを測る。長軸方向は N-1°-E である。

遺物は出土していない。

時期は、上面から検出されていることや埋土の特徴から、近世と捉えられる。

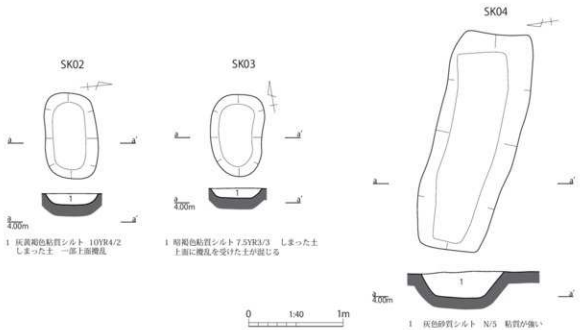


Fig.23　D 区 SK02 ～ 04 遺構図

SK03（Fig.23）　D2 区の北部中央に位置する。平面形は南側先端にかけて狭く丸くなるが、楕円形と推定され、断面形は皿形を呈する。重複関係は、SD24 を切る。規模は長軸 0.87 m、短軸 0.55 m、深さ 0.11 mを測る。長軸方向は N-08°-E である。

遺物は出土していない。

時期は、同一面から検出された SK02 と形状や立地条件が同じであること、埋土の特徴から同時期の近世と考えられる。

SK04（Fig.23・32）　D2 区の中央部、SD19・22 などの溝が複雑に切り合う中に位置する。平面形は切り合いによって本来の形状は明らかでないが、東側に残る掘方の形状から、長方形と推定される。断面形は上場からまっ直ぐに掘り込んでおり、箱形を呈する。重複関係は、SD19・22 に切られる。規模は長軸 2.32 m、短軸 1.02 m、深さ 0.46 mを測る。長軸方向は N-74°-W である。

遺物は 15 点出土している。遺物の内訳は、須恵器 1 点、土師器甕 4 点、中世陶器が山茶碗 5 点、古瀬戸産後期と志戸呂産が各 1 点の 7 点、土師質土器鍋 3 点であるが、小片のため図化していない。

時期は、下層から出土した山茶碗の時期から、12 世紀後半から 13 世紀前半と捉える。

SK05（Fig.24）　D1 区の南西部隅の SX08 内に位置する。平面形は西側が不正形となっているが、もともとは楕円形と推定され、断面形は浅い皿形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.74 m、短軸 0.56 m、深さ 0.05 mを測る。長軸方向は N-1°-E である。

遺物は、土師器が 10 点出土している。土師器は殆どが甕の破片で、甕の破片も数点みられたが、その内の甕 1 点を図示した。146 は口縁部が欠損しているが、ほぼ全形を知り得る甕である。内外面には、丁寧なハケ目や指ナデ調整が施され、焼成は硬質である。全体的に小型であるが、器形は底部から斜め上方に直線的に延びる形状としたものであり、7 世紀後半の時期と考えられる。

時期は、甕の年代観から 7 世紀後半と考えられる。

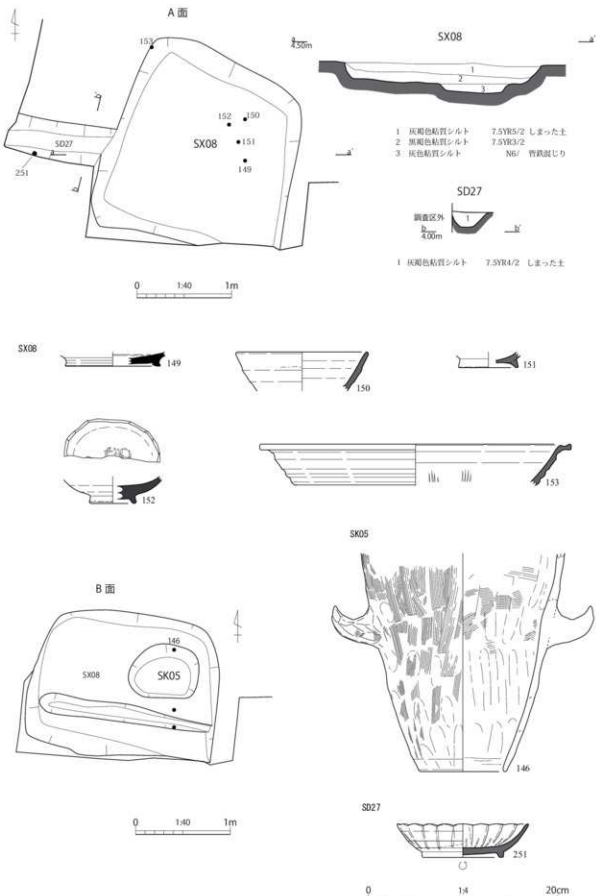


Fig.24　D区 SK05、SX08、SD27 遺構図・出土遺物

iii）柱穴・小穴 SP

SP13（Fig.25） C 区の東部北に位置する。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。底面に 10 cm程の円礫の根石が 2 個出土している。重複関係はない。規模は長軸 0.38 m、短軸 0.36 m、深さ 0.21 mを測る。長軸方向は N-41°-E である。

遺物は、瓦質の鉢の破片が出土している。

時期は、埋土の特徴から近世と捉えられる。

SP14（Fig.25） C 区の東部やや北、SP13 の北側に位置する。平面形は円形、断面形はU字形を呈する。重複関係はない。規模は直径 0.3 m、深さ 0.14 mを測る。

遺物は出土していない。

時期は、埋土の特徴から近世と考えられる。

SP15（Fig.25） C 区の東部北、SD10 の南に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈する。重複関係は、SP20 に切られる。規模は長軸 0.26 m、短軸 0.2 m、深さ 0.09 mを測る。長軸方向は N-73°-W である。

遺物は出土していない。

時期は、周辺の遺構から近世と考えられる。

SP16（Fig.25） C 区の東部北、SP21 の南に位置する。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.41 m、短軸 0.34 m、深さ 0.23 mを測る。長軸方向は N-28°-E である。

遺物は 1 点出土していて、147 は土師質土器手づくね成形のかわらけである。

時期は、埋土の特徴から近世前期と考えられる。

SP17（Fig.25） C 区の東部、SP16 の南に位置する。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.48 m、短軸 0.4 m、深さ 0.29 mを測る。長軸方向は N-32°-W である。

遺物は出土していない。

時期は、埋土の特徴から近世と考えられる。

SP18（Fig.25） C 区の東部、SP13 の西に位置する。平面形は円形、断面形は二段形を呈する。重複関係はない。規模は直径 0.26 m、深さ 0.23 mを測る。長軸方向は N-43°-E である。

遺物は出土していない。

時期は、埋土の特徴から近世と考えられる。

SP19（Fig.25） C 区の東部南壁際近くに位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.31 m、短軸 0.15 m、深さ 0.17 mを測る。長軸方向は N-4°-W である。

遺物は出土していない。

時期は、埋土の特徴から近世と考えられる。

SP20（Fig.25） C 区の東部北、SP15 の北に位置する。重複関係は、SD10 に切られ、SP15 を切る。

遺物は出土していない。

時期は、遺構の状況から近世と考えられる。

SP21（Fig.25） C 区の東部北、SP16 の北に位置する。平面形は SD10 に切られるが、残存する部分から楕円形と推測される。規模は長軸 0.44 m、残存する短軸で 0.22 m、深さ 0.16 mを測る。長軸方向は N-80°-E である。

遺物は出土していない。

時期は、遺構の状況から近世と考えられる。

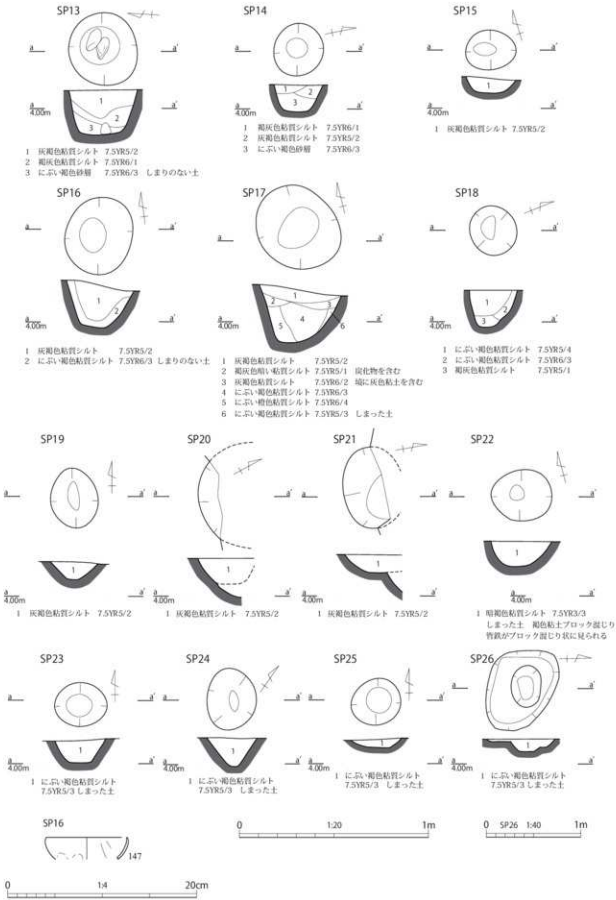


Fig.25　C・D 区 SP13 ～ 26 遺構図・出土遺物

SP22（Fig.25） D2 区の東部中央に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.31 m、短軸 0.15 m、深さ 0.17 mを測る。長軸方向は N-76°-W である。

遺物は出土していない。

時期は、埋土の特徴から近世と考えられる。

SP23（Fig.25） D2 区の東部中央、SK02 の南に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.31 m、短軸 0.14 m、深さ 0.11 mを測る。長軸方向は N-87°-W である。

遺物は出土していない。

時期は、埋土の特徴から近世と考えられる。

SP24（Fig.25） D2 区の西部中央に位置する。平面形は楕円形、断面形は U 字形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.32 m、短軸 0.26 m、深さ 0.16 mを測る。長軸方向は N-51°-W である。

遺物は出土していない。

時期は、周辺の遺構との関係から近世と考えられる。

SP25（Fig.25） D1 区の西部南半に位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈する。重複関係はない。規模は長軸 0.27 m、短軸 0.24 m、深さ 0.05 mを測る。長軸方向は N-36°-E である。

遺物は出土していない。

時期は、埋土の特徴から 16 世紀から 17 世紀と考えられる。

SP26（Fig.25） D1 区の西部南半に位置する。掘方は不正楕円形で底面は円形である。規模は長軸 0.88 m、短軸 0.71 m、深さ 0.03 mを測る。柱穴は掘方の中央に位置する。平面形は楕円形、断面形は逆台形を呈する。重複関係は、SD30 を切る。規模は長軸 0.44 m、短軸 0.33 m、深さ 0.11 mを測る。長軸方向は N-86°-E である。

遺物は、混入したと考えられる須恵器片が 1 点出土している。

時期は、埋土の特徴から 16 世紀から 17 世紀前半と考えられる。

iv）不明遺構 SX

SX07（Fig.28） C 区の北壁際東部にあり、北側は調査区外に延びているため未調査である。平面形は長方形と推測される。断面は二段形を呈する。重複関係は、SD13 と SD10 を切る。規模は長軸 1.04 m、短軸 0.56 m、深さ 0.44 mを測る。

遺物は、須恵器・中世陶器の 3 点が出土しており、うち 1 点を図示した。148 は瀬戸美濃産の擂鉢底部である。体部内面に 8 本単位の擂目が 2 条残る。全面にサビ釉が施され、焼成は固く良好である。この陶器は、古瀬戸後期Ⅳ期と考えられる。

時期は、出土遺物からは中世後期と推測されるが、土層の状況から江戸後期から末と考えられる。

SX08（Fig.24） D1 区の南壁際西部に位置する。遺構は、南側の壁面に及んでいたため、ぎりぎりまで南側を拡張して調査したが、全形を確認することはできなかった。なお、一つの遺構として掘削を開始したところ、上面と下面で異なる遺構であることが確認された。このため、上面を A 面とし下面を B 面として区分した。A 面の平面形は隅丸方形、断面は浅い逆台形を呈する。西側の SD27 は、SX08A に流入していたものとみられる。規模は長軸 2.04 m、短軸 1.97 m、深さ 0.1 mを測る。長軸方向は N-72°-W である。B 面は A 面より小規模で、南側に溝一条と、北東隅に SK05 を伴う。平面形は隅丸方形、断面は浅い逆台形を呈する。規模は長軸 1.96 m、短軸 1.52 m、深さ 0.09 mを測る。長軸方向は N-86°-W である。

出土遺物は、須恵器・土師器・舶載陶磁器・中世陶器・土師質土器の 21 点が出土しており、うち

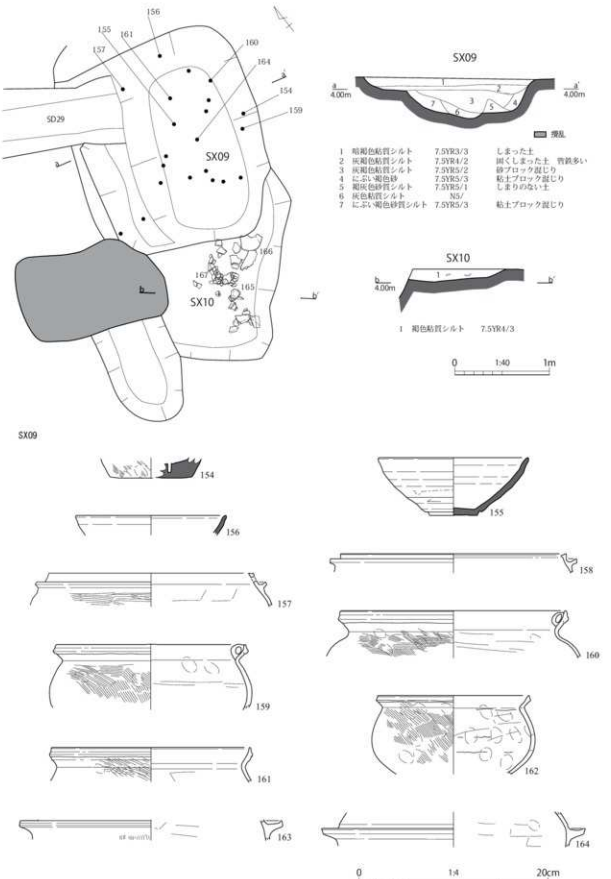


Fig.26　D 区 SX09・10 遺構図・出土遺物

5点を図示した。149は湖西産の須恵器有台坏身である。高台は断面方形を呈し、底部から体部にかけて、ヘラ削り調整が施される。8世紀前半の製品である。150と151は山茶碗で、渥美湖西産である。150は口縁部を外側に開き、端部を丸く収めている。151は高台で断面逆三角形を呈する、1a期の製品と考えられる。152は青磁碗である。内面見込み部に印花文が施される、D1類に属する。14世紀前半と考えられる。153は瀬戸美濃産の擂鉢である。口縁部は水平に折れ、端部を肥厚させ丸くする。器壁は薄手で、焼成は固く良好である。古瀬戸後期Ⅳ期古段階と考えられる。

時期は出土遺物から、A面が16世紀から17世紀前葉で、B面が7世紀後半から8世紀と考えられる。

SX09（Fig.26） D1区の西部中央に位置する。近現代の攪乱と遺構の重複によって一部削平されているが、平面形は長方形と推測される。断面は二段形を呈する。重複関係は、SX10とSD29を切る。規模は長軸2.22 m、短軸1.95 m、深さ0.59 mを測る。長軸方向はN-20°-Eである。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・土師質土器の52点が出土しており、うち11点を図示した。内訳は、土師質土器の鍋類が36点、瀬戸美濃産陶器9点、須恵器と土師器・山茶碗が各2点、渥美湖西産陶器1点となっている。154は、渥美湖西産の壺の底部で、内面見込み部に孔が見られる。155は体部外面上部から内面に灰釉が施された、古瀬戸後期Ⅲ期の平碗である。156は平碗の口縁部の破片で、古瀬戸後期Ⅲ期と考えられる。157と158は鍔が短く口縁部が内傾する、南伊勢系羽釜である。外面にはハケとヘラ削り、内面はヘラ削りで調整され、器面は極めて薄い。15世紀前半と考えられる。159～162は内耳鍋A類で、外面にはススが付着している。口縁部と体部の境界部は強く屈折し、口縁部をくの字状に外反する。体部外面はハケと指ナデ、内面は指ナデとヘラで調整され、体部を口縁部より外に張り出し、形状は半球形を呈する。口縁端部の調整では、折り返すものと折り返さないものがある。162は小型もので、他は口径が20 cm前後である。15世紀後半から16世紀の製品である。163と164は、羽付釜の破片である。鍔は2 cm程で、端部断面は方形を呈しナデ調整を施している。163は外面体部にハケ、内面にヘラナデ調整がある。164は内面にヘラ調整と圧痕が見られる。

時期は出土遺物から、中世後期と推測される。

SX10（Fig.26・27） D1区の西部中央に位置する。平面形は西と北側が削平されているが、残存す

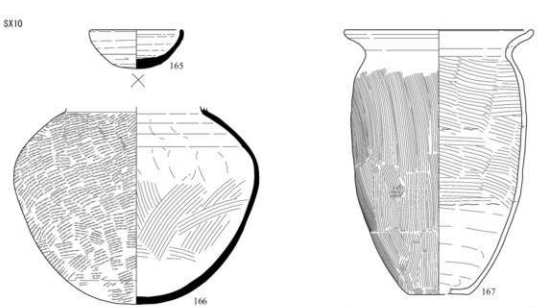


Fig.27 D区SX10出土遺物

る部分から長方形と推測される。断面は皿状を呈する。重複関係は、SX09 と SD28 に切られる。規模は長軸 2.02 m、短軸 1.09 m、深さ 0.1 m を測る。長軸方向は N-39°-E である。なお、SX10 が竪穴状に検出された遺構であることから、住居跡の可能性を残す。

遺物は、須恵器・土師器の 127 点が出土しており、そのうち土師器が 101 点を数える。3 点を図示した。165 と 166 は、湖西産の須恵器である。165 は坏身で、口縁部は内湾し、口唇部を丸く収め、半球状を呈する。底部は丸く器壁は厚くやや粗雑な作りで、底部外面にヘラ記号が残る。7 世紀後半と考えられる。166 は口縁部が欠損しているが、残存状態の良い壺である。体部外面はタタキ、内面はハケと指ナデ調整が施されている。167 はほぼ完存する長胴甕である。口縁部を外反させ、口唇部を丸く上に小さく突出している。平底を呈する。体部外面はタテハケ、内面に粗いハケ、口縁部は横ナデ調整が見られる。口縁部の形状から 7 世紀後半と捉えたい。出土した遺物は、7 世紀後半に限定されていることや、南東隅にまとまって出土している状況から、一括廃棄されたものと考えられる。

時期は、出土遺物より 7 世紀後半と考えられる。

v）溝 SD

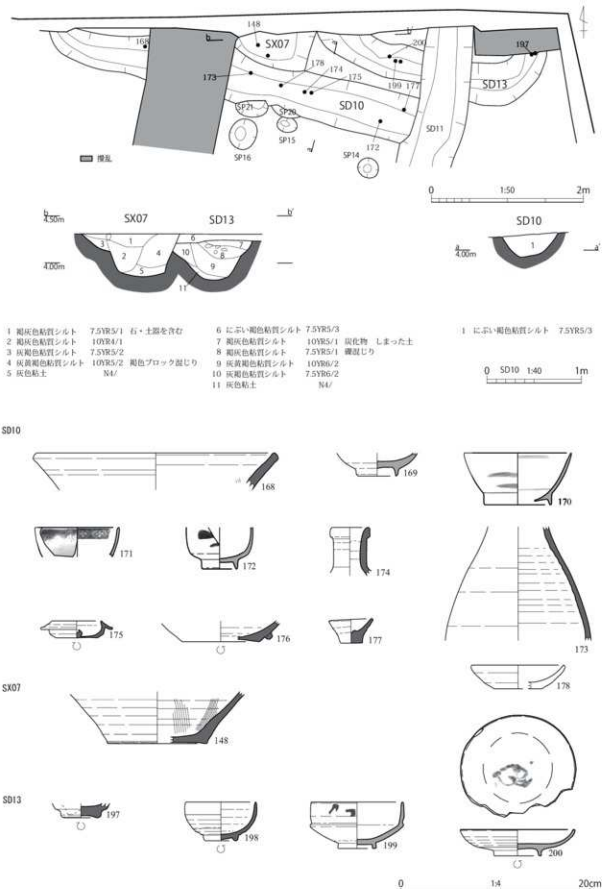
SD10（Fig.28）　C 区の中央部北半に位置し、西側は調査区外に延びる。平面形は SD11 に直行する東西方向の溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は 3.9 m前後で、西側が低くなる。重複関係は、SP20・SP21 を切って、SX07 と SD11 に切られる。規模は長軸 2.75 m、短軸 0.46 ～ 0.64 m、深さは西側が浅く 0.12 mで、東側は 0.25 mを測る。長軸方向は N-76°-W である。

遺物は、中世陶器・近世陶磁器・土師質土器・瓦など 21 点が出土し、うち 11 点を図示した。168 は志戸呂産の擂鉢で、古瀬戸後期Ⅳ期新段階のものである。169 ～ 171 は、肥前産の磁器である。169 は中碗の丸形で、17 世紀末から 18 世紀前半と考えられる。170 は広東碗で、呉須で文様が描かれる。171 は小碗の丸形で、18 世紀後半である。172 は瀬戸産磁器の湯呑である。外面に染付され、登窯第 10・11 小期と考えられる。173 は口縁部が欠損している中瓶の体部である。灰釉が施された徳利で、登窯第 8・9 小期である。174 は中瓶の首黒徳利である。口縁部端部を折り返し、玉縁状とし、頸部は短く真っ直ぐに延びる、江戸後期の製品である。175 は土瓶の蓋と思われる。平底で、笠部は下端に稜が入り中央は直立、口縁は外反する。笠部から底部にかけてヘラ削り調整される。内面見込み部に粘土塊を貼り付け、つまみにしている。19 世紀後半の製品であろう。176 は行平の底部で、19 世紀と考えられる。177 は瀬戸産の秉燭で、ほぼ完形品である。小型であるが底部の器壁は厚く、口縁部は外側に開くなどの特徴から、登窯第 11 小期と考えられる。178 はロクロ成形の土師質土器かわらけである。口縁部は直線的で、器高が低い特徴から近世の製品と考えられる。

時期は、出土遺物より江戸後期から末と考えられる。

SD11（Fig.29）　C 区の東部北半に位置し、北側は調査区外に延びる。平面形は曲線を描く南北方向の溝である。溝の南側と北側では、上層に円礫を含む層により石敷き状を呈し、北壁側では下層まで円礫が詰まっていた。石は 10 ㎝以下の河原石で、土器を含んでいた。断面は逆台形を呈する。底面の標高は 3.83 mで、高低差はない。重複関係は、SD10・SD12・SD13 を切っている。規模は長軸 4.64 m、短軸 0.52 ～ 0.62 m、深さ 0.25 mを測る。長軸方向は N-13°-E である。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・舶載陶磁器・近世陶磁器・土師質土器・瓦など 39 点が出土し、うち 15 点を図示した。山茶碗は、石敷きから出土している。179 ～ 186 は、渥美湖西産の製品である。179 ～ 183 は、山茶碗の底部である。高台が断面四角形をなす 179・180 と、偏平でしかも取り付けが粗雑な、181 ～ 183 があり、前者は 1b 期と 2a 期で、後者は 3a 期から 3b 期と考えられる。184 は



1 褐灰色粘質シルト 7.5YR5/1 石・土器を含む
2 褐灰色粘質シルト 10YR4/1
3 灰褐色粘質シルト 7.5YR5/2
4 灰黄褐色粘質シルト 10YR5/2 褐色ブロック混じり
5 灰色粘土 N4/
6 にぶい褐色粘質シルト 7.5YR5/3
7 褐灰色粘質シルト 10YR5/1 固化物 しまった土
8 褐灰色粘質シルト 7.5YR5/1 礫混じり
9 灰黄褐色粘質シルト 10YR6/2
10 灰褐色粘質シルト 7.5YR6/2
11 灰色粘土 N4/
1 にぶい褐色粘質シルト 7.5YR5/3

Fig.28 C区 SX07、SD10・13 遺構図・出土遺物

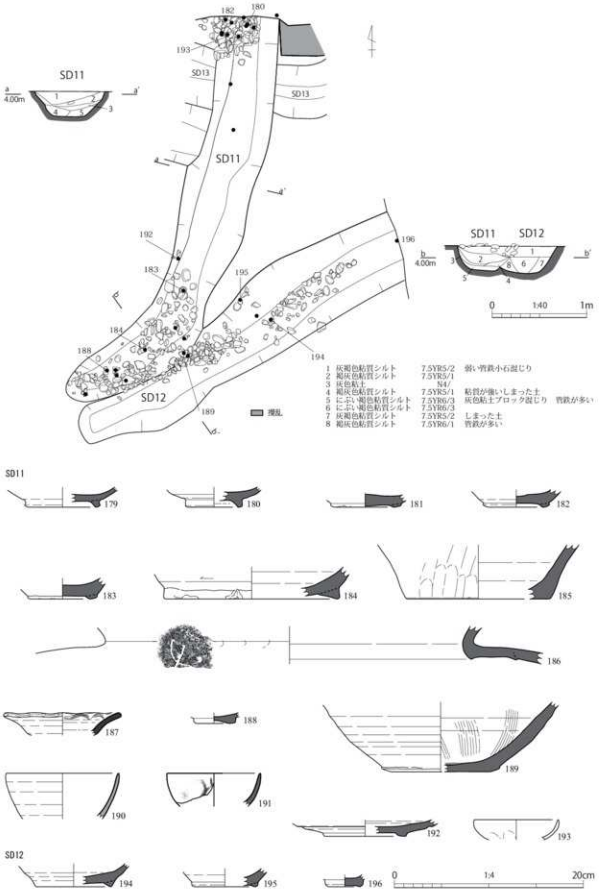


Fig.29　C 区 SD11・12 遺構図・出土遺物

石敷きから出土している片口鉢Ⅰ類である。高台は逆三角形を呈し、高さは低く外側に付くもので、2b 期と考えられる。185 は壺で、外面にはケズリ調整が施される。186 は甕で、肩部外面にヘラ記号が描かれている。壺甕は、2b 期である。187 は青磁輪花皿である。口縁端部を面取りし、指で押さえることで輪花としている。口縁内面直下に波状文が描かれる。15 世紀中葉から後半と考えられる。188 は抉り高台を有する天目茶碗で、古瀬戸後期Ⅲ期のものである。189 は初山産擂鉢で、大窯第 4 期前半段階の製品である。190 は肥前産の白磁中碗である。江戸後期の製品である。191 は瀬戸産陶器の小中である。登窯第 8 小期と考えられる。192 は瀬戸産の鉢で、登窯第 11 小期である。193 は手づくね成形の土師質土器かわらけである。

時期は、遺物年代幅が 12 世紀から 19 世紀まであるものの、重複関係から江戸後期から末と考えられる。

SD12（Fig.29） C 区の東部中央に位置し、東側は調査区外に延びる。平面形は西側で SD11 と接し、東西方向に延びる溝である。溝の西側と西壁面では、上層出土の円礫が石敷き状を呈する。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、西側で 3.95 m、東側で 3.78 m と東に向かって傾斜している。重複関係は、SD11 に切られる。規模は長軸 3.94 m、短軸 0.40 ～ 0.76 m、深さ 0.3 m を測る。長軸方向は N-61°-E である。

遺物は、須恵器・中世陶器・土師質土器など 5 点が出土し、うち 3 点を図示した。194 と 195 は、石敷き状の円礫層から出土した渥美湖西産の山茶碗である。194 は内面見込み部を少し窪ませている。2a 期のものである。195 の高台は磨かれて低くなり、断面が楕円形を呈する。3a 期と考えられる。196 は東壁際から出土している天目茶碗である。高台は浅く抉られ、内面に鉄釉が施された古瀬戸後期Ⅱ期の製品である。

時期は、中世後期と考えられる。

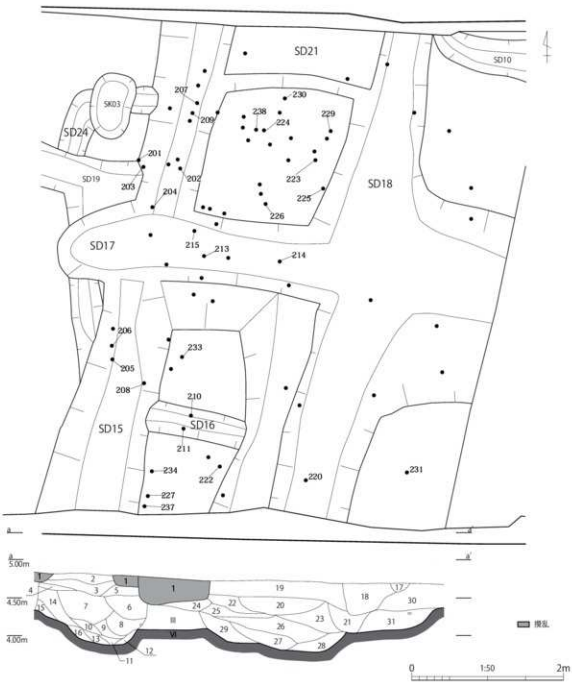
SD13（Fig.28） C 区の北東部に位置し、北側と東側は調査区外に延びる。平面形は曲線を描く東西方向の溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は 3.9 m で、高低差はない。重複関係は、SX07 と SD11 に切られる。規模は長軸 2.64 m、短軸 0.56 m、深さ 0.26 m を測る。長軸方向は N-78°-E である。

遺物は、中世陶器・近世陶磁器・土師質土器など 10 点が出土し、うち 4 点を図示した。197 は天目茶碗の底部で、鉄釉が施された古瀬戸後期Ⅳ期古段階のものである。198 は美濃産灰釉の小碗である。口縁部は、体部境から少し内湾させながら真っ直ぐ上に延びるもので、登窯第 7 小期と考えられる。199 は瀬戸産磁器の中碗で、体部下方は丸みをもって立ち上がるが、中央で屈曲して上方が直立する腰折形である。18 世紀中葉から 19 世紀中葉の製品である。200 は美濃産磁器の小皿で、摺絵技法の文様が見られる。宝永 7 年（1710）以降の製品である。

時期は、遺構の切り合いや出土遺物より、19 世紀中葉には埋没したと考えられる。

SD15（Fig.30・31） D2 区の東部に位置する。平面形は SD18 と平行して走る南北方向の溝である。溝は複雑に切り合うが、真っ直ぐに延びる。断面は砂利層（Ⅴ層）まで掘削しており、東肩の検出面が低く残存する部分から逆台形と推定される。底面の標高は、南側が 3.87 m、北側は 3.77 m で、北に向かって低くなる。重複関係は、SD16・SD19・SD21・SD24 を切り、SD17 に切られる。規模は長軸 6.52 m、短軸 0.84 ～ 1.12 m、深さ 0.43 m を測る。長軸方向は N-13°-E である。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・近世陶磁器・土師質土器など 42 点出土し、うち 9 点を図示した。201 と 202 は須恵器で、201 は皿の底部が平らである。202 は盤の底部で方形な高台を有する。須恵器は、8 世紀後半のものである。203 は土師器甕で、口縁部を水平になるほど折り曲げ、口縁端部をわずか



Ⅲ	褐色粘質シルト	7.5YR4/3	
Ⅳ	暗茶褐色砂質シルト	7.5YR5/4	
1	撹乱		
2	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2	固くしまった土
3	灰黄褐色粘質シルト	10YR5/2	しまった土
4	灰褐色粘質シルト	5YR5/2	小粒砂を含む粘土ブロック混じりの土
5	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2	混じりのない土（18と同一か？）
6	黒褐色粘質シルト	10YR3/2	しまりのある土
7	暗褐色粘質シルト	7.5YR3/4	小粒砂を含む　しまりのない土
8	黒褐色粘質シルト	10YR3/2	石や砂混じり
9	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2	小石や土器を含む
10	褐色砂質シルト	7.5YR4/4	小粒石を含む　表面は鉄分が見られる
11	褐灰色砂質シルト	7.5YR6/1	
12	灰褐色砂	7.5YR6/2	
13	灰褐色砂質シルト	7.5YR6/2	
14	褐灰色砂質シルト	5YR6/1	しまった土
15	暗褐色粘質シルト	7.5YR4/3	しまった土
16	にぶい赤褐色砂質シルト	5YR5/3	表面は固く鉄分を含む
17	にぶい褐色砂質シルト	7.5YR6/1	管鉄がブロック状に見られる
18	黄灰色砂	2.5YR6/1	小石混じり　管鉄が強くしまった土
19	暗褐色粘質シルト	7.5YR3/3	砂ブロック混じりで しまった土　整地層か？　小石を含む
20	灰褐色粘質シルト	5YR6/2	
21	灰褐色粘質シルト	5YR6/2	石混じり粘土ブロック状を呈する
22	暗褐色粘質シルト	7.5YR3/3	混じりのない土で固くしまっている
23	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2	混じりのない土
24	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2	
25	暗褐色粘質シルト	7.5YR3/3	砂ブロックを含む
26	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2	砂ブロック混じりで石を含む
27	灰褐色粘質シルト	10YR4/2	管鉄が強く　固くしまっている
28	灰褐色粘質シルト	7.5YR5/2	しまりのない土
29	暗褐色粘質シルト	7.5YR4/3	しまった土
30	灰褐色粘質シルト	7.5YR4/2	混ざりのないしまった土
31	赤灰色砂	2.5YR6/1	固くしまった土

Fig.30　D 区 SD15 ～ 18・21・24 遺構図

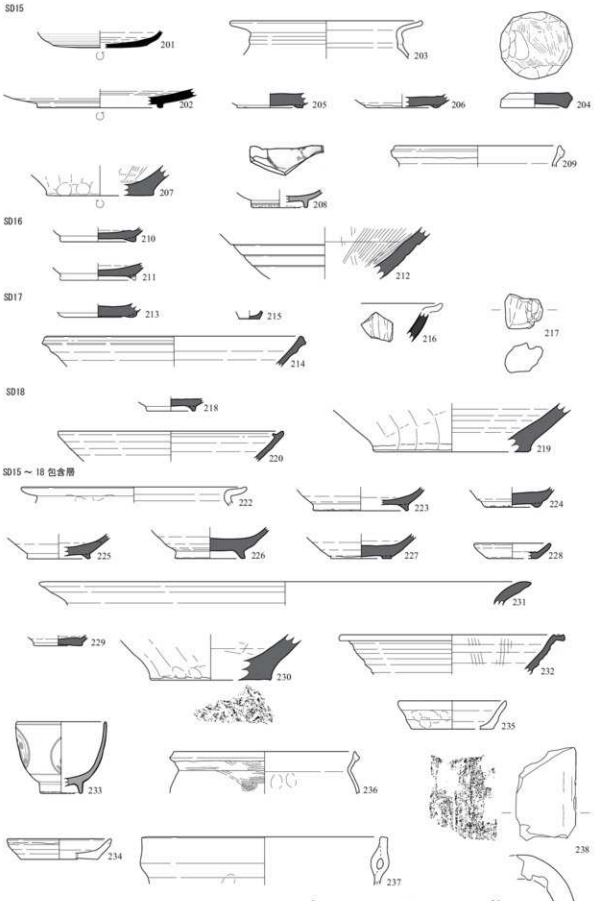


Fig.31　D 区 SD15 ～ 18、SD15 ～ 18 包含層 出土遺物

に引き上げ、丸く仕上げている。頭部は長く肥厚させる、8 世紀後半と考えられる。204 は山茶碗の体部と底部の境付近を全面掻いて円盤状に加工した、加工円盤である。205 と 206 は、山茶碗の底部で高台は低く粗雑な作りである。両者とも 3b 期の製品である。207 は初山産の擂鉢で、大窯第 4 期前半段階と考えられる。208 は上層から出土している肥前産磁器の皿で、見込み部に草花文が施される。17 世紀後葉から 18 世紀前半のものである。209 は内耳鍋の小型なもので、口縁部の外反は弱く、口縁端部の折り曲げも小さい。16 世紀中葉と推測される。

時期は、出土遺物に時期幅がある上、複雑な堆積と他の遺構との関係から、16 世紀末には埋没すると考えられる。しかし、中世前期の 13 世紀と、中世後期の 15 世紀後半から 16 世紀に遺物がまとまっており、これらが開削時期を示す遺物と思われる。このことは、SD15 の西側肩から SD18 の東側の肩の間、約 5 m に跨って掘り込みがみられることから、SD15 の開削段階から規模を変えて近世段階に至るまで存続していた場所であったと考えておきたい。近世の遺物については、出土地点の標高は高く埋没段階の混入品と考えられる。

SD16（Fig.30・31）　D2 区の南東部に位置する。平面形は SD17 と平行して走る東西方向の溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は 3.90 m 前後で、東に向かって低くなる。重複関係は、SD15・SD18 に切られる。規模は長軸 1.31 m、短軸 0.4 m、深さ 0.1 m を測る。長軸方向は N-80°-W である。

遺物は、土師器・中世陶器・土師質土器・近世陶磁器が 5 点出土し、うち 3 点を図示した。210 と 211 は山茶碗である。低い高台で、端部が擦り減り丸くなっている。13 世紀中葉の製品である。212 は遺構の上層から出土した瀬戸産の擂鉢である。体部は作りが粗く、内面に摺り目が細かく施されている。

時期は、出土遺物と埋土の状況から、中世と捉えられる。

SD17（Fig.30・31）　D2 区の東部中央に位置し、東側は調査区外に延びる。平面形は東西方向の溝である。砂利層（V 層）まで掘削しており、断面は、逆台形と推定される。底面の標高は、3.78 m で、北に向かって低くなる。重複関係は、SD15・SD18・SD19 を切る。規模は長軸 5.8 m、短軸 0.9 m、深さ 0.44 m を測る。長軸方向は N-83°-W である。

遺物は、須恵器・中世陶器・舶載陶磁器・土師質土器・近世陶磁器と鉄滓が出土し、うち 5 点を図示した。213 は渥美湖西産の山茶碗で、3b 期の製品である。214 は瀬戸産の擂鉢で口縁は外側に開き、端部を丸く厚く仕上げている。登窯第 10 小期と考えられる。215 は小型な入子で、器壁は薄く丁寧な作りである。古瀬戸前期Ⅳ期から中期Ⅱ期と考えられる。216 は龍泉窯系の青磁盤である。外面には蓮弁文が見られる 13 世紀後半から 14 世紀前半のものである。217 は鉄滓片で 59.7 g であった。

時期は、近世陶磁器が上層より出土しており、江戸後期から末に埋没したと推測される。

SD18（Fig.30・31）　D2 区の東部に位置する。SD18 は、SD15 と平行して走る南北方向の溝である。底面は砂利層（V 層）まで掘削されており、断面形は逆台形を呈する。底面の標高は 3.8 m 前後で、東西の高低差はない。重複関係は、SD16 と SD21 を切り、SD17 に切られる。規模は長軸 6.5 m、短軸 0.68 ～ 1.1 m、深さ 0.3 m を測る。長軸方向は N-11°-E である。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器など 9 点が出土し、うち 3 点を図示した。218 は渥美湖西産の小碗である。底部の高台は断面四角形で高く、貼り付け部分は、丁寧なナデ調整が施される。12 世紀中葉から後半の製品である。219 は常滑産の甕で、外面には板ナデ調整が見られる。口縁部は欠損しているが、15 世紀から 16 世紀と考えられる。220 は擂鉢で、口縁端部が内面に折り返されて突帯を作るもので、古瀬戸後期Ⅳ期古段階である。

時期は、出土遺物や埋土から中世後期と考えられる。

SD15 ～ 18 包含層出土遺物（Fig.31） SD15 ～ 18 が検出された D2 区地点の堆積土は、包含層も遺構埋土もほとんど変化がなく、どの遺構に伴う遺物か判断が難しいため、ここにまとめて図示した。

遺物は須恵器・土師器・中世陶器・近世陶磁器・瓦・土師質土器など 94 点で、うち図示したのは 17 点である。222 は土師器甕の口縁部で 8 世紀後半のものである。223 ～ 227 は、渥美湖西産の山茶碗である。出土量では 20 点と多いものの、口縁部の破片はなく図示できたのは底部ばかりである。223 はこの類の中では古く、1b 期の製品である。224 ～ 226 は、高台の断面が四角形で、外側にハの字に付けられるなどの特徴から 2a 期と考えられる。227 は高台の作りから他と比べて新しく、3b 期に降るものである。228 と 229 は、山茶碗の小皿である。228 は全形を知り得るもので、底部は平らで口縁部に向かってまっすぐに開く。229 は底部を肥厚させ、体部との境で段となす。229 は 228 より古い型式で、2b 期新、228 が 3b 期と考えられる。230 と 231 は、渥美湖西産の甕である。230 は底部の特徴から、1a 期～ 1b 期と推測される。231 は単純口縁で、大きく外に開き端部を水平にする 2b 期と考えられる。232 は口縁部を水平に折り曲げて受け口状とし、端部を丸く肥厚させるもので、サビ釉が施される。古瀬戸後期Ⅳ期の擂鉢である。233 は肥前産磁器の中碗である。初期伊万里様式で、外面に草花文が見られる。17 世紀前半と考えられる。234 と 235 はロクロ成形の土師質土器かわらけである。器高が低く、断面形が逆台形で、口縁端部を尖らせる。235 はススが付着しており、灯明皿として使用したものであろう。かわらけは、近世と考えられる。236 は内耳鍋 A 類に属する。口縁部の外反は弱く、16 世紀のものであろう。237 は内耳鍋で、口縁部を直立にさせる B 類のもので、16 世紀後半と考えられる。238 は丸瓦である。凹面にコビキ B 技法が施される。

以上のように各溝で出土した遺物の年代観との相違は見当たらない。

SD19（Fig.32） D2 区の北部中央に位置し、東側と西側は切り合うため全形が不明であるが、東西方向の溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、4.00 m 前後である。重複関係は、SD22・SD15・SE01 に切られる。規模は長軸 7.9 m、短軸 0.52 m、深さ 0.25 m を測る。長軸方向は N-79°-W である。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・土師質土器が 22 点出土し、うち 1 点を図示した。221 は山茶碗の底部である。高台などの特徴から 2a 期と考えられる。図示できなかったが、瀬戸美濃大窯第 4 段階の天目茶碗と初山産擂鉢が出土している。

時期は、遺構の状況などから中世後期と考えられる。

SD20（Fig.32） D1 から D2 区に跨って延びる溝で、中央部に位置する。東西方向の溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、4.08 m である。重複関係はない。規模は長軸 9.19 m、短軸 0.40 m、深さ 0.20 m を測る。長軸方向は N-80°-W である。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・土師質土器が 13 点出土し、うち 3 点を図示した。239 は湖西産須恵器の甕である。口縁端部を上下に延ばし、断面を三角形とし、頸部に列点文を施す。7 世紀後半から 8 世紀と考えられる。240 は手づくね成形の土師質土器かわらけである。器壁は薄く、焼成は硬い。色調は灰白色を呈する。16 世紀の製品であろう。241 は内耳鍋の A 類の製品である。口縁部の外反は弱く、この分類の中では新しいと考えられる。

時期は、出土遺物の特徴から中世後期と考えられる。

SD21（Fig.30） D2 の北壁際東に位置する。SD15 と SD18 との間を東西方向にまっ直ぐ延びる落ち込みがあり、それを SD21 とした。溝は北側の大部分が調査区外に及ぶ。底面の標高は、3.82 m である。重複関係は、SD15・SD18 に切られる。規模は長軸 2.15 m、短軸 0.82 m 以上、深さ 0.13 m を測る。長軸方向は N-85°-W である。

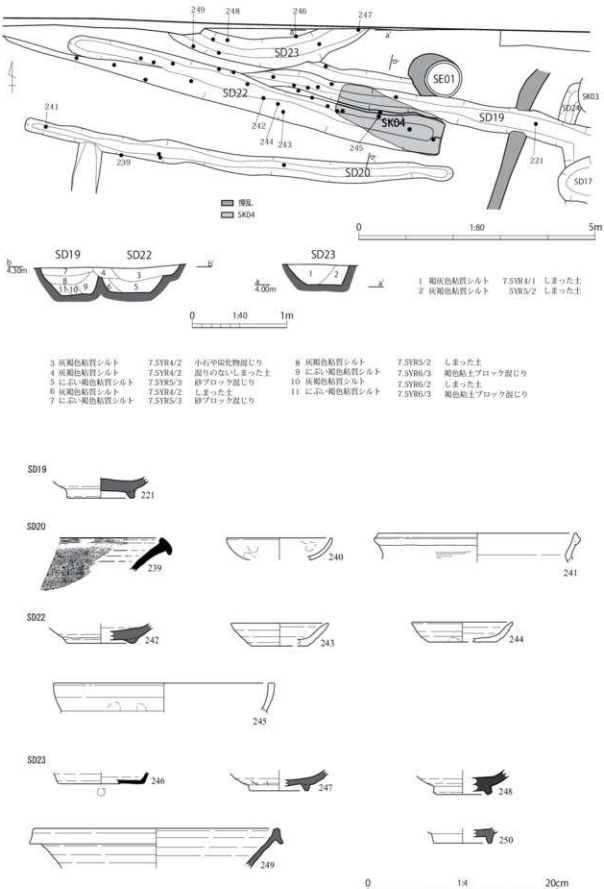


Fig.32　D区 SD19・20・22・23 遺構図・出土遺物

遺物は須恵器と中世陶器の山茶碗類・渥美湖西産片口鉢の4点が出土しているが、小片のため図示できなかった。

時期は、埋土の特徴から中世後期と推測される。

SD22（Fig.32） D2からD1区に跨って延びる。D1区とD2区の境を中心として、北部に位置する。西側は調査区外に延びる、東西方向の溝である。断面は二段形を呈する。底面の標高は、最も深い場所で3.78 mである。重複関係は、SD19・SD28・SK04を切っている。規模は長軸8.74 m、短軸0.76 m、深さ0.57 mを測る。長軸方向はN-75°-Wである。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・土師質土器が29点出土し、うち4点を図示した。242は山茶碗の底部で、高台は低く断面不正半円形を呈する。3a期と考えられる。243と244は、土師質土器かわらけである。底部には、糸切痕が顕著に残るロクロ成形で、碗型の体部に口縁部を少し外反させる。16世紀の製品であろう。245は内耳鍋で、口縁部を直立させるB類に属するものである。16世紀と考えられる。

時期は、出土遺物の特徴などから、16世紀に埋没したと考えられる。

SD23（Fig.32） D2からD1区に跨って延び、調査区の北壁際に位置する。溝は北壁面に沿い曲線を描き、東西両端とも調査区外に及んでいる。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、3.73 mである。重複関係はない。規模は長軸3.64 m、短軸0.5～0.62 m、深さ0.37 mを測る。

遺物は、須恵器・土師器・舶載陶磁器・中世陶器・近世陶磁器・土師質土器が73点出土し、うち5点を図示した。古代の須恵器と土師器は40点と、最も多くを占めている。246は湖西産須恵器の箱坏の底部である。底部は平らにケズリ調整された、8世紀後半のものである。247は山茶碗で、2b期と考えられる。248は青磁碗で、A2類の劃花文を有する。12世紀後半から13世紀前葉である。249は瀬戸美濃産の擂鉢で、口縁端部に縁帯を作り上下にのびるものであり、大窯第3段階前半と考えられる。250は瀬戸美濃産の輪禿皿で、登窯第3・4小期の製品である。250が最終末の遺物と考えられる。

時期は、出土遺物に年代幅が見られるが、16世紀から17世紀初に埋没したと考えられる。

SD24（Fig.30） D2区の中央やや東に位置する。東側と南側は切り合うため、全形は不明である。平面形はL字状に延びる溝であるが、SD15下でSD16他とC字状につながる遺構である可能性もある。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、4.08 m前後である。重複関係は、SD15・SD19・SK03に切られる。規模は長軸4.70 m、短軸0.38 m、深さ0.1 mを測る。長軸方向はN-2°-Wである。

遺物は出土していない。

時期は中世より古いと考えられるが、時期は限定できない。

SD25（Fig.22） D1区の西部に位置し、北側は調査区外に延びる。平面形はSD26と平行して南北に走る溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、4.2 m前後である。重複関係は、SD29を切る。規模は長軸5.28 m、短軸0.36 m、深さ0.1 mを測る。長軸方向はN-24°-Eである。

遺物は、須恵器・土師器・土師質土器など10点出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期は、埋土の特徴から近世と考えられる。

SD26（Fig.22） D1区の西部に位置し、北側は調査区外に延びる。平面形はSD25と平行して南北に走る溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、4.2 m前後である。重複関係は、SD29を切る。規模は長軸5.2 m、短軸0.3 m、深さ0.08 mを測る。長軸方向はN-25°-Eである。

遺物は出土していない。

時期は、遺構の特徴からSD25と同時期の近世と考えられる。

SD27（Fig.24）　D1 区の南西部隅に位置し、西側は調査区外に延びる。調査したのは溝の北側の肩に留まるが、東西に走る溝と推定される。断面は、南側の肩が攪乱により削平され低くなっているが、逆台形と推定される。底面の標高は、4.12 mである。重複関係はなく、SX08A と同時期である。規模は長軸 1.02 m、短軸 0.4 m、深さ 0.08 mを測る。長軸方向は N-80°-W である。

遺物を 1 点図示した。251 は美濃産の菊皿である。口縁端部はヘラでカットされ、体部外面には縦方向のヘラ刻線が施される。体部がわずかに丸味を帯び、高台は断面方形のケズリ出しで、底部から体部下方にはケズリ調整される。高台周辺を除き、灰釉が見られる。登窯第 2 小期と考えられる。

時期は、江戸前期前葉と考えたい。

SD28（Fig.33）　D1 区に位置する。南から北に向かって真っ直ぐに走った後、直角に東に向きを変える L 字状の溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、3.96 mである。重複関係は、SD22・SD29・SE02 に切られ、SX10 を切る。規模は南北 4.89 m、東西 7.78 m、短軸 0.8 m、深さ 0.25 mを測る。長軸方向は N-87°-W である。

遺物は、須恵器・土師器の 15 点が出土し、うち 6 点を図示した。252 から 254 は湖西産の須恵器である。252 は合子状坏身である。焼成はあまく、表面は摩滅している。口縁部は受け口状を呈し、立ち上がりは内傾し突出しない。7 世紀後半の古段階であろう。253 は有台坏身で、底部と体部の境は、ケズリ調整が施され、外側に強く折れる。8 世紀前半と考えられる。254 は盤の口縁部で端部を面取りし、平らに仕上げている。8 世紀後半である。255 から 257 は土師器である。255 は大型な碗である。内面と底面には、放射状の暗文が施されている。全体的に丸味をもつ半円形を呈し、内外面は赤彩されている。7 世紀後半と考えられる。256 から 257 は、甕である。口縁部の特徴から、256 は 7 世紀末から 8 世紀前半で、257 は 8 世紀後半に下がるものである。

時期は、出土遺物の特徴などから、8 世紀後半に埋没したと考えられる。

SD29（Fig.33）　D1 区の西部中央に位置する。西側は調査区外に延びる。平面形は東西方向にまっ直ぐに延びる溝である。断面は逆台形を呈する。底面の標高は、3.94 mである。重複関係は、SD28 を切り、SD25・SD26・SX09 に切られる。規模は長軸 5.71 m、短軸 0.78 m、深さ 0.2 mを測る。長軸方向は N-55°-W である。

遺物は、土師質土器・中世陶器が 150 点出土し、うち 8 点を図示した。土師質土器は内耳鍋が 127 点を占め、溝の底面からまとまって出土している。258 は渥美湖西産の小型壺で、2b 期と考えられる。259 は擂鉢であり、口縁部の特徴から、古瀬戸後期Ⅳ期古段階である。260 はロクロ成形の土師質土器かわらけの底部である。261 ～ 264 は内耳鍋で、まとまって廃棄されたものである。体部外面は丁寧なハケ、口縁部は横ナデ調整が施されている。A 類に属することから、15 世紀後半から 16 世紀前葉と考えられる。265 は土師質土器羽釜である。口縁部を立て、端部に平らな面を有するなど、16 世紀後半と考えられる。

時期は、出土遺物の特徴などから、16 世紀に埋没したと考えられる。

SD30（Fig.22・33）　D1 区の西部南に位置する。南側と西側は調査区外に及ぶ。SD30 は東西方向にまっ直ぐに延びる溝である。断面は皿形を呈する。底面の標高は、4.07 mである。重複関係は、SP26 に切られ、SD25・SD26 を切る。規模は長軸 6.4 m、短軸 0.24 m、深さ 0.08 mを測る。長軸方向は N-67°-W である。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・土師質土器が 12 点出土し、うち 1 点を図示した。266 は渥美湖西産の山茶碗で、3a 期と考えられる。

時期は、埋土の特徴から 16 世紀末から 17 世紀と推測される。

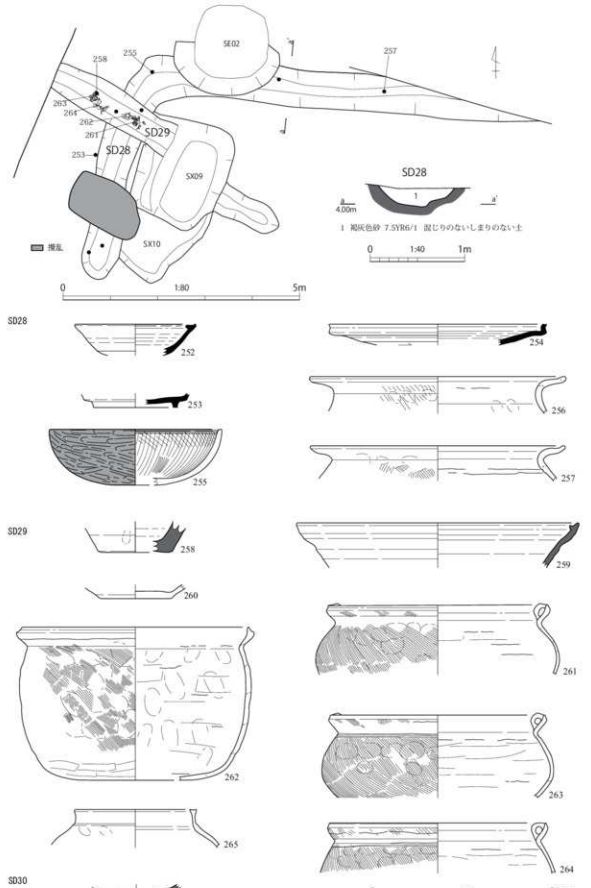


Fig.33　D 区 SD28・29 遺構図、SD28 ～ 30 出土遺物

vi）井戸 SE

SE01（Fig.32）　D2 区の北部中央に位置する。当初は野溜めと考えられたが、掘削を行ったところ、深さが 3 m以上あり、井戸であることが判明した。断面は長方形を呈する。重複関係は、SD19 を切る。規模は直径 0.76 mを測る。井戸は、厚さ 6 cmの幅で、真砂土に石灰と苦汁を混ぜて練り叩締め固めたもので、三和土技法で作られたものである。

遺物は、遺構内に近代の土瓶やガラスなどが廃棄されていた。

時期は、近代と考えられる。

SE02（Fig.34）　D1 区の北壁際中央に位置する、石組みの井戸である。検出段階で調査区より外に及んでいたため、工事範囲ぎりぎりまで広げて調査を行ったが、北側の掘方を確認できなかった。さらに掘方は埋土の締まりがないため、崩れる恐れがあり完掘できなかった。平面形は円形を呈する。底面の標高は、2.75 mである。重複関係は、SD28 を切る。規模は直径 2.15 m、深さ 2.55 を測る。井戸は掘方を掘削し、円筒形に石を組んで井戸側としたものである。その積みあげについては、宇野隆夫氏の分類の 13C1 類、石組円筒形に類似する。井戸底には、底板や井戸枠などを設置した痕跡はない。石の積み上げについては、確認できた範囲では、約 16 段である。最下段の基底石（1 段目）は、10 個の底石を縦積みで並べている。石は、角礫が 3 個、他は円礫で、大きさは長軸 30 cm、幅 15 ～ 25 cmを測る。この底石の外側を、長軸 6 cmから 10 cm程の円礫を横に並べて支えている。その数は、半分で 86 個である。2 段目と 3 段目は、井戸枠となる内側の石が、半分で 13 個あり、18 cmから 20 cmの大きさのものを横積みしている。石は円礫である。積み石に使われる石はほとんどが円礫で、角礫は 2 個から 3 個程度であり、12 段目からは全く使用されていない。8 段目まで半分の数となるが、井戸枠を構成する内側の石は、14 個から 16 個である。大きさは、長軸 15 cmから 18 cmと少し小さくなる。裏込め石は、115 個から 124 個で、長軸 5 cmから 8 cm、幅 6 cm前後を測る。12 段目からは、全体数となり、井戸枠の石が 31 個前後を数える。大きさは長軸 14 cm～ 17 cm、幅 4 cmから 6 cmを測る。裏込め石は、190 個から 249 個あり、石の隙間は砂利で固められていた。15 段目では、井戸枠の石は 32 個で、長軸 10 cmから 14 cm、幅 7 cmから 10 cmの大きさである。裏込め石は 58 個で、長軸 8 cmから 10 cm、幅 5 cm前後である。18 段目は、井戸枠の石が 37 個で、大きさは長軸 9 cmから 12 cm、幅 8 cm前後を測る。裏込め石は 95 個で、長軸 6 cmから 8 cm、幅 5 cmである。また、この最上段では、石塔の破損品 2 個が石積みに使用されていた。特に 275 宝篋印塔の相輪は横に寝かして、他の石と同じ積み方をしているのに対して、276 一石五輪塔は、立てて用いられていた。また、一石五輪塔と対比するように、西側の石積みの中にも 1 個立てた状態の石が見られた。一石五輪塔とこの石が、井戸枠を支える機能を持っていたとも推測される。一般的には、掘方の壁に接して直接石組みされるが、今回の様に、掘方と石組の間に広い空間を設ける手法は、この土地の立地条件によるものなのか、類例を確認する必要がある。

遺物は、須恵器・土師器・中世陶器・土師質土器・近世陶磁器・瓦などの土器の他、石製品や石造品（石塔）もあり、合わせて 60 点が出土した。うち 10 点を図示した。267 は瀬戸美濃産の丸皿で、大窯第 3 段階前半である。268 から 269 は、瀬戸美濃産である。268 は折縁深皿の口縁部であり、外に大きく外反させるもので、古瀬戸後期Ⅱ期と考えられる。269 は擂鉢の底部で大窯段階である。270 は近世瀬戸産の擂鉢で、井戸内の底から出土している。271 は小型の内耳鍋 A 類である。272 は石積に利用された丸瓦である。凹面にはコビキ A 技法が見られ、凸面の一部に縄目の叩き痕が残る。273 は砂岩製の砥石で、全面使用痕が見られる。274 も砥石で、火を受けて変色している。275 は砂岩製の宝篋印塔の相輪である。花弁が省略される請花であり、新しい要素が認められるが、丸く太鼓形を

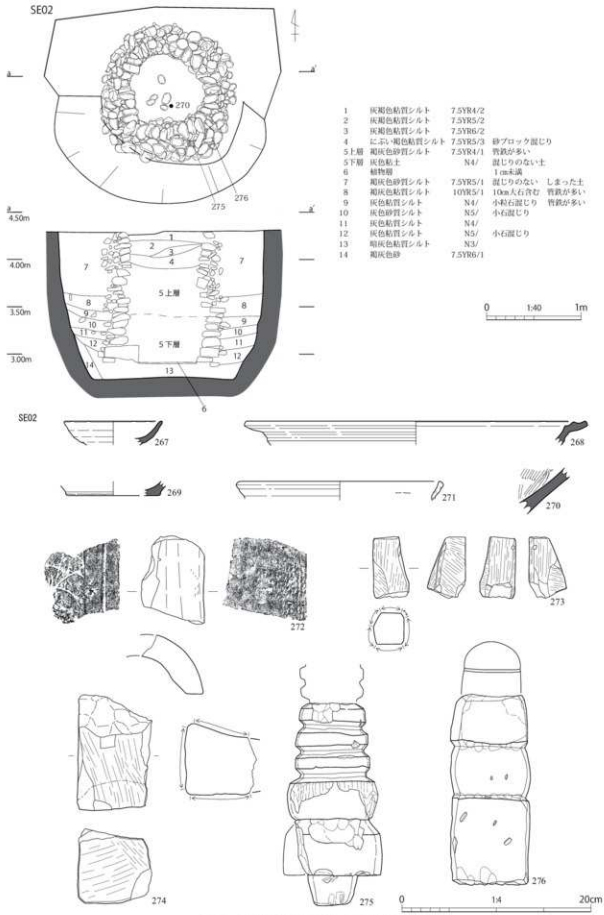


Fig.34 D区 SE02 遺構図・出土遺物

呈する。また、九輪の溝の幅は、広く深い作りで、15 世紀後葉と考えられる。276 は砂岩製の一石五輪塔で、空風輪が欠損している。石材の加工は丁寧な作りとなっており、16 世紀後半と考えられる。2 基の石塔は、火を受け変色している。

時期は、16 世紀末から 17 世紀前葉と推測される。

vii）遺構外出土遺物

遺構以外の攪乱や包含層からの出土遺物は、47 点を図示した（Fig.35・36）。277 ～ 283 は、湖西産の須恵器である。277 は坏蓋、279 と 280 が箱坏で、8 世紀後半と考えられる。278 は合子状坏身で、7 世紀中葉である。281 は盤の脚部である。282 は長頸壺で、台形の高台が外側に付けられる。盤と長頸壺は、7 世紀末である。283 は甕の口縁部下に断面三角形の突帯を配し、端部を上下に延ばすもので、7 世紀後半と考えられる。284 から 290 は、古代の土師器である。284 は半円形を呈した碗で、内面にハケ調整が施される。7 世紀後半である。285 は赤彩された皿である。286 は外反しない口縁部を有する鉢である。287 から 290 は、甕である。287 と 288 が、7 世紀末から 8 世紀前半のものである。289 と 290 は、8 世紀前半と後半の土器である。291 から 297 は、渥美湖西産の山茶碗である。291 は器壁を薄く作り、口縁部を少し外反させるものであり、1a 期と考えられる。292 は 2a 期である。293 は完形に近いもので、口縁は緩やかに外反させるとともに、肥厚させている。底部は低く、端部に砂粒痕が認められる。2b 期古段階と考えられる。294 ～ 297 は、底部破片であり、高台の特徴から 294 が古く、2a 期で、295 は 3a 期となる。他は 3b 期である。298 と 299 は、天目茶碗で古瀬戸後期Ⅲ期と考えられる。300 は灰釉が施された平碗で、口縁部は大きく開くことから古瀬戸後期Ⅳ期新段階である。301 は見込み部に卸目を付けた卸皿で、古瀬戸後期と考えられる。302 と 303 は、瀬戸産磁器の中碗で、端反形であることから、登窯第 11 小期と考えられる。304 は美濃産丸皿で、登窯第 4 小期と考えられる。305 は志野皿である。登窯第 3 小期と考えられる。306 は瀬戸産陶器の染付小皿である。登窯第 10・11 小期である。307 は瀬戸産の擂鉢で、体部は直線的に開き、口縁直下で窪んで、内面にも段を有する。口縁端部を丸く肥厚させる。口縁部の特徴から、登窯第 9 小期と考えられる。308 は美濃産の白磁型打皿で、角形を呈する。309 は肥前産で、器形は特定できない。19 世紀と考えられる。310 は肥前産磁器の筒形小鉢で、近世であろう。311 は美濃産の志野向付で、登窯第 1 小期と考えられる。312 は小型の秉燭で、鉄釉が施される。登窯第 9・10 小期である。313 ～ 315 は土師質土器のかわらけで、314 が手づくね成形、他はロクロ成形である。316 は伊勢型鍋である。317 ～ 321 は内耳鍋で、口縁部の特徴から 318 が A 類で、319 は伊勢系の C 類、他は直立型の B 類である。16 世紀と考えられる。322 は鍔付の茶釜である。16 世紀後半のものである。323 は丸瓦で、凹面にコビキ B 技法が見られる。なお、302・305・308 ～ 310 の近世陶磁器は、C 区の北壁面の Ⅱ 層上面から出土している。

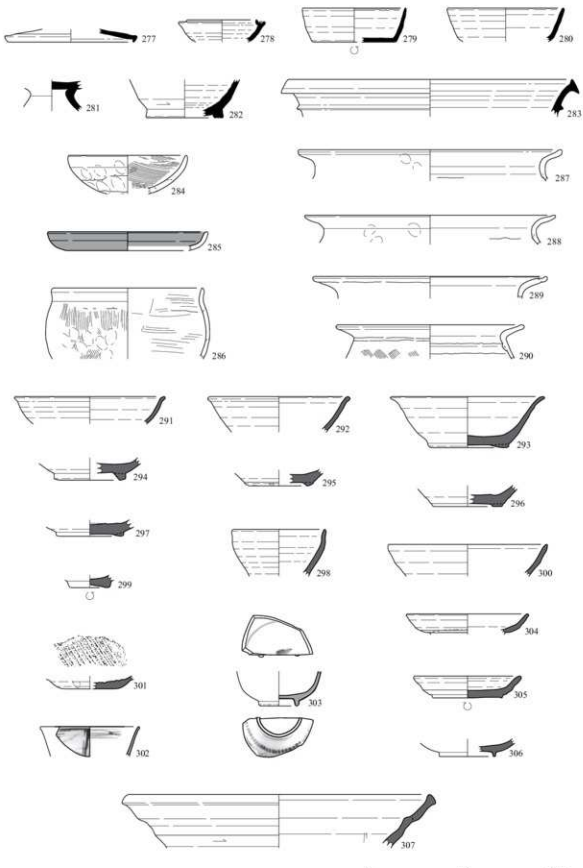


Fig.35　西地区 遺構外出土遺物 (1)

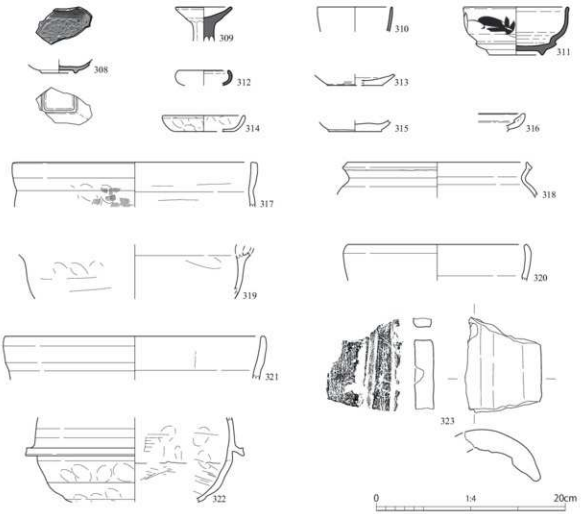


Fig.36　西地区 遺構外出土遺物 (2)

第3章　総　括

1　発掘調査の成果

（1）各時期の遺構と遺物

今回の13次調査では、古代から近世までの遺構と遺物を確認した。これらの遺構と遺物の時期を集約すると、大きくⅠ～Ⅲ期の3時期にまとめることができる（Fig.37）。

Ⅰ期　古代の7世紀後半から8世紀、この地域に集落が形成された時代である。

Ⅱ期　中世の12世紀から16世紀である。この時期は、前期の12世紀から14世紀前半と、後期の14世紀後半から16世紀末に分けることができる。前期が城下町以前の引間宿の時代、後期が中世城下町形成期から家康入城後の時代となる。当遺跡の遺構や遺物の資料が、最も多く充実した時期である。

Ⅲ期　江戸時代の17世紀から19世紀中葉までの城下町の時代である。

ここでは、この時期区分に従ってまとめ、遺構は東地区の道遺構と西地区の井戸について、歴史的背景を考察したい。

ｉ）Ⅰ期　古　代

西地区D1区より7世紀後半から8世紀にかけての遺構が確認された。その内の不明遺構SX08B・SX10は、長方形または隅丸方形の竪穴状遺構である。ここには、炉や柱穴など住居に関連する遺構が確認できなかったうえ、規模も一辺が2m余りと小形のものであった。この時期の竪穴建物は、一辺3～5mの規模からなり、平面形を隅丸方形または方形にすることが普遍的である。これに対し、不明遺構SX08Bは小規模ではあるが、土坑SK05を貯蔵穴と考えると、出土した一括遺物から7世紀後半の竪穴建物と想定することもできる。その後8世紀には、居住域を区画する溝SD28が出現するが、それに伴う建物跡は確認できなかった。たとえ不明遺構を竪穴建物と考えられなくても、土坑として認識することは可能と思われるので、当地域に小規模ながら何らかの集落が営まれていたことは明らかであろう。

遺物は、須恵器278点、土師器462点の計740点で、全遺物の28.6%を占めていた（Tab.2）。調査区全体から出土しているが、西地区D1区の遺構に伴ってまとまって出土するなど、この地区が居住域の一角であったことが、このことからも推定された。土器の器形では、須恵器では、合子状坏身・

Tab.2　13次調査 地区別出土遺物分類表(破片数)

器種 ＼ 地区	[illegible]		[illegible]			[illegible]		[illegible]		[illegible]		[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	[illegible]	[illegible]						[illegible]		[illegible]	[illegible]	
	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]	[illegible]			[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]			[illegible]
A区	74	22	149	4	3	37	13	7	3	2	1	22	4	44	3	2	4	19	4	33	0	3	0	0	71	14	7	2	4	361
B区	13	10	12	0	1	4	2	2	0	0	1	7	2	7	1	8	0	0	2	127	2	4	0	0	203	21	27	0	1	496
東地区 計	87	33	164	4	6	31	15	9	2	8	3	30	6	51	3	11	4	19	6	182	2	9	0	0	374	65	34	5	3	1057
C区	31	15	34	2	3	7	2	6	0	2	6	9	2	17	4	3	1	3	2	14	3	0	0	0	65	4	13	9	1	333
D区	170	415	135	0	7	13	3	9	0	6	0	37	8	31	5	4	0	5	3	245	11	13	3	3	141	15	5	4	6	1277
上層D1	40	80	39	0	1	2	1	2	0	3	0	9	3	7	1	0	0	0	1	16	0	4	0	0	60	3	1	1	0	290
上層D2	89	118	75	0	5	8	1	6	0	3	0	14	3	12	4	1	0	1	0	28	9	3	0	3	33	10	4	2	3	412
下層D1	33	210	31	0	1	3	1	1	0	0	0	14	2	2	0	3	0	4	2	204	2	6	3	0	39	2	0	1	4	575
西地区 計	191	430	159	2	9	28	6	17	0	8	6	45	10	38	9	7	1	8	5	259	14	22	3	3	286	19	18	13	7	1529
合計	278	462	323	6	15	51	21	26	2	10	2	75	16	89	12	18	5	18	11	441	16	31	3	3	400	84	52	18	11	2586

坏蓋、有台坏身、摘蓋、無台坏身（箱坏）、皿、盤、長頸壺、甕がある。これらは、用途によって、坏類や皿類などの供膳具と長頸壺や甕などの貯蔵具に分けられるが、出土量は供膳具が圧倒的に多い。それは、当遺跡に関わらず普遍的なことであったと言える。坏類で年代の変化を見ると、古墳時代からの流れを受け最小化した合子状坏（252）が、7世紀中葉から出現する。その後、返蓋を伴う蓋坏となるが、碗形の坏身（165）だけが確認されている。8世紀前半になると、有台坏身（26）が主体となり、出土量も多い。8世紀後半には、蓋坏の主体は箱坏へと変わる。9世紀段階の土器が出土してないことから、この段階で碗皿類などの供膳具が、終焉を迎える。貯蔵具では壺（166）、長頸壺（282）、甕（283）が7世紀後半から出現し、8世紀の広口長頸壺（69）まで、数量は少ないものの継続的に見られる。土師器は碗・皿・鉢・甑・甕などの器形が見られるが、煮沸具の甕が圧倒的に多い。碗は少なく、大型の碗（255）と小型の碗（284）があり、7世紀後半に位置付けられる。この時期に長胴化した特徴的な甑（146）と長胴甕（167）がある。甕は口縁部の形状を変化させ、7世紀末から8世紀前葉の甕（256）、8世紀前半の甕（288）、8世紀後半の甕（290）と引き継がれるが、8世紀後半以降には見られなくなる。それ以外のものでは、鉢（286）は8世紀前半で、皿（285）は8世紀後半と考えられる。土師器は、須恵器と同じ7世紀後半から8世紀に限定される。須恵器は生産地である湖西窯が近接していることから、湖西窯の製品で殆どが賄われている。出土土器の型式と継続性から、当地域における集落は7世紀後半に始まり、8世紀後半まで継続して営まれたと考えられる。

ⅱ）Ⅱ期　中　世

今回の調査では、最も多くの遺構がこの時期に集中する。

前期には、溝遺構と不明遺構が検出されている。東地区A区には、東西方向の溝と不明遺構のSX02・SX03があり、西地区では溝の確認に留まっている。住居と考えられる掘立柱建物の柱穴は見つかっていないものの、12世紀から13世紀の遺物は一定量出土していることから、居住域であったことは明らかである。A区の溝SD02・SD06については、埋土の状況から溝SD01と溝SD03の前身となる道に伴う溝ではないかと考えられた。これに対し西地区の溝は、調査区に対して南北方向に走っており、東地区の溝と規模や方向は違うが、溝の方位からは一定の計画性の中では捉えられるものと考えられた。さらに、この地点を境に西側にはこの時期の遺構は見あたらなかった。

後期では、15世紀前葉に東地区の溝SD01と溝SD03が見られ、両溝は水路として機能しており、その間を道（路）遺構である道SF01と把握することができる。この道SF01を中心に、溝SD04・SD08・SD09など15世紀後半から16世紀前半までの区画溝と考えられる溝が出現する。それらの区画溝で区画された空間には、柱穴SPが検出されている。建物の全体規模や構造までは分からないが、溝SD03の南に居住空間が想定される。西地区では、中央部を南北に走る溝SD15・SD18から構成される水路に対して、調査区北部に位置する東西方向に走る溝SD19や溝SD22・SD30が直行するなど、住居区画を思わせる計画性が認められる。また、溝SD29や不明遺構SX09からは、土師質土器の鍋や陶器の生活用具が出土している。このことからも、西地区が居住空間であったと考えられる。なお、道SF01は、西地区のC区手前で遺構の確認ができなかった。これは、現在の町道から萬福寺の北側に鎮座する浜松八幡宮へと向かう南北道に折れ曲がったか、交差点となっていたためではないかと考えることができる。16世紀末頃から17世紀前葉には、西地区に井戸SE02が作られる。この井戸SE02については後述するが、この時期に寺院の再整備が行われたことで、近世絵図に見られるような寺と村（農家）に再編されることにより、西地区ではこれ以降に遺構が希薄となる。

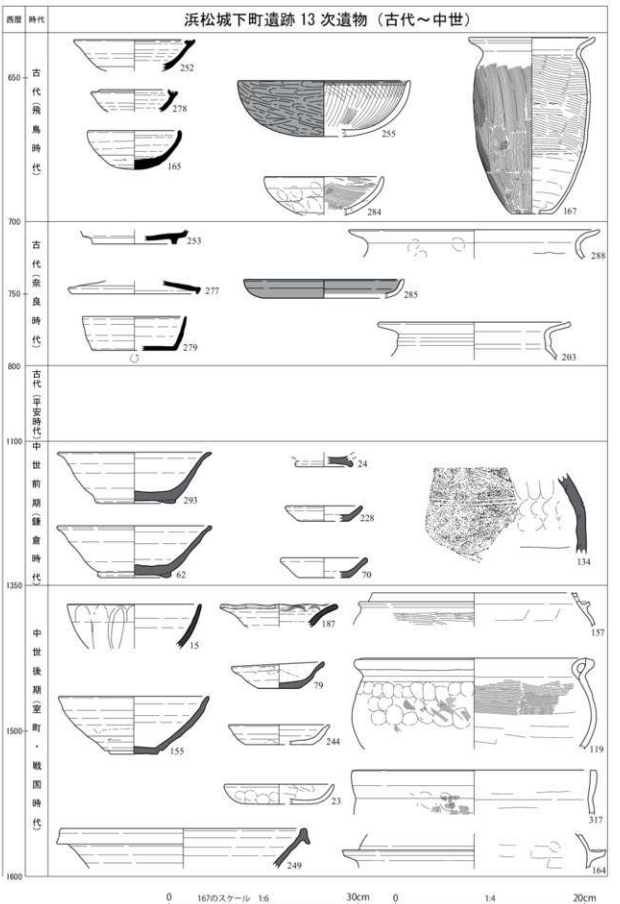


Fig.37　出土遺物成果 (1)

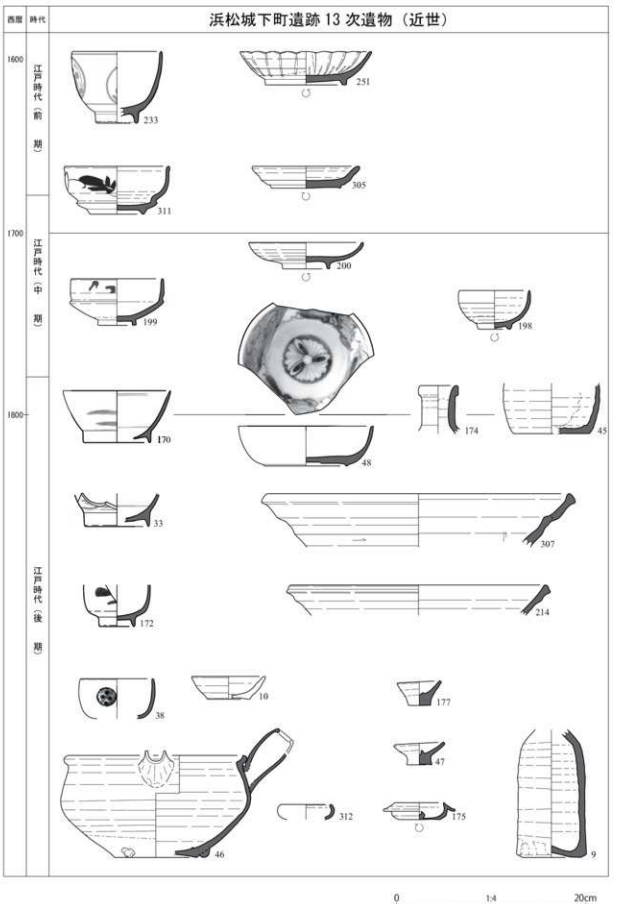


Fig.37 出土遺物成果 (2)

中世は、道路網の整備や造船技術の発達に伴う港湾整備など、流通経済が飛躍的に成長した時代である。渥美湖西・常滑・瀬戸美濃地域などの、東海の一大窯業生産地の影響を強く受ける当地域は、より多種な土器が流通する。そのため、出土した土器をカウントし分類することで、当時の社会の一面を復元することが可能であり有効であると考える。陶磁器の出土点数は、583 点で、全体の 22.4%を占めている（Tab.3・4）。生産別の内訳は、湖西渥美産 416 点、常滑産 28 点、瀬戸美濃産 91 点、初山産 12 点、志戸呂産 18 点、中国産 18 点である。時期幅が長いので、12 世紀から 14 世紀前半までの前期と、14 世紀後半から 16 世紀末までの後期に分ける。

前期は、山茶碗類を中心とした碗皿類の供膳具に、常滑産や渥美湖西産の貯蔵具で構成される。常滑産の器形は、甕・壺・片口鉢Ⅱ類で、貯蔵具を中心に渥美湖西産を補完するものであり、特に甕は、後期のものが多い。湖西渥美産は、碗皿類のほか、壺・甕・片口鉢Ⅰ類などの器形があり、土器を用いる生活用具類は、ほぼ供給していることになる。

山茶碗類では、時期が判別できたのは 83 点である（Tab.3）。安井氏編年（安井 2012）に従えば、1a 期は、碗（291・151）が 5 点である。1b 期は、碗（179）が 1 点と小碗（95）1 点である。2a 期は、碗（292・103）14 点で、全て碗である。他に、片口鉢Ⅰ類と壺甕類が出土している。2b 期は、碗（293）12 点と小皿（229）1 点である。他は、片口鉢Ⅰ類と壺類が出土している。小碗が消滅するのに代わり、この段階で小皿が出現している。また、壺甕類は、この時期以降なくなる。3a 期は、碗（62）18 点と小皿（109）1 点である。3b 期は、碗（227）9 点と小皿（228）が 1 点である。3c 期は、出土していない。以上のことから、1a 期段階から土器は確認されるものの、2a 期にまとまった量が出土するなど、12 世紀後半に画期が求められ、3b 期 13 世紀後半古段階まで継続して、一定の消費が認められる。しかし、3c 期に突如碗皿類が消滅してしまう。この時期、山茶碗の生産が減少することが、要因の一つと考えられるが、東濃型の大畑大洞窯では、生産が継続されている。その為、他の遺跡では東濃型の製品が出土しており、流通による問題とは考えにくく、生産が断絶したものと考えられる。

舶載陶磁器は、前期と後期をまとめて取り扱うことにする。出土した陶磁器は、Tab.2 の青磁 16 点、白磁 2 点の 18 点である。青磁は、碗・皿・盤の器形がある。青磁碗は、原廣志氏分類（原 1999）の、A 類不明 1 点、A0 類 1 点、A2 類 1 点、A4 類 1 点、B 類 1 点、B1 類 1 点、B2 類 1 点、B3 類 2 点、B4 類 1 点、D1 類 2 点の 12 点に分類される。皿は稜花皿 1 点で、盤は 3 類 2 点、盤か大皿片が 1 点である。白磁は 15 世紀の碗と皿が、各 1 点ずつとなっている。12 世紀後半から 13 世紀前半に、青磁碗 A 類が一定量を出土し、国産陶器の山茶碗類が共伴する。13 世紀中葉から 14 世紀前半は、青磁蓮弁文碗 B1 類と白磁口禿皿Ⅵ類が伴って碗皿類が出土するが、皿類である白磁の製品は見あたら

Tab.3　中世前期 渥美湖西産陶器 器種一覧表 (破片数)

器種＼年代		12世紀				13世紀				14世紀		合計
		1a	1b	2a	2b	3a	3b	3c				
山茶碗類	碗	5	1	14	10	17	9	0				65
					2	1						
					1	2						
	小碗			1								6
				1								
				5								
	小皿					1	1	1				12
						9						
片口鉢Ⅰ類				1	3							14
					10							
壺類				2	4							6
甕類		1		3								4
合計		5	2	20	20	19	10					107
		1			12							
		6		1		11						

なかった。これに対して、14 世紀末から 15 世紀は、全体的に陶器類の数量が少ない状況の中で、青磁と白磁の碗皿類が出土し、特異な器形にあげられる青磁盤が出土しているなど、これらを使用していた階層が調査地周辺にあって、繁栄期を映しているものとみることができる。以上のことから、舶載陶磁器は、12 世紀後半から 13 世紀前半と、14 世紀末から 15 世紀に、碗皿類を中心に搬入された状況が見られた。

後期は、瀬戸美濃産・常滑産といった従来の生産地に対して、初山窯・志戸呂窯など地方窯の生産が開始され、操業が確立されると、生産地間での競合が行われ、器形による補完関係が一層鮮明となる。特に常滑産の製品は、甕を主体的に生産する構造へと転換が図られる。そのため、当遺跡でも 15 世紀から 16 世紀の常滑産は、甕だけとなっている。

瀬戸美濃産の破片の総点数は 91 点である。その器形は、古瀬戸前期は無く、中期Ⅳ期で瓶子が出現するが、碗皿類はない。後期Ⅰ期も中期と同じ傾向であり、後期Ⅱ期になって天目茶碗・擂鉢が出現する。後期Ⅲ期になると 14 点を数え、灰釉平碗・鉄釉小皿・尊式花瓶などの器形構成となり、碗皿類がセットを成すなど、一定の生活様式を窺うことができる。後期Ⅳ期では、31 点と破片数が増してピークを迎える（Tab.4）。器形も、天目茶碗・灰釉平碗・鉄釉小皿・卸皿・擂鉢・盤・耳付水注など多種で、新たな器形も多く出現する。その上、志戸呂産の緑釉小皿・擂鉢が搬入される。なお、この時期の中でも、古段階 15 世紀中葉に主体がある。大窯期に入ると、出土品の数は 1 期 2 点と極

Tab.4 中世陶器 器種一覧表 (破片数)

産地	器形名		前期(1190~1240)					中期(1240~1320)					後期(1320~1400)					大窯(1400~1610)						合計
			I	II	III	IV	前期 I~IV	I	II	III	IV	中期 I~IV	I	II	III	IV	後期 I~IV	1	2	3	4	大窯 1~4	15~16	
瀬戸美濃	天目茶碗	天目茶碗												2	4	1古					1			9
																					1			
	碗類	灰釉平碗													9	2古1新	1							14
																1								
	小皿類	鉄釉小皿															1							2
																				1				
		卸目付大皿														1古								1
		灰釉丸皿																		1前				1
		緑釉小皿														2古								3
															1									
		緑釉はさみ皿																1						1
	卸皿	卸皿														1古	2							3
	擂鉢	擂鉢														5	1	1	1	1前		5		29
																12Ⅳ古			2	1				
	盤類	折縁深皿												1										1
		盤															1							4
																3								
	壺瓶類	四耳壺															2							2
		瓶子										1	1											5
										1				1		1								
		耳付水注														1								1
		祖母懐茶壺															2							2
		壺															2							2
		小壺か小瓶															1							1
	神仏類	花瓶															1							1
		尊式花瓶													1									7
														6										
	その他	土瓶															1							1
		入子					1																	1
		小計					1					1	1	3	14	14	15	2	1	2	1	5		91
										1				8		17			4		1			
志戸呂	小皿類	緑釉小皿														3古								3
	擂鉢	擂鉢														14								14
	壺瓶類	壺															2							2
初山	天目茶碗	天目茶碗																		1後				1
	擂鉢	擂鉢																		3後	3			6
	壺瓶類	有耳壺																		1後				1
		壺か瓶																		1後	1			2
	その他	鍋か																			1			1
		匣鉢																			1			1
常滑	甕	甕																8						8
		合計					1				1	1	3	14	43	17	2	1	8	6	7	8		130
										1				1	7	5			2	1	1			

端に少なく、縁釉はさみ皿・擂鉢に限定される。2 期段階も前段階同様、擂鉢 1 点と少ない。3 期では鉄釉小皿・灰釉丸皿の皿類と擂鉢の 2 点となる。しかし、地元で生産される初山産の製品が搬入され、天目茶碗・擂鉢・有耳壺・壺瓶類などが共伴する。この時期に、瀬戸美濃系製品から初山窯に移行する変化を見ることができる。4 期になると、天目茶碗に留まる。初山産は前期の流れを受け、擂鉢・壺か瓶・皿鉢などが見られるが、初山窯の生産の衰退により、近世瀬戸美濃系へと変わって行く。後期では、15 世紀前半に多種な器形が出現するなど画期が求められ、15 世紀後半まで充実した内容を示すが、断続的であり次第に衰退する。その後、16 世紀後半に初山窯の生産が本格化するなど、17 世紀に入ると出土量が少なくなる。

16 世紀後半から 17 世紀前葉において、この時期に最も多く出土した器種器形は土師質土器鍋類の 974 点で、全体量の 37.6%を占める。その中でも、器種の明らかな鍋に占める内耳鍋は約 90%と高率になっている。この鍋は、煮沸具として東海地域で普遍的なものであるが、形状に地域色が強く反映される。ここでは、形態から分類し、当遺跡の特徴を把握する。内耳鍋は、口縁部をくの字形に外反し、半球形の体部を有するものが A 類、口縁部をわずかに外反し、屈曲させる内湾型の B 類、南伊勢系鍋と同じ形態の特徴をもち、内面頸部下方に内耳を取り付けるものを C 類とした。A 類は口縁端部を外に折り返す 1 類と折り返さない 2 類に分けた。A1 類は横ナデ調整され端部を丸く厚くするもの（75・118・119・261）と、端部を引き上げるもの（89・159・160・161・262）がある。A2 類は口縁端部を平らに仕上げ肥厚させるもの（98・120・209・241）と、口縁部が短く頸部を肥厚させるもの（30・76・77・125）がある。年代については、溝 SD29 から古瀬戸後期Ⅳ期古段階の擂鉢が、A1 類と共伴して出土していることから、15 世紀中葉段階に出現すると考えられる。また、磐田市元島遺跡（静岡県 1998）の A1 類に類例が見られることや、豊橋市境松遺跡土坑 SK30（豊橋市 2018）では古瀬戸後期の土器と共伴し、15 世紀前半に位置付けられている。A2 類は A1 類と混在して存続するが、大窯期に主体をなす形態である。B 類は、口縁端部に面を作るもの（317）と、丸く仕上げるもの（320）がある。この類は、湖西市長谷元屋敷遺跡（湖西市 1987）の内耳鍋 C 類に類例が求められ、16 世紀後半から出現する。以上のことから、A1 類→ A2 類→ B 類の順に出現するものと考えられる。当遺跡では、A1 類が 15 世紀中葉から 16 世紀前葉、A2 類が 16 世紀前半から後半古段階、B 類は 16 世紀後半から出現し、茶釜などの器形と共伴する構成と考えられる。17 世紀は数量が激変し、早い段階で鍋類は見られなくなる。この時期の様相は、周辺遺跡の構成と同じ特徴を示している。

iii）Ⅲ期　近　世

後世の土地区画や攪乱により、この時期の遺構は少なく、遺構が検出できたのは東地区の A 区と西地区の C 区・D1 区に限定される。17 世紀では、西地区 D1 区の溝 SD27 が確認されている。D1 区の周辺は、17 世紀には寺域と考えられ、溝の SD26 と SD27 はそれに関連するものである。土坑の SK02 と SK03 は用途を限定することは難しく、時期も近世としたが更に下る可能性が考えられる。18 世紀後半になると、西地区の C 区に溝と柱穴が見られる。柱穴は、溝 SD10 と溝 SD11 に区画された空間にまとまっている。しかし、建物を具体的に推定できる柱穴列の並びは、根石を使う柱穴もあり建物が存在したことは確実であるが確認できない。また、東地区の A 区では、遺構は検出していないが野溜め遺構内から 18 世紀後半から 19 世紀の土器が見つかっている。一方、東地区では 19 世紀には確実に耕作地（生産域）へと変貌した痕跡が、A 地区の野溜め遺構の SX04 や SX05 から読み取れる。また、同区からは埋葬施設と想定される土坑 SK01 が確認されている。以上のことから、城下町の成立以降この周辺は、居住域と生産域が混在し、居住域もやがて生産域に変遷していった

場所であったと考えられる。

この時期の遺物については、近世陶磁器・土師質土器共に破片資料が多い（Tab.5）。特に、17世紀の古手の製品に破片資料が多い点は、調査地点において積極的に使用し廃棄されたか、他所から

Tab.5　近世陶磁器器種一覧表（破片数）

年代		1600			1650			1700			1750			1800			1850			1900	合計
瀬戸美濃編年		大窯4	第1小期	第2小期	第3小期			第4小期	第5小期	第6小期	第7小期			第8小期	第9小期	第10小期	第11小期			近代	
産地	分類		前期					中期						後期							
瀬戸	天目茶碗					1		2												1	5
					1																
	碗類													1		2		1			9
													2				3				
	皿類														1		2			1	5
																1					
	鉢類																	1			1
	擂鉢			2											1	1				6	11
														1							
	瓶類					1									1						3
																1					
	灯燭															2		1			3
瀬戸美濃	碗類			2												2					5
														1							
	皿類				2												1			1	4
						1															
	鉢類			1																	1
	行平鍋															1					1
	瓶類																3			1	5
																	1				
	小杯																1				1
	灯燭																	1			1
美濃	碗類					1					1									1	3
	皿類			1				1		1							1				4
	鉢類												1								4
														1	1			1			
	向付		2																		2
	行平鍋																	21			21
	瓶類										1						1				3
											1										
	徳利														1					1	2
	壺類											1									1
	香炉																			1	1
	灯明皿																			1	1
	その他																			1	1
志戸呂	小鉢																			3	3
	瓶																			1	1
	徳利																			1	1
備前	中甕																			1	1
信楽	壺か瓶																			1	1
	土瓶																	1			1
その他	碗類																			1	1
	中瓶蓋															1				3	
	土瓶蓋															1					4
	灯明皿か															1					
	羽釜															1					
	不明																			2	2
肥前	小碗													1						1	13
											1										
	中碗			2				2						3						1	
										1											
	くら碗																	1			
	皿類							1						1						1	3
	鉢類				1															1	2
合計																					131

運び込まれたものが多かった可能性もある。製品の推定生産地は、瀬戸・美濃産が最も多い。この点は生産地が至近にあり、当然の結果といえる。瀬戸・美濃産は太白手の小皿、腰折形碗など、18世紀中葉以降の製品が主体を占めている。志戸呂・備前・信楽の製品は、壺・瓶類といった貯蔵具に限定され、瀬戸・美濃産の補完として生産地の特色を反映した結果が窺える。肥前産の陶磁器類は、17世紀後半から一定程度認められるが、蛇ノ目凹型高台皿、広東碗といった18世紀以降の製品が多い。以上のように、17世紀の製品に小破片が多く、18世紀中葉以降の製品に個体資料が散見されるのは、本調査地点における遺構の構築と廃棄が、18世紀の中葉以降を中心とする時期であったことを物語っている。19世紀以降の器形では、それ以前の碗・皿といった食膳具に加えて、土師質土器の羽釜、陶器の土瓶や行平など煮沸具が認められるのも、当該調査地点における18世紀後葉以降の継続性を示すものといえる。

（2）道 SF01 と井戸 SE02

各時代の遺物と遺構の様相から、7世紀後半から8世紀まで集落として出現するが、8世紀以降には廃絶する。その後空白期間を置いて12世紀後半から13世紀前半に再び山茶碗類を中心に出土遺物が多くなる。当地が居住域になると共に、人の動きも活発化したものと考えられる。しかし、14世紀になると遺物が極端に減少し、15世紀前半までその傾向が続く。これは、14世紀に政治的な要因により舶載陶磁器が減少し、それを補完する形で東海地域の生産が増加するもののその量は少なく、全国的にもこの時期の遺物が減少する傾向にある。そのため、当地域もその影響化にあり、陶磁器の出土量が減少するものの、継続的に人の活動があったと考えられる。そして、15世紀後半から16世紀に遺物の量が激増し、この時期が遺跡の盛期であることが窺える。17世紀になると再び遺物は激減し、18世紀後半以降になると、また、遺物の量が増大する傾向となる。遺物からは、当地域の様相を以上のように読むことができる。このような変遷の中で、遺跡の特徴を示す中世遺構として道遺構が挙げられる。

道 SF01 は、東地区で検出された東西方向に平行して走り、同時期に存在したと考えられる、規模の大きな溝 SD01 と溝 SD03 に挟まれた、幅約 5 m で、A 地区の東壁から B 地区の西壁までの延長 36 m 余りを道 SF01 とする。しかし、南側の側溝 SD03 は C 区にはみられず、船越方面から来た道は調査から除外した現町道下で T 字状もしくは L 字状に、折れ曲がったものと考えられた。調査区周辺には中世絵図が無いため、近世末の絵図に今回の調査区と中世の道遺構を加えて、凡その縮率と位置により合成したのが Fig.38 である。都市計画道路植松伊左地線（六間道路）以前の近世から続く船越方面への道よりも、やや北側に位置していたことになる。

道 SF01 の路面は、平らに整地され、部分的に粘土質シルトで堅く締めた土に、僅かに小石の散乱する部分が見られた。小石は舗装材として用いられたと考えられる。また、この整地面から出土した山茶碗は、口縁部の破片は無く、底部片がほとんどで、しかも摩耗したものが多く見受けられ、地均の整地土（客土）に含まれていたものと考えられた。

遺跡が所在する八幡町は、古い街路区画が残る地域で、調査区 A 区の東側と B・C 区間を南北に抜ける町道は、六間道路と比べて主軸が少し東に振れている。この町道の主軸は、今回確認された道 SF01 に対して直行しており、一定の計画性を読み取ることができる。それは、町内に鎮座する浜松八幡宮（伝・式内許部神社）や萬福寺などの社寺の主軸に同じで、街路に面した集落もこれらに長く規制されていると考えられる。このことからも現在まで残る町の区画が、中世の景観を今に残しているものとして考えられ、道 SF01 がそれを確認することができる遺構であると評価される。

Fig.38　旧街路図上の本調査区の位置

中世の道遺構の例としては、浜松市西区に所在する角江遺跡（静岡県 1996）で発見されたものがあり、現在の雄踏街道に平行した道である。道遺構は砂堆の高所を東西に延びているもので、その規模は道幅 3.6 m～4.0 mで、側溝をもつ構造となっている。道遺構の表面には砂利敷きを伴い、出土遺物から鎌倉時代から室町時代に使用された、雄踏街道の前進となる主要な道路であったと考えられている。その他に菊川市奥横地にある横地城下遺跡群（菊川町 2004）で、側溝をもつ道の例がある。道遺構は、現在の農道の下にあり道幅 2 m前後と推定され、北側側溝の北からは幅 10 m余りの大溝が検出されている。その大溝の北には、多数の建物跡が見られ居住域となっている。道は奥横地集落の入口にあたり、その先には領主屋敷の谷戸型居館を想定される遺構が存在している。この道は、出土遺物から 12 世紀から 16 世紀に使用された、西の段横地集落を結ぶ小路であったと考えられる。以上のように道遺構は、現在の道路の直下や隣接して存続する場合が高く、後世の削平などにより、その全体像を窺うことが中々難しいと考えられる。今回の道 SF01 は、角江遺跡の道の例から、砂利敷きや側溝を伴うなどの共通点に加え、規模や立地条件など、集落内の道ではなく主要な道に相当する道遺構であると推測することができる。

道 SF01 が利用されていた時期の遺物の特徴は、15 世紀後半から 16 世紀の鍋類の多いことがあげられる。この鍋の消費については、ある限定された地域の中で使われたものと考えられ、中世集落跡ではまとまって出土することは、それほど多くないようである。この出土遺物量をもって当遺跡が、大規模な集落とは考えにくいが、道に対して企画性のある溝で居住域を分けているなどの点は一般的な農村と少し異なる状況が見られる。鍋を多く消費する遺跡としては、愛知県馬引横手遺跡（愛知県 1999）が知られる。この遺跡は、日光川の水運に支えられた「市」の機能を持った集落と考えられている。今回調査した周辺にも、多くの人々が集まり飲食をするといった、「市」や「宿」を抱える街道筋の一角であった可能性があることを指摘できるかもしれない。

この調査地周辺には、かつてより中世の引間宿が存在していたとされる。この引間宿の範囲については、太田好治氏の研究[1]によれば、馬込川西岸の船越町に天竜川の渡船湊があったといわれ、この地点を東端とし、北は現在の浜松八幡宮がある八幡町、西は早馬町を経て引間城跡周辺、南は明らかではないが板屋町との境あたりに想定される領域である（太田 2001）。この引間宿は、湯浅治久氏の中世的「宿」の研究[2]によれば、「東大寺領蒲御厨関係の史料から、蒲御厨京上年貢銭の換算の場であり、地域経済圏の中核としての役割を担っていた市（宿）であった」（湯浅 2007）と述べている。そのため、東海道を中心とする陸路と天竜川を利用した水運の要所に位置しており、「宿」と「市」の両方の役割を担った都市的な場であったと考えられている。この「宿」と密接に関係する蒲御厨は、11 世紀に成立した荘園で、当初は伊勢内領であったが、14 世紀末に東大寺領へと変わる。文書等の史料の成果により、蒲御厨が政治経済の重要な拠点であったことは明らかとなっている。15 世紀に引間宿に影響を及ぼすと考えられる蒲御厨では郷の体制が崩れ、多くの村・方・名が自立し、新たな時代へと歩んでいく中で、15 世紀中葉に萬福寺が開基する。神社という組織に守られた「市」や「宿」などの商業地と集落、さらに生産地（田畑）などが想定される。この様な社会経済的基盤を高めた背景には、それを支え庇護した在地やその上の領主層の関与も大きかったと考えられる。鈴木一有氏[3]は、中世集落の変化の中で 12 世紀から 13 世紀の中世前期と、15 世紀後半から 16 世紀を中心とする中世後期の集落の盛期の間に画期があることを指摘している（鈴木 2001）。特に後期の画期については、微高地開発における島畠の積極的な造営による在地領主層の影響が集落形成にも大きく関与しているとされる。引間宿に経済的な影響をもたらした在地領主層の台頭により中世社会構造は複雑化し、神社庇護から武士への支配体制へと変わって行く。その流れは 16 世紀に、今川氏により

政治的緊張感の高まる情勢下で、被官飯尾氏によって永正11年（1514）に引間城が築かれたことにより顕著に現れる。そして、家康の遠江進出により、元亀元年（1570）には完全に現在の浜松城に取り込まれる。これらを期に、引間宿の南を通る東海道が新たに整備され、従来とは異なる近世城下町が形成されていった。そして、17世紀初頭には現在の城下＋宿場町が形成されたと考えられている。16世後半から始まった城下町の改変の中で、17世紀には今回の道SF01は機能を失い、耕作地沿いの一般道としての機能のみをもつに至ったと考えられる。

城下町の成立後の変化は、萬福寺に隣接する井戸SE02から、一端を垣間見ることができる。

井戸SE02は、西地区の北壁際中央において検出された、石組みの井戸である。井戸の構造は、設置される土地や構造物の材料の入手の条件によって大きく影響される。特に台地上では素掘り式井戸が多く、沖積低地では木製の構造物が井戸側に用いられるものや石組み式井戸が見られる。過去の城下町遺跡の調査地点でも、同様なことが確認されている。天竜川流域の沖積低地での井戸の構造は、寺西遺跡（鈴木・太田2000）で曲物を井戸側に使用している他、伝松下屋敷跡（和田2016）では素掘り式の井戸が発見されているなど、石組み式は未確認である。少し離れた場所となるが、浜松市街地の西に位置する角江遺跡（静岡県1996）から発見されている。この遺跡は、砂堆列に営まれた集落で、中世の井戸が20基検出されている。その内の1基が石組み式井戸で、他は素掘り式となっていた。周辺の井戸の構造から、一概に土地の条件による構造の違いを述べることは難しい。しかし、井戸SE02が極めて丁寧な造りの井戸であることは指摘できる。

さらに、今回の発掘調査を進める中で、井戸の保存状態が良好であったにも関わらず、井戸内の底からは近世瀬戸産の擂鉢の破片が1点（270）のみで、埋積土に日常生活に使用された廃棄物が少なかった。寺との関係を現住職に確認を行ったが、戦時中に寺が焼失しているため、古い資料がなく、井戸については分からないとのことであった。近世の浜松城下町絵図等でも確認したが、寺の記載はあるものの、境内の詳細な施設まで描かれたものはなく、井戸を確認することはできなかった。

松屋山萬福寺は寺伝によれば、下池川町の曹洞宗天林寺の末寺として、長禄3年（1460）三世満室長円和尚が開山した。現在では八幡町周辺の檀家によって庇護され、今に至っている。なお、この地域における曹洞宗は、応永18年（1411）に森町の大洞院が建立されてから、遠州地域の教線が急速に発展していった。特に、15世紀に今川氏が遠州で政治的実権を握ると、曹洞宗を介して民衆の支配を強める目的で導入を進めたことが、遠州において曹洞宗寺院が飛躍的に建立されることになった。さらに、中世前期までは、武士や貴族など、特定階層に偏っていた信仰が、中世宗教の改革によって、一般民衆へと普及する中で、曹洞宗は葬送儀礼を積極的に取り込むことで、民衆と密接な関係を保ちつつ教線の拡大が図られた。萬福寺の建立も、その一例であろう。

石塔は、墓石や供養塔に用いられる。遠州地域の石塔は、15世紀を境に、宝篋印塔や五輪塔などが飛躍的に造立され、16世紀に至ると、一石五輪塔が爆発的に導入される。また、石塔の材料である砂岩が、掛川市の日坂石をはじめ森町の雨宮石として周辺にあったことも、民衆に普及していった重要な要因としてあげられる。今回井戸から出土した砂岩製の石塔類は、この時代を反映する遺物と考えられる。

以上のことから、井戸の構造や機能などに加え、井戸の石積に使用された石塔や瓦など寺に関連するものが出土していることと、寺の縁起や出土遺物の年代と矛盾しない。井戸SE02は、引間宿期から近世宿場町期に移った後に、寺の再整備か墓地の整備後などの何かに伴って墓地内に遺棄されていた石塔の残欠と、新たな石材を用いて、丁寧に作られた井戸と考えることができる。これが、萬福寺境内のものなのか、隣接する南側の民家のものであるかは定かではないが、後者の方が可能

性は高い。現在、寺の周辺には、中世を物語る石塔などは見当たらないが、寺伝や縁起の正しさを裏付ける資料になると考えられる。

次に、井戸の利用された中世末から近世初にかけてのこの地域の様相について、過去の城下町遺跡の調査を踏まえて考えてみる。16 世紀後葉から徳川支配が始まり、城下は近世城下町形成へと移行する。その過程は、過去の城下町遺跡調査で出土した、初山窯製品の推移から知ることができる。この窯の成立には、家康が深く関わったと考えられ、天正 18 年（1590）に関東に転封されるまでの間、生産は最盛期を向かえ、17 世紀初頭には終焉する。初山窯の製品が城下町の形成過程の中で、この地域の当時の人々が欲した瀬戸美濃産に値し補完する主要な陶器であったことが出土量からも把握される。当遺跡でも初山窯の製品が出土しており、城下町の形成時の様相を反映している。初山窯の生産が消滅した後の 17 世紀前半になると、瀬戸・美濃産へと製品が入れ替わるが、流通量は少ない状況であった。そんな中で、初期の近世瀬戸美濃産の良品が寺域内や西地区に限定して出土していることは、他の集落域とは異なる特徴を示している。17 世紀前半から 19 世紀代においては、浜松城下町の南地域の南塩町・旅籠町・伝馬町・成子町周辺で、井戸・土坑・小穴などの遺構が検出されており、城下町成立期の繁栄を窺うことができる。この様な城下町周辺での調査成果に対して、八幡町周辺の近世城下町成立期の考古資料は極端に乏しいといえる。

そこで、近世絵図などの史料を踏まえて、八幡町（村）について考えてみたい。17 世紀後半に描かれた「青山家御家中配列図」では、萬福寺の南側、現在の六間道路付近に東西道路がみられる。この道を挟んで、南に武家屋敷や馬場が描かれている（Fig.39）。しかし、八幡町周辺は社寺以外、絵図の用途からか空白域となっている。更に元禄 5 年（1692）「遠州浜松城（極秘諸国城図）」と、18 世紀後半の「諸国当城之図」からは、八幡村の景観を知ることはできない。唯一、嘉永 3 年（1850）の「遠江敷知郡浜松御城下略絵図」によると、浜松八幡宮周辺と萬福寺の西側に屋敷が描かれ「八

Fig.39 「青山家御家中配列図」中の調査地周辺

Fig.40 「遠江敷知郡浜松御城下略絵図」中の調査地周辺

マン村」の記載と、道路を挟んで二つに分かれた集落が確認できる（Fig.40）。しかし、萬福寺の東側は水田を示すため空白となっている。絵図などの史料からは、萬福寺の所在地に変化はないが、集落の中心は萬福寺の西側から南側にかけてあったことが読み取れる。「浜松町村帳」によると、延宝5年（1677）に家数10軒であったのが、『遠淡海地志』の19世紀前半には30戸に増加している。江戸時代後期の段階では、嘉永3年（1850）の絵図と古文書からも、村としての存在が確認できる。今回は、江戸時代の遺物と遺構を検出したことで、八幡村の存在の一部を裏付けることができたものと考えられる。

（3）小 結

第1節の終わりにあたり、今回の調査成果を簡単にまとめる。

1. 竪穴状遺構のSX10やSX08Bの発見で、下層に7世紀後半～8世紀の古代集落が存在していることが確実となってきた。
2. 平行する溝SD01と溝SD03の発見により、中世後期に遡る側溝を伴う道SF01の存在が明らかとなった。
3. 道SF01に取り付く区画溝の存在や、土師質土器鍋類の出土量の多さから、中世の引間宿の一角である可能性を指摘した。

この様に、今回の調査は断片的ながらも、神社や在地領主の庇護の下に中世の「宿」・「市」の両方の役割を担った都市的な空間をもった引間宿隣接地から、近世城下町への再編で一般農村に再び代わっていく過程を窺うことができる、重要な地点での調査成果であったといえる。

2 今後の課題と展望

今回の調査では、浜松城下町遺跡の範囲のうち、これまで発掘調査の機会に恵まれなかった八幡町地内での調査を実施し、古代から近世に至る遺構と遺物を確認することができた。特に中世後期の段階における道路遺構の検出は、特筆すべき成果と言える。発掘調査区の周辺においては、浜松八幡宮を中心に旧来の街路区画の痕跡が残されており、今回の調査で確認された道路遺構は、現在に受け継がれた中世の景観の一端を示すものと評価できる。中心市街地においては、新たな街区の設定により、旧来の街路区画が失われつつあるが、発掘調査の成果が旧来の景観を復元する手掛かりに今後なりうると言える。

また、遺構や遺物の分析から、発掘調査区周辺においては、近世城下町の成立期において極端に資料が減少する傾向が窺えた。過去に調査が実施された旅籠町から成子町に至る東海道沿いにおいては、17世紀前半以降の遺構と遺物が多数検出されており、当該期における繁栄ぶりを示すものと対照的な結果であったと言える。今回の調査対象地一帯は、中世の引間宿の存在が想定されている地域にあたるが、中世の引間宿から近世浜松城下町への転換過程における土地利用のあり様が、今後の発掘調査の進展において、より鮮明になることを期待したい。

浜松城下町遺跡においては、従来中心市街地に立地することから市街地化の過程において遺構の大部分は消失したと考えられてきた。しかしながら、近年の調査成果の蓄積により、近代以降の市街地化による破壊を免れ、城下町の遺構を留めている箇所の存在が明らかになってきた。浜松城下町遺跡全体からみれば、発掘調査により明らかになった情報はまだ僅かであり、今後の発掘調査成果の蓄積と文献や絵図等の関連資料から、多面的に城下町の構造解明に向けた調査が必要になると考えられる。

(註)

1) 太田好治 2001「浜松市域遠州灘沿岸部における地形変化と遺跡の分布」『浜松市博物館報第 14 号』浜松市博物館

2) 湯浅治久 2007「中世的「宿」の研究視角 - その課題と展望 -」『中世の内乱と社会』

3) 鈴木一有 2001「浜松市域における中世集落の消長と地域開発」『浜松市博物館報第 14 号』浜松市博物館

(引用参考文献)

愛知県 2012『愛知県史』別冊　窯業 3　中世・近世　常滑系
菊川町教育委員会 1999『横地城跡　総合調査報告書』
菊川シンポジウム実行委員会 2005『陶磁器からみる静岡県の中世社会』発表要旨・論考編
菊川町教育委員会 2004『横地城下遺跡群』
愛知県埋蔵文化財センター 1999『馬引横手遺跡』
豊橋市教育委員会 2018『境松（Ⅶ）・若宮貝塚（Ⅺ）』
湖西市教育委委員会 1987『長谷元屋敷遺跡』
静岡県埋蔵文化財研究所 1998a『元島遺跡Ⅰ』
宇野隆夫 1982「井戸考」『史林第 65 巻第 5 号』史学研究会
鈴木正貴 2002「中世井戸についての若干の考察」『東海の中世集落を考える』東海考古学フォーラム尾張大会
栗原雅也 2009「初山焼の紹介」『浜松市博物館報第 21 号』
和田達也 2016『浜松における中世城館の調査 ー浜松城跡 11 次（引馬城）・伝松下屋敷 2 次ー』浜松市教育委員会
井口智博ほか 2016『浜松城跡 11』浜松市教育委員会
井口智博 2018「浜松城下町遺跡 1・2・4 次調査報告」『平成 28 年度浜松市文化財調査報告』浜松市教育委員会
和田達也ほか 2017『浜松城下町遺跡』浜松市教育委員会
鈴木京太郎ほか 2020『浜松城下町遺跡 2』浜松市教育委員会
静岡県埋蔵文化財研究所 1996『角江遺跡Ⅱ　遺構編』
山中豊平 1991「陸奥　敷智郡　八幡村」『遠淡海地志』
角川書店 1982「八幡村」『角川日本地名大辞典 22　静岡県』

Tab.6　出土遺物観察表（1）

Fig.	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	器形	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調(外面)	時期	備考
10	1	A	SK01	山茶椀	椀	渥美湖西	60	—	—	8.1	灰白	2a期	
10	2	A	SK01	山茶椀	椀	渥美湖西	50	—	—	7.6	灰白	2b期	モミガラ痕
10	3	A	SK01	陶器	壺	初山	10	—	—	(15.8)	暗赤褐	大窯第4段階	サビ釉
10	4	A	SK01	磁器	小皿	肥前	20	—	—	(8.8)	灰白	1760～1820年	蛇の目凹型高台　丸形
10	5	A	SK01	陶器	中鉢	肥前	10	—	—	(12.2)	にぶい赤褐	1650～1690年	
10	6	A	SK01	陶器	中椀	瀬戸美濃	5	(12.6)	—	—	灰オリーブ	1760～1820年	飴釉椀　平形
10	7	A	SK01	陶器	皿	瀬戸美濃	50	—	—	4.0	灰白	江戸	長石釉
10	8	A	SK01	陶器	擂鉢	瀬戸		—	—	—	にぶい赤褐色	登窯第8・9小期	
10	9	A	SK01	陶器	瓶ヵ	瀬戸美濃	50	—	—	7.4	暗赤褐	江戸末	鉄釉＋サビ釉
10	10	A	SK01	土師質土器	皿		25	7.8	2.4	4.6	にぶい橙		かわらけ（ロクロ）
10	11	A	SK01	土師質土器	皿		40	7.8	1.8	5.0	浅黄橙		かわらけ（手づくね）
10	12	A	SK01	土師質土器	皿		5	(10.6)	—	—	浅黄橙		かわらけ（手づくね）
10	13	A	SK01	瓦	丸瓦			—	—	厚 1.8	暗灰	16世紀後半	コビキA
10	14	A	SK01	陶器	硯石ヵ			長 6.3	幅 4.7	厚 0.7	浅黄橙		硯石に転用
11	15	B	SP03	磁器	青磁碗	中国	12	(14.2)	—	—	オリーブ灰	B2類	蓮弁文
11	16	B	SP05	土師質土器	皿		25	(10.0)	1.9	(5.2)	橙		かわらけ（手づくね）
11	17	B	SP12	陶器	緑釉小皿	志戸呂	10	(10.0)	—	—	暗褐色	後期IV期古	
11	18	B	SP	土師質土器	羽釜		10	(20.6)	—	—	浅黄橙	14世紀	南堀由
12	19	A	SX01	須恵器	壺	湖西	10	—	—	—	灰白	7世紀	
12	20	A	SX01	山茶椀	椀	渥美湖西	50	—	—	6.4	灰白	2a・2b期	モミガラ痕
12	21	A	SX01	山茶椀	椀	渥美湖西	100	—	—	7.4	灰白	2b期	モミガラ痕　墨書「円」
12	22	A	SX01	山茶椀	椀	渥美湖西	50	—	—	7.4	灰白	3a期新	モミガラ痕
12	23	A	SX01	土師質土器	皿		17	(11.4)	2.1	(6.8)	灰白	中世後期	かわらけ（手づくね）
12	24	A	SX02	山茶椀	小椀	渥美湖西	33	—	—	(6.2)	灰白	2b期	
12	25	A	SX02	山茶椀	椀	渥美湖西	12	—	—	(8.4)	灰白	2b～3a期	
13	26	A	SX03	須恵器	有台坏身	湖西	12	—	—	(10.8)	灰	8世紀前半	
13	27	A	SX03	陶器	片口鉢Ⅰ類	渥美湖西	10	—	—	—	灰白	2b期	
13	28	A	SX03	陶器	擂鉢	志戸呂	25	—	—	(9.0)	赤褐	後期IV期	
13	29	A	SX03	土師質土器	内耳鍋		12	(26.0)	—	—	浅黄橙	A類	

Tab.6　出土遺物観察表（2）

Fig	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	部位	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調(外面)	時期	備考
13	30	A	SX03	土師質土器	内耳鍋		12	(22.4)	—	—	浅黄橙	A類	
14	31	A	SX04	須恵器	坏身	湖西	100	—	—	—	青灰	7世紀後半	
14	32	A	SX04	陶器	擂鉢	初山	20	—	—	(21.4)	暗赤褐	大窯第4段階	
14	33	A	SX04	磁器	広東椀	肥前	40	—	—	(7.0)	明青灰	1780～1810年	
14	34	A	SX04	磁器	中鉢	肥前	40	—	—	(4.6)	明青灰	1780～1810年	焼継ぎ痕　関西系
14	35	A	SX04	磁器	小鉢	肥前	40	(8.0)	—	—	明青灰	1760～1810年	腰張形
14	36	A	SX04	磁器	小鉢	関西系	20	(8.0)	—	—	明青灰	江戸	腰張形　呉須
14	37	A	SX04	磁器	中鉢	瀬戸	10	(12.0)	—	—	明青灰	1800～1860年	端反形
14	38	A	SX04	磁器	湯呑	瀬戸	30	(8.0)	—	—	明青灰	登窯第10・11小期	
14	39	A	SX04	磁器	小坏	瀬戸美濃	10	(8.0)	—	—	明青灰	登窯第10・11小期	呉須
14	40	A	SX04	陶器	染付皿	瀬戸	90	—	—	(6.4)	灰白	登窯第10小期	小皿　太白手
14	41	A	SX04	陶器	小鉢	志戸呂	40	(6.7)	4.6	(4.0)	暗赤褐	江戸	
14	42	A	SX04	陶器	中皿	堺南	50	—	—	13.4	暗赤褐	江戸	底部「〇」の刻印、窯印
14	43	A	SX04	陶器	壺か瓶	美濃	30	—	—	(7.0)	浅黄橙	登窯第7・8小期	
14	44	A	SX04	陶器	土瓶	信楽	20	—	—	(8.0)	灰白	1840～	長石釉
14	45	A	SX04	陶器	中瓶	美濃	20	—	—	(8.0)	赤褐	1780～1820年	徳利ベこかん形
14	46	A	SX04	陶器	行平	美濃	70	19.4	13.7	8.8	灰白	登窯第11小期	把手7cm、Φ1.6cm 口Φ1.6cm
14	47	A	SX04	陶器	香炉	瀬戸美濃	90	5.4	2.4	2.6	灰白	登窯第11小期	
15	48	A	SX05	磁器	小皿	瀬戸	80	14.2	4.2	9.0	明青灰	1800～1860年	蛇ノ目凹型高台
15	49	A	SX05	磁器	小皿	肥前	20	—	—	(6.2)	明青灰	江戸	
15	50	A	SX05	土師質土器	焙烙		10	(30.0)	1.9	—	赤	16世紀後半	
15	51	B	SX06	山茶椀	椀	渥美湖西	50	—	—	7.3	灰	3a・3b期	砂粒痕
15	52	B	SX06	土師質土器	皿		100	—	—	5.7	灰白	15世紀後半	かわらけ（ロクロ）
15	53	B	SX06	土師質土器	皿		33	—	—	(7.2)	灰白		かわらけ（ロクロ）
15	54	B	SX06	土師質土器	内耳鍋		12	(24.4)	—	—	浅黄橙	A類	
16	55	A	SD01	土師器	甕		20	(19.2)	—	—	にぶい橙	8世紀後半	
16	56	A	SD01	土師器	甕		12	(22.2)	—	—	橙	7世紀	
16	57	A	SD01	山茶椀	中椀	渥美湖西	50	—	—	6.0	灰白	1a期	
16	58	A	SD01	山茶椀	小椀	渥美湖西	50	—	—	4.0	灰白	1b期	スス付着

Tab.6　出土遺物観察表（3）

Fig	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	器形	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調(外面)	時　期	備　考
16	59	A	SD01	山茶椀	椀	渥美湖西	100	—	—	8.0	灰白	2a期	モミガラ痕
16	60	A	SD01	山茶椀	椀	渥美湖西	100	—	—	6.2	灰白	2b期	モミガラ痕
16	61	A	SD01	山茶椀	椀	渥美湖西	50	—	—	7.8	灰白	2b期	モミガラ痕
16	62	A	SD01	山茶椀	椀	渥美湖西	33	16.4	5.5	7.8	灰白	3a期	モミガラ痕
16	63	A	SD01	山茶椀	椀	渥美湖西	25	(16.8)	5.1	7.6	灰白	3a期	墨書
16	64	A	SD01	山茶椀	椀	渥美湖西	100	—	—	8.0	灰白	3a期	墨書　モミガラ痕
16	65	A	SD01	陶器	甕	渥美湖西	10	—	—	(18.0)	明青灰	2b期	
16	66	A	SD02	山茶椀	椀	渥美湖西	33	—	—	(8.2)	灰白	1a～2a期	モミガラ痕
16	67	A	SD02	山茶椀	椀	渥美湖西	33	—	—	(8.2)	灰白	2a期	モミガラ痕
16	68	A	SD02	磁器	青磁椀	中国	10	—	—	—	黄褐	A4類	龍泉窯系
17	69	B	SD03	須恵器	広口長頸壺	湖西		—	—	—	灰白	8世紀前半	
17	70	B	SD03	山茶椀	小皿	渥美湖西	12	(10.0)	2.1	(6.2)	灰白	3b・3c期	
17	71	A	SD03	磁器	白磁椀	中国	10	(10.0)	—	—	灰白	15世紀	
17	72	B	SD03	磁器	白磁皿	中国	4	—	—	(9.2)	灰白	15世紀	型押し
17	73	A	SD03	土師質土器	皿		12	(11.0)	3.0	(5.2)	明褐灰		かわらけ（ロクロ）
17	74	B	SD03	土師質土器	皿		12	—	(5.8)	—	赤橙		かわらけ（ロクロ）
17	75	B	SD03	土師質土器	内耳鍋		12	(21.2)	—	—	浅黄橙	A類	
17	76	B	SD03	土師質土器	内耳鍋		12	(22.0)	—	—	浅黄橙	A類	
17	77	B	SD03	土師質土器	内耳鍋		25	(21.6)	—	—	浅黄橙	A類	
17	78	B	SD03	陶器	緑釉小皿	古瀬戸	67	—	2.9	—	灰白	後期Ⅱ・Ⅲ期	灰釉
17	79	B	SD03	陶器	緑釉小皿	志戸呂	12	(9.8)	2.6	(4.6)	赤褐	後期Ⅳ期古	
17	80	B	SD03	陶器	卸目付大皿	古瀬戸	2	—	—	—	灰白	後期Ⅳ期古	
17	81	B	SD03	陶器	卸皿	古瀬戸	25	—	(5.2)	—	灰白	後期	
17	82	B	SD03	陶器	擂鉢	瀬戸	2.5	(9.4)	—	—	浅黄橙	17世紀	サビ釉
17	83	B	SD03	陶器	擂鉢	古瀬戸	10	(33.4)	—	—	浅黄橙	後期Ⅳ期古	サビ釉
17	84	B	SD03	陶器	擂鉢	志戸呂	10	—	—	(18.0)	浅黄橙	大窯第4段階	
17	85	B	SD03	陶器	擂鉢	志戸呂	10	(32.6)	—	—	赤橙	大窯第4段階	
17	86	B	SD03	陶器	天目茶椀	瀬戸	12	(11.4)	—	—	灰白	登窯第4小期	鉄釉
17	87	B	SD03	陶器	天目茶椀	瀬戸	67	—	5.2	—	灰白	登窯第4小期	鉄釉

Tab.6　出土遺物観察表（4）

Fig.	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	部形	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調(外面)	時期	備考
17	88	B	SD03	金属製品	煙管火皿			—	—	—		江戸	真鍮製　重量(1g)
18	89	A	SD04	土師質土器	内耳鍋		25	(20.0)	—	—	浅黄橙	A類	
12	90	A	SD05	土師器	甕		10	(24.0)	—	—	にぶい橙	7世紀末～8世紀前半	
12	91	A	SD05	山茶碗	碗	渥美湖西	12	—	—	(9.4)	灰白	2b期古	モミガラ痕
12	92	A	SD05	山茶碗	碗	渥美湖西	40	—	—	—	灰	2b期	
12	93	A	SD05	陶器	甕	渥美湖西	10	—	—	—	灰白	2b期	
12	94	A	SD05	山茶碗	小皿	渥美湖西	10	(10.0)	—	—	灰白	3b期	
12	95	A	SD05	山茶碗	小碗	渥美湖西	33	—	—	(4.0)	灰白	1a期	
12	96	A	SD05	陶器	平碗	古瀬戸	25	—	—	(5.6)	灰白	後期IV期古	灰釉
12	97	A	SD05	陶器	瓶子	古瀬戸	10	(5.0)	—	—	灰白	後期III・IV期	灰釉
12	98	A	SD05	土師質土器	内耳鍋		25	(24.2)	—	—	浅黄橙	A類	
12	99	A	SD05	石製品	砥石			長 7.3	幅 6.7	厚 2.0	灰白		重量(144.4g)
12	100	A	SD05	土製品	輪羽口			—	—	—			重量(72g)
12	101	A	SD06	須恵器	坏蓋	湖西	10	(17.6)	—	—	灰白	8世紀後半	
12	102	A	SD06	須恵器	長頸壺	湖西	60	頸部 4.2	—	—	青灰	7世紀後半～8世紀前半	
12	103	A	SD06	山茶碗	碗	渥美湖西	66	—	—	7.4	灰白	2a期	
12	104	A	SD06	山茶碗	碗	渥美湖西	12	(16.0)	—	—	灰白	3a期	
12	105	A	SD06	山茶碗	碗	渥美湖西	12	(15.6)	—	—	灰白	3a期	
12	106	A	SD06	山茶碗	碗	渥美湖西	100	—	—	6.6	灰白	3a期	
12	107	A	SD06	山茶碗	碗	渥美湖西	100	—	—	6.6	灰白	3a期	モミガラ痕
12	108	A	SD06	山茶碗	碗	渥美湖西	20	—	—	(9.2)	灰白	3a期	モミガラ痕
12	109	A	SD06	山茶碗	小皿	渥美湖西	75	—	—	4.4	灰白	3a期	
19	110	B	SD08	山茶碗	碗	渥美湖西	12	—	—	(8.6)	灰白	2b期	
19	111	B	SD08	山茶碗	碗	渥美湖西	25	—	—	(7.2)	灰白	3b期	
19	112	B	SD08	磁器	青磁碗	中国	100	—	—	5.5	オリーブ灰	B3類	龍泉窯系
19	113	B	SD08	土師質土器	皿		12	(13.0)	2.9	7.2	明褐灰		かわらけ（ロクロ） 075-3接合
19	114	B	SD08	土師質土器	皿		20	10.8	1.2	8.6	浅黄橙		かわらけ（手づくね）
19	115	B	SD08	土師質土器	皿		60	10.4	1.9	7.4	浅黄橙		かわらけ（手づくね） 075-1接合
19	116	B	SD08	土師質土器	皿		98	10.4	1.9	7.1	橙		かわらけ（手づくね）

Tab.6　出土遺物観察表（5）

Fig	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	器形	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調(外面)	時期	備考
19	117	B	SD08	土師質土器	香炉		80	—	—	5.0	橙		かわらけ（ロクロ）3方向脱足
19	118	B	SD08	土師質土器	内耳鍋		12	(19.8)	—	—	浅黄橙	A類	
19	119	B	SD08	土師質土器	内耳鍋		10	(21.8)	—	—	淡橙	A類	土層帯
19	120	B	SD08	土師質土器	内耳鍋		12	(23.8)	—	—	淡橙	A類	
19	121	B	SD08	土師質土器	内耳鍋		12	(23.2)	—	—	浅黄橙	A類	
19	122	B	SD08	石製品	砥石			長 4.4	幅 3.5	厚 1.7	灰白		重量(43.2g)　被熱
20	123	B	SD09	土師質土器	内耳鍋		25	(27.4)	—	—	浅黄橙	A類	
20	124	B	SD09	土師質土器	内耳鍋		12	(25.4)	—	—	浅黄橙	A類	
13	125	A	SD14	土師質土器	内耳鍋		10	(23.8)	—	—	浅黄橙	A類	
21	126	A	遺構外	須恵器	箱坏	湖西	17	(11.2)	—	(7.6)	灰	8世紀後半	南壁土層帯
21	127	B	遺構外	須恵器	有台坏身	湖西	25	—	—	(8.6)	明青灰	8世紀前半	
21	128	A	遺構外	須恵器	長頸壺	湖西	25	—	—	(8.8)	灰	7世紀末～8世紀前半	
21	129	A	遺構外	山茶碗	碗	渥美湖西	33	(14.6)	—	—	灰白	3a期	
21	130	A	遺構外	山茶碗	碗	渥美湖西	100	—	—	5.8	灰白	2a期	漬け掛け
21	131	A	遺構外	山茶碗	碗	渥美湖西	100	—	—	7.2	灰白	2b期	
21	132	A	遺構外	山茶碗	碗	渥美湖西	50	—	—	7.5	灰	3a期	モミガラ痕
21	133	A	遺構外	陶器	壺	渥美湖西	12	—	—	(10.0)	明青灰	2b期古	
21	134	A	遺構外	陶器	壺	渥美湖西		—	—	—	灰白	2b期	刻文
21	135	A	遺構外	陶器	片口鉢Ⅰ類	渥美湖西	10	(24.0)	—	—	灰	2b～3期新	
21	136	A	遺構外	陶器	片口鉢Ⅰ類	渥美湖西	25	—	—	—	灰	2a期	
21	137	A	遺構外	陶器	片口鉢Ⅰ類	渥美湖西	33	—	—	—	灰	2b期	
21	138	A	遺構外	陶器	平碗	古瀬戸	67	—	—	5.0	灰白	後期Ⅲ期	
21	139	A	遺構外	陶器	擂鉢	古瀬戸	10	(29.2)	—	—	灰	後期Ⅳ期古	
21	140	A	遺構外	陶器	耳付水注	古瀬戸	100	—	—	4.9	灰白	後期Ⅳ期	鉄釉
21	141	A	遺構外	陶器	壺	志戸呂	33	—	—	(10.4)	灰白	後期Ⅳ期	鉄釉
21	142	A	遺構外	土師質土器	皿		100	—	—	4.8	にぶい橙	16世紀	南壁土層帯 かわらけ（ロクロ）
21	143	A	遺構外	土師質土器	羽釜		10	(21.6)	—	—	灰白	15世紀前半	
21	144	A	遺構外	鉄滓	鉄滓			—	—	—			重量158g　土層帯
21	145	A	攪乱抗	陶器	小瓶	美濃	50	—	—	5.8	浅黄橙	登窯第7小期	

Tab.6　出土遺物観察表（6）

Fig	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	器形	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調（外面）	時期	備考
24	146	D1	SK05	土師器	甕		30	—	厚2.5	(9.4)	淡橙	7世紀後半	肥手 4.2cm
25	147	C	SP16	土師質土器	皿		10	(8.6)	—	—	灰白		かわらけ（手づくね）
28	148	C	SX07	陶器	擂鉢	古瀬戸	20	—	—	(10.6)	にぶい赤	後期IV期古	サビ釉
24	149	D1	SX08	須恵器	有台坏身	湖西	20	—	—	(10.1)	灰白	8世紀前半	
24	150	D1	SX08	山茶碗	碗	湊美湖西	10	(14.0)	—	—	灰白	2b～3a期	
24	151	D1	SX08	山茶碗	碗	湊美湖西	20	—	—	(6.3)	灰黄	1a期	
24	152	D1	SX08	磁器	青磁碗	中国	50	—	—	5.0	暗オリーブ灰	D1類	内面印花文
24	153	D1	SX08	陶器	擂鉢	古瀬戸	4	(33.0)	—	—	赤褐	後期IV期古	
26	154	D1	SX09	陶器	壺	湊美湖西	20	—	—	(8.6)	灰	2a期	孔φ0.3cm　モミガラ痕
26	155	D1	SX09	陶器	平碗	古瀬戸	10	(16.0)	6.1	5.4	灰	後期III期	灰釉
26	156	D1	SX09	陶器	平碗	古瀬戸	10	(16.0)	—	—	にぶい黄橙	後期III期	灰釉
26	157	D1	SX09	土師質土器	羽釜		3	(21.8)	—	—	明褐灰	15世紀前半	
26	158	D1	SX09	土師質土器	羽釜		4	(24.0)	—	—	淡橙	15世紀前半	
26	159	D1	SX09	土師質土器	内耳鍋		20	(20.8)	—	—	浅黄橙	A類	
26	160	D1	SX09	土師質土器	内耳鍋		20	(24.4)	—	—	浅黄橙	A類	
26	161	D1	SX09	土師質土器	内耳鍋		8	(21.5)	—	—	灰白	A類	
26	162	D1	SX09	土師質土器	内耳鍋		20	(16.4)	—	—	淡橙	A類	
26	163	D1	SX09	土師質土器	茶釜			—	—	—	淡橙	16世紀後半	
26	164	D1	SX09	土師質土器	茶釜			—	—	—	淡橙	16世紀後半	
27	165	D1	SX10	須恵器	坏身	湖西	60	10.0	4.1	3.3	明青灰	7世紀後半	ヘラ記号×
27	166	D1	SX10	須恵器	壺	湖西	60	頸部 15.0	体部 26.0	—	青灰	7世紀後半	
27	167	D1	SX10	土師器	甕		50	20.0	28.0	6.6	浅黄橙	7世紀後半	
28	168	C	SD10	陶器	擂鉢	志戸呂	10	(26.0)	—	—	浅黄橙	後期IV期新	
28	169	C	SD10	磁器	中碗	肥前	50	—	—	4.4	赤灰	1690～1740年	蛇目　丸形
28	170	C	SD10	磁器	広東碗	肥前	20	(11.4)	5.5	(7.0)	明青灰	1780～1830年	
28	171	C	SD10	磁器	小碗	肥前	20	(9.0)	—	—	明青灰	1740～1770年	丸形
28	172	C	SD10	磁器	湯呑	瀬戸	100	—	—	3.8	明青灰	登窯第10・11小期	
28	173	C	SD10	陶器	中瓶	瀬戸	10	—	—	—	淡黄	登窯第8・9小期	鉄利
28	174	C	SD10	陶器	中瓶	瀬戸	90	4.2	—	—	灰白	登窯第8～11小期	首黒鉄利

Tab.6　出土遺物観察表（7）

Fig	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	部形	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調(外面)	時　期	備　考
28	175	C	SD10	陶器	土瓶の蓋	不明	80	5.1	1.8	4.4	にぶい黄橙	19世紀後半	
28	176	C	SD10	陶器	行平鍋	瀬戸美濃	30	—	—	(8.4)	灰白	19世紀	
28	177	C	SD10	陶器	急須	瀬戸	80	4.7	2.6	2.3	灰白	登窯第11小期	
28	178	C	SD10	土師質土器	皿		20	(10.0)	2.5	(5.0)	淡黄橙	近世	かわらけ（ロクロ）
29	179	C	SD11	山茶碗	碗	渥美湖西	20	—	—	(8.0)	灰白	1b期	
29	180	C	SD11	山茶碗	碗	渥美湖西	20	—	—	(6.0)	灰白	2a期	
29	181	C	SD11	山茶碗	碗	渥美湖西	80	—	—	7.5	灰白	3a・3b期	モミガラ痕
29	182	C	SD11	山茶碗	碗	渥美湖西	50	—	—	7.0	灰白	3a期	モミガラ痕
29	183	C	SD11	山茶碗	碗	渥美湖西	90	—	—	7.4	灰白	3a期	モミガラ痕　石敷内
29	184	C	SD11	陶器	片口鉢 I 類	渥美湖西	20	—	—	(18.6)	灰	2b期	石敷内
29	185	C	SD11	陶器	壺	渥美湖西	10	—	—	(15.4)	暗灰	2b期古	
29	186	C	SD11	陶器	甕	渥美湖西	10	胴部 39.0	—	—	灰	2b期	
29	187	C	SD11	磁器	青磁輪花皿	中国	20	(12.4)	—	—	明緑灰	15世紀中葉～後半	
29	188	C	SD11	陶器	天目茶碗	古瀬戸	90	—	—	4.4	浅黄橙	後期III期	鉄釉　石敷内
29	189	C	SD11	陶器	擂鉢	初山	20	—	—	(12.5)	赤	大窯第4段階	石敷内
29	190	C	SD11	磁器	白磁中碗	肥前	10	(12.0)	—	—	明オリーブ灰	1690～1800年	丸形　白磁　石敷内
29	191	C	SD11	陶器	小中	瀬戸	20	(10.0)	—	—	灰白	登窯第8小期	丸形　丈白手
29	192	C	SD11	陶器	鉢	瀬戸	10	—	—	(9.0)	灰白	登窯第11小期	長石釉　石敷内
29	193	C	SD11	土師質土器	皿		10	(9.0)	—	—	浅橙		かわらけ（手づくね）
29	194	C	SD12	山茶碗	碗	渥美湖西	20	—	—	(8.8)	灰白	2a期	石敷内
29	195	C	SD12	山茶碗	碗	渥美湖西	30	—	—	(7.1)	灰白	3a期	石敷内
29	196	C	SD12	陶器	天目茶碗	古瀬戸	100	—	—	4.1	灰白	後期II期	
28	197	C	SD13	陶器	天目茶碗	古瀬戸	80	—	—	4.3	灰白	後期IV期古	鉄釉
28	198	C	SD13	陶器	小碗	美濃	20	7.3	4.1	3.6	淡黄	登窯第7小期	灰釉
28	199	C	SD13	磁器	中碗	瀬戸	90	9.8	4.9	4.1	灰白	1730～1820年	腰折形
28	200	C	SD13	磁器	小皿	美濃	70	12.2	2.8	5.0	灰白	1710年～	灯明皿
31	201	D2	SD15北側	須恵器	皿	湖西	20	—	—	(10.0)	灰	8世紀後半	
31	202	D2	SD15北側	須恵器	甕	湖西	15	(13.3)	—	—	灰白	8世紀後半	
31	203	D2	SD15北側	土師器	甕		15	(20.4)	—	—	にぶい橙	8世紀後半	

Tab.6　出土遺物観察表（8）

Fig.	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	器形	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調(外面)	時　期	備　考
31	204	D2	SD15 北側	山茶椀	椀	渥美湖西	100	—	—	7.1	灰白	2b期	加工円盤
31	205	D2	SD15 南側	山茶椀	椀	渥美湖西	50	—	—	7.0	灰白	3b期	砂粒痕　モミガラ痕
31	206	D2	SD15 南側	山茶椀	椀	渥美湖西	40	—	—	(8.1)	灰白	3b期	
31	207	D2	SD15 北側	陶器	擂鉢	初山	5	—	—	(11.4)	にぶい赤	大窯第4段階	
31	208	D2	SD15 南側	磁器	皿	肥前	40	—	—	(6.0)	明青灰	1680～1740年	
31	209	D2	SD15 北側	土師質土器	内耳鍋		10	(18.4)	—	—	淡橙	A類	
31	210	D2	SD16	山茶椀	椀	渥美湖西	10	—	—	(8.0)	灰白	3b期	
31	211	D2	SD16	山茶椀	椀	渥美湖西	10	—	—	(8.0)	灰白	3a期	
31	212	D2	SD16	陶器	擂鉢	瀬戸		—	—	—	浅黄橙	江戸	
31	213	D2	SD17	山茶椀	椀	渥美湖西	80	—	—	8.3	灰	3b期	砂粒痕
31	214	D2	SD17	陶器	擂鉢	瀬戸	10	(28.0)	—	—	青黒	登窯第10小期	
31	215	D2	SD17	陶器	人子	古瀬戸	60	—	—	2.2	灰白	前期Ⅳ～中期Ⅱ期	
31	216	D2	SD17	磁器	青磁盤	中国		—	—	—	オリーブ灰	13世紀後半～14世紀前半	龍泉窯系
31	217	D2	SD17	鉄滓	鉄滓			長 3.7	幅 4.0	厚 3.1			重量59.7 g
31	218	C	SD18	山茶椀	小椀	渥美湖西	80	—	—	5.4	灰白	1a・1b期	
31	219	C	SD18	陶器	甕	常滑	10	—	—	(16.8)	にぶい赤	15世紀～16世紀	
31	220	C	SD18	陶器	擂鉢	古瀬戸	10	(23.9)	—	—	にぶい橙	後期Ⅳ期古	
32	221	D2	SD19	山茶椀	椀	渥美湖西	80	—	—	7.2	灰白	2a期	
31	222	D2	SD 15～18	土師器	甕		10	(24.0)	—	—	橙	8世紀後半	
31	223	D2	SD 15～18	山茶椀	椀	渥美湖西	20	—	—	(10.1)	灰白	1b期	有色高台　モミガラ痕
31	224	D2	SD 15～18	山茶椀	椀	渥美湖西	70	—	—	6.8	灰白	2a期	モミガラ痕
31	225	D2	SD 15～18	山茶椀	椀	渥美湖西	20	—	—	(6.6)	灰白	2a期	
31	226	D2	SD 15～18	山茶椀	椀	渥美湖西	10	—	—	(7.4)	灰白	2a期	
31	227	C	SD 15～18	山茶椀	椀	渥美湖西	70	—	—	6.6	灰	3b期	砂粒痕
31	228	D2	SD 15～18	山茶椀	小皿	渥美湖西	20	(4.2)	1.6	(4.2)	灰白	3b期	
31	229	D2	SD 15～18	山茶椀	小皿	渥美湖西	100	—	—	5.2	灰白	2b期新	
31	230	D2	SD 15～18	陶器	甕	渥美湖西	10	—	—	(12.9)	暗灰	1a・1b期	
31	231	D2	SD 15～18	陶器	甕	渥美湖西	2	(52.0)	—	—	灰	2b期	
31	232	C	SD 15～18	陶器	擂鉢	古瀬戸	10	(24.0)	—	—	赤褐	後期Ⅳ期	サビ釉

Tab.6　出土遺物観察表（9）

Fig	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	部形	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調(外面)	時　期	備　考
31	233	D2	SD 15～18	碗	中碗	肥前	30	(9.6)	7.6	(4.5)	明青灰	1630～1650年	丸形　初期伊万里様式
31	234	D2	SD 15～18	土師質土器	皿		30	(11.0)	2.2	(8.2)	橙	近世	かわらけ（ロクロ）
31	235	D2	SD 15～18	土師質土器	灯明皿		30	(11.4)	3.0	(8.6)	橙	近世	かわらけ（ロクロ）
31	236	C	SD 15～18	土師質土器	内耳鍋		10	(20.0)	—	—	浅黄橙	A類	
31	237	D2	SD 15～18	土師質土器	内耳鍋		5	(26.0)	—	—	浅黄橙	B類	直立型
31	238	D2	SD 15～18	瓦	丸瓦			—	厚 2.1	—	灰	16世紀後半	コビキB
32	239	D1	SD20	須恵器	甕	湖西		—	—	—	青灰	7世紀後半～8世紀	列点文
32	240	D2	SD20	土師質土器	皿		10	(11.0)	—	—	灰白	16世紀	かわらけ（手づくね）
32	241	D1	SD20	土師質土器	内耳鍋		8	(22.0)	—	—	浅黄橙	A類	
32	242	D2	SD22	山茶碗	碗	渥美湖西	40	—	—	(8.2)	灰白	3a期	
32	243	D2	SD22	土師質土器	皿		20	(10.4)	2.4	(6.0)	灰白	16世紀	かわらけ（ロクロ）
32	244	D2	SD22	土師質土器	皿		40	(10.6)	2.1	(7.0)	淡橙	16世紀	かわらけ（ロクロ）
32	245	D2	SD22	土師質土器	内耳鍋		6	(23.4)	—	—	灰白	B類	直立型
32	246	D2	SD23	須恵器	瑞坏	湖西	20	—	—	(9.0)	灰白	8世紀後半	
32	247	D2	SD23	山茶碗	碗	渥美湖西	20	—	—	(6.6)	灰白	2b期	
32	248	D1	SD23	緑釉	青磁碗	中国	10	—	—	(6.2)	明オリーブ	12世紀後半～13世紀前葉	劃花文
32	249	D1	SD23	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	10	(26.9)	—	—	紫黒	大窯第3段階前半	
32	250	D1	SD23	陶器	輪花皿	瀬戸美濃	20	—	—	(6.6)	灰白	登窯第3・4小期	櫛描ざ　内見込印
24	251	D1	SD27	陶器	菊皿	美濃	50	14.0	3.5	8.6	灰白	登窯第2小期	銅彫井
33	252	D1	SD28	須恵器	坏身	湖西	30	(10.6)	(12.8)	—	暗灰	7世紀後半	最大径(12.8cm)
33	253	D1	SD28	須恵器	有台坏身	湖西	25	—	(9.0)	—	灰	8世紀前半	
33	254	D1	SD28	須恵器	盤	湖西	10	(23.0)	—	—	暗青灰	8世紀後半	
33	255	D1	SD28	土師器	碗		50	18.4	(5.9)	—	橙	7世紀後半	
33	256	D1	SD28	土師器	甕		7	(27.2)	—	—	にぶい橙	7世紀末～8世紀前半	
33	257	D1	SD28	土師器	甕		7	(27.0)	—	—	にぶい赤褐	8世紀後半	
33	258	D1	SD29	陶器	小型壺	渥美湖西	25	—	(8.0)	—	暗青灰	2b期	
33	259	D1	SD29	陶器	擂鉢	古瀬戸	10	(30.0)	—	—	にぶい赤	後期Ⅳ期古	
33	260	D1	SD29	土師質土器	皿		80	—	7.4	—	にぶい橙		かわらけ（ロクロ）
33	261	D1	SD29	土師質土器	内耳鍋		50	23.6	—	—	淡橙	A類	

Tab.6　出土遺物観察表（10）

Fig	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	部形	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調(外面)	時　期	備　考
33	262	D1	SD29	土師質土器	内耳鍋		20	(25.2)	—	—	にぶい黄橙	A類	
33	263	D1	SD29	土師質土器	内耳鍋		33	(23.2)	—	—	暗灰	A類	
33	264	D1	SD29	土師質土器	内耳鍋		25	(23.4)	—	—	浅黄橙	A類	
33	265	D1	SD29	土師質土器	羽釜し 釜		20	(13.0)	—	—	浅黄橙	16世紀後半	
33	266	D1	SD30	山茶碗	碗	渥美湖西	10	—	—	(7.0)	灰	3a期	
34	267	D1	SE02	陶器	丸皿	瀬戸美濃	10	(10.4)	—	—	灰白	大窯第3段階前半	
34	268	D1	SE02	陶器	折縁深皿	古瀬戸	8	(36.4)	—	—	灰白	後期Ⅱ期	
34	269	D1	SE02	陶器	擂鉢	古瀬戸	10	—	—	(10.0)	紫黒	大窯段階	
34	270	D1	SE02	陶器	擂鉢	瀬戸		—	—	—	紫黒	江戸前期	
34	271	D1	SE02	土師質土器	内耳鍋		3	(22.0)	—	—	灰白	A類	
34	272	D1	SE02	瓦	丸瓦			—	厚 2.7	—	青黒	16世紀後半	コビキA
34	273	D1	SE02	石製品	砥石			長 6.4	幅 3.7	厚 3.3	灰白		重量(114.4g)
34	274	D1	SE02	石製品	砥石			長 12.7	幅 7.8	厚 7.5	灰黄褐		重量(1066.0g)
34	275	D1	SE02	石造品	宝篋印塔			長 21.2	幅 10.2	厚 10.2	灰白		重量(1.4kg)
34	276	D1	SE02	石造品	一石五輪塔			長 20.1	幅 8.3	厚 7.0	灰白		重量(1.8kg)
35	277	D1	遺構外	須恵器	坏蓋	湖西	10	(14.0)	—	—	灰白	8世紀後半	
35	278	D1	遺構外	須恵器	坏身	湖西	20	(7.3)	—	—	青灰	7世紀中葉	最大径(9.2cm)
35	279	D1	遺構外	須恵器	高坏	湖西	50	11.0	3.6	8.8	青灰	8世紀後半	
35	280	D1	遺構外	須恵器	高坏	湖西	20	(12.4)	—	—	灰白	8世紀後半	
35	281	D1	遺構外	須恵器	盤	湖西	100	脚部 4.6	—	—	青灰	7世紀末	
35	282	D1	遺構外	須恵器	長頸壺	湖西	20	—	—	(8.2)	青灰	7世紀末	
35	283	D2	遺構外	須恵器	甕	湖西	5	(31.4)	—	—	灰白	7世紀後半	
35	284	D1	遺構外	土師器	碗		40	(12.7)	—	—	灰白	7世紀後半	
35	285	D1	遺構外	土師器	皿		3	(17.0)	—	—	赤	8世紀後半	
35	286	D1	遺構外	土師器	鉢		10	(16.2)	—	—	橙	8世紀前半	
35	287	D2	遺構外	土師器	甕		4	(28.0)	—	—	橙	7世紀末～8世紀前半	
35	288	D2	遺構外	土師器	甕		9	(26.6)	—	—	橙	7世紀末～8世紀前半	
35	289	D1	遺構外	土師器	甕		10	(24.8)	—	—	橙	8世紀前半	
35	290	D2	遺構外	土師器	甕		80	20.0	—	—	にぶい橙	8世紀後半	

Tab.6　出土遺物観察表（11）

Fig	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	部形	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調(外面)	時　期	備　考
35	291	D1	遺構外	山茶碗	碗	渥美湖西	10	(16.0)	—	—	灰	1a期	
35	292	D2	遺構外	山茶碗	碗	渥美湖西	10	(15.0)	—	—	灰白	2a期	
35	293	C	遺構外	山茶碗	碗	渥美湖西	70	16.4	5.4	8.6	灰白	2b期古	砂粒痕
35	294	D1	遺構外	山茶碗	碗	渥美湖西	40	—	—	(7.7)	灰白	2a期	
35	295	D1	遺構外	山茶碗	碗	渥美湖西	30	—	—	(7.4)	灰	3a期	モミガラ痕
35	296	C	遺構外	山茶碗	碗	渥美湖西	40	—	—	(7.6)	灰白	3b期	スス付着
35	297	D1	遺構外	山茶碗	碗	渥美湖西	60	—	—	7.2	灰白	3b期	
35	298	D1	遺構外	陶器	天目茶碗	古瀬戸	20	(10.0)	—	—	赤黒	後期III期	鉄釉
35	299	D2	遺構外	陶器	天目茶碗	古瀬戸	90	—	—	8.6	灰白	後期III期	鉄釉
35	300	D1	遺構外	陶器	平碗	古瀬戸	10	(17.0)	—	—	灰白	後期IV期新	灰釉
35	301	D2	遺構外	陶器	卸皿	古瀬戸	30	—	—	(6.2)	灰白	後期	灰釉
35	302	C	遺構外	磁器	中碗	瀬戸	10	(10.6)	—	—	明青灰	1800～1850年	北壁土層　端反形
35	303	C	遺構外	磁器	中碗	瀬戸	30	—	—	(4.2)	明青灰	登窯第11小期	端反形
35	304	D2	遺構外	陶器	丸皿	美濃	10	(13.0)	—	—	灰白	登窯第4小期	灰釉
35	305	C	遺構外	陶器	志野皿	瀬戸美濃	50	11.4	2.3	7.6	灰	登窯第3小期	長石釉
35	306	C	遺構外	陶器	染付小皿	瀬戸	20	—	—	(6.0)	灰白	登窯第10・11小期	北壁土層　丸形　太白手
35	307	C	遺構外	陶器	鉢体	瀬戸	10	(33.2)	—	—	暗赤褐	登窯第9小期	
36	308	C	遺構外	磁器	白磁型打皿	美濃	20	—	—	(4.0)	灰白	登窯第10・11小期	北壁土層　角形
36	309	C	遺構外	陶器	仏飯器か台付灯明皿	肥前	10	(6.0)	—	—	暗オリーブ褐	19世紀	北壁土層
36	310	C	遺構外	磁器	小鉢	肥前	10	(8.0)	—	—	明青灰	江戸	北壁土層　筒形
36	311	D1	遺構外	陶器	志野向付	美濃	30	(11.2)	5.1	(6.4)	灰白	登窯第1小期	唐草文
36	312	D2	遺構外	陶器	壷蓋	瀬戸	10	(5.4)	—	—	黒	登窯第9・10小期	鉄釉
36	313	C	遺構外	土師質土器	皿		20	—	—	(6.0)	浅黄橙		かわらけ（ロクロ）
36	314	C	遺構外	土師質土器	皿		20	(8.8)	1.7	(6.2)	橙		かわらけ（手づくね）
36	315	D1	遺構外	土師質土器	皿		50	—	—	5.6	浅黄橙		かわらけ（ロクロ）
36	316	D2	遺構外	土師質土器	伊勢型鍋			—	—	—	にぶい橙	13世紀後半～14世紀前半	
36	317	D2	遺構外	土師質土器	内耳鍋		5	(26.0)	—	—	にぶい橙	B類	直立型
36	318	D1	遺構外	土師質土器	内耳鍋		10	(20.0)	—	—	浅黄橙	A類	
36	319	D2	遺構外	土師質土器	内耳鍋			—	—	—	にぶい橙	C類	伊勢系か

Tab.6　出土遺物観察表（12）

Fig.	遺物番号	調査区	遺構番号	器種	器形	産地	残存率(%)	口径・長(cm)	器高・幅(cm)	底径・厚(cm)	色調(外面)	時　期	備　考
36	320	C	遺構外	土師質土器	内耳鍋		10	(20.0)	—	—	明赤褐	B類	
36	321	C	遺構外	土師質土器	内耳鍋		10	(28.0)	—	—	浅黄橙	B類	直立型
36	322	C	遺構外	土師質土器	茶釜		10	—	—	—	淡橙	16世紀後半	釜型
36	323	D1	遺構外	瓦	丸瓦			—	厚 2.0	—	青黒	16世紀後半	コビキB

図　版
PLATE

1　東地区 A 区　完掘遠景（西から）

2　東地区 A 区　完掘近景（西から）

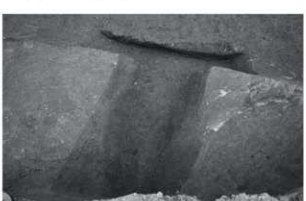
1　A 区　SD05・06 完掘状況（西から）

2　A 区　SD03 完掘状況（西から）

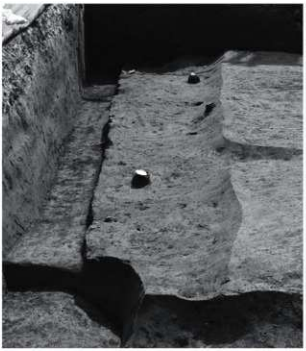
3　A 区　SD03 断面（西から）

4　A 区　SD04 断面（北から）

5　A 区　SD04 遺物出土状況（南から）



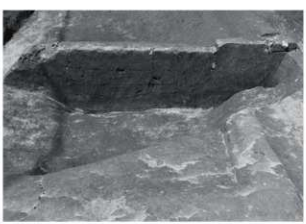
6　A 区　SD04 完掘状況（南から）



1　A 区　SD01 遺物出土状況（西から）

2　A 区　SD06 完掘状況（東から）

3　A 区　SD05・SX01 断面（東から）



4　A 区　SX03 断面（東から）

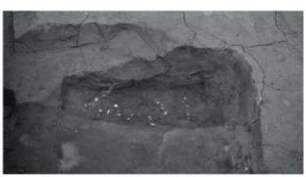
5　A 区　SX04 断面（南から）

6　A 区　SP01 断面（南から）

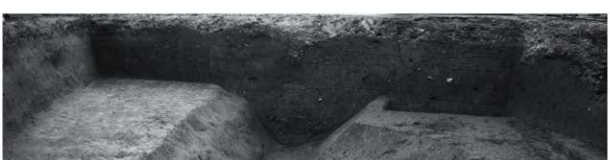
1　A 区　SK01 石敷検出状況（南から）

2　A 区　SK01 完掘状況（南から）

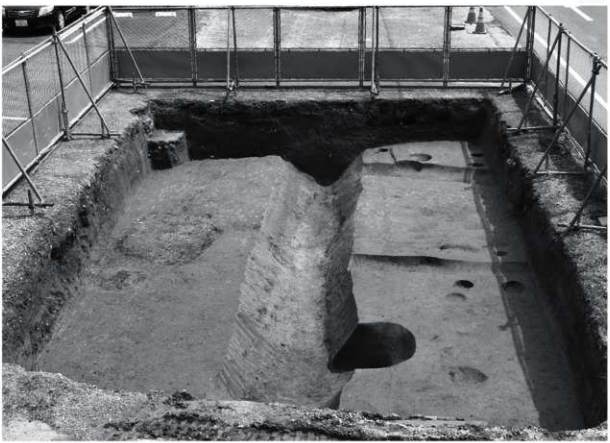
3　A 区　SK01 石敷検出状況（東から）



4　A 区　SK01 完掘状況（東から）



5　A 区　西壁断面（東から）



1　東地区 B 区　完掘全景（西から）

2　東地区 B 区　完掘全景（東から）

PL. 6

1　B 区　東壁断面（西から）

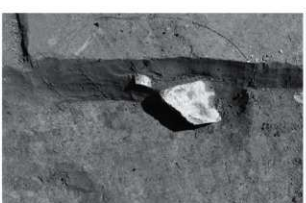
2　B 区　SX06 完掘状況（西から）

1　B 区　SP03 断面（北から）

2　B 区　SP04 断面（西から）

3　B 区　SP05 断面（西から）

4　B 区　SP06 断面（西から）

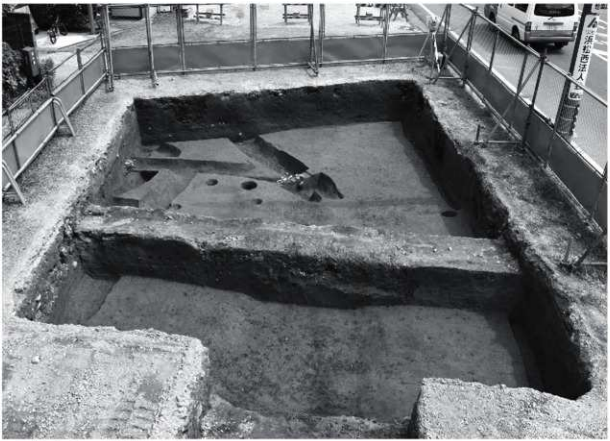


5　B 区　SP07 断面（西から）

6　B 区　SP07 根石検出状況（西から）

7　B 区　SD08 青磁碗出土状況（西から）

8　B 区　SD09 内耳鍋出土状況（北から）

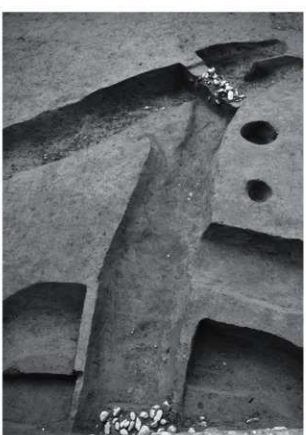


1　西地区 C 区　完掘全景（西から）

2　C 区　SD11・12 円礫検出状況（西から）

1　C 区　SD10 ～ 12 他完掘状況（南から）

2　C 区　SD11・12 円礫検出状況（北から）



3　C 区　SD11・12 完掘状況（北から）

1　C 区　SD10 遺物出土状況（北から）

2　C 区　SD10 完掘状況（北から）

1　C 区　SP13 断面（東から）

2　C 区　SP13 根石検出状況（西から）

3　C 区　SP14 断面（東から）

4　C 区　SP15 断面（南から）

5　C 区　SP16 断面（南から）

6　C 区　SP17 断面（南から）

7　C 区　SP20 断面（北から）

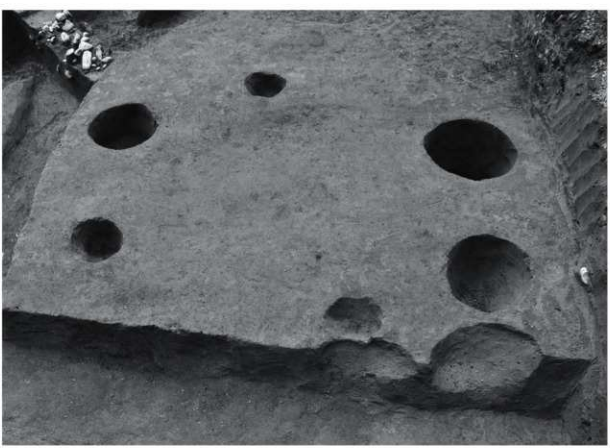
8　C 区　SP21 断面（北から）

1　C 区　SX07 遺物出土状況（南から）

2　C 区　SD10 断面（西から）

3　C 区　SD11 断面（南から）

4　C 区　包含層の近世陶器出土状況（東から）



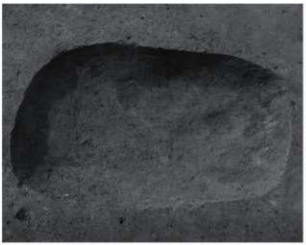
5　C 区　柱穴完掘状況（北から）

1　西地区 D2 区　完掘全景（西から）

2　西地区 D2 区　SD15 ～ 18・21・24 完掘状況（西から）

1　D2 区　SD18 断面（北から）

2　D2 区　SD19・SD22 断面（西から）



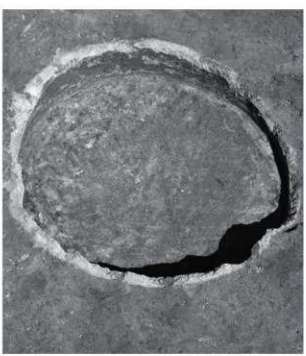
1　D2 区　SK02 完掘状況（南から）

2　D2 区　SK03 完掘状況（西から）

3　D2 区　SK04 断面（東から）

4　D2 区　SK04 完掘状況（北から）

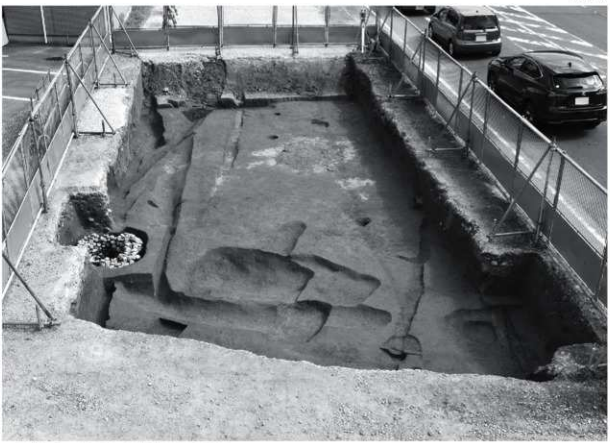
5　D2 区　SE01 検出状況（南から）



6　D2 区　野溜め完掘状況（北から）

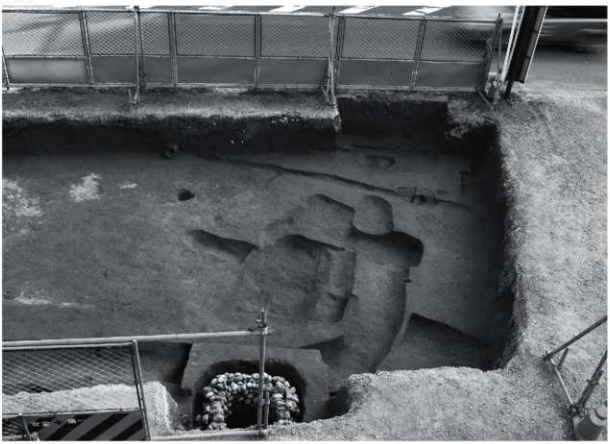
1　西地区 D1 区上面　完掘全景（西から）

2　西地区 D1 区上面　完掘全景（東から）



1　西地区 D1 区下面　完掘全景（西から）

2　西地区 D1 区下面　完掘全景（東から）

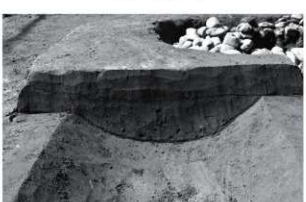


1　D1 区下面　SD28・29、SX8 ～ 10 完掘状況（北から）

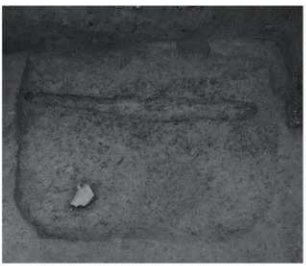
2　D1 区下面　SD29 遺物出土状況（北から）

3　D1 区下面　SD29 遺物出土状況（西から）

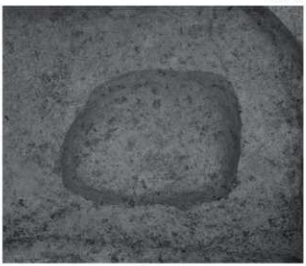
4　D1 区下面　SX10 遺物出土状況（西から）



5　D1 区上面　SD28 断面（東から）



1　D1 区下面　SX08 遺物出土完掘状況（北から）



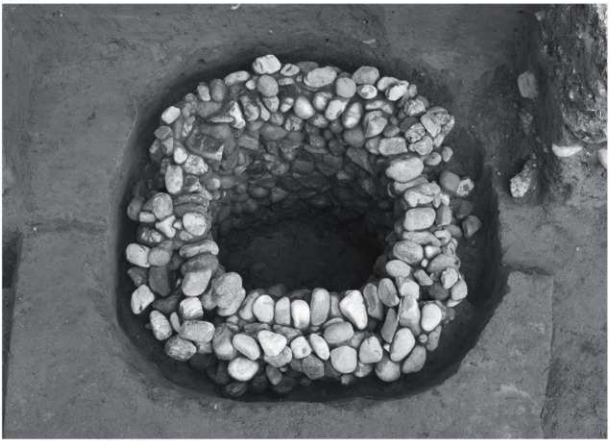
2　D1 区下面　SK05 完掘状況（南から）

3　D1 区下面　SX09 完掘状況（東から）

4　D1 区下面　SX09（南から）

5　D1 区下面　SD29 断面（東から）

6　D1 区下面　SP26 掘削状況（南から）

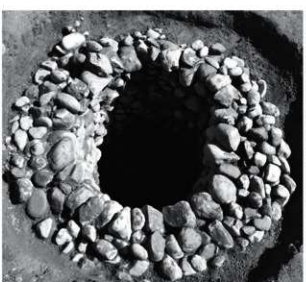


1　D1 区　SE02 井筒内完掘状況（南から）

2　D1 区　SE02 断割状況（南から）

1　D1 区　SE02 石塔出土状況（南から）

2　D1 区　SE02 石積み 14 段目（南から）



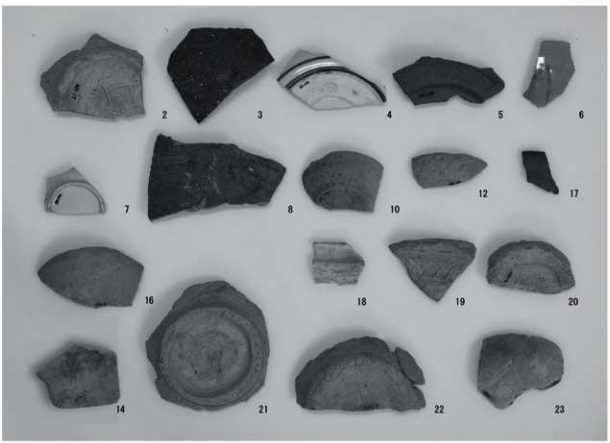
3　D1 区　SE02 石積み 12 段目（南から）

4　D1 区　SE02 石積み 8 段目（北から）

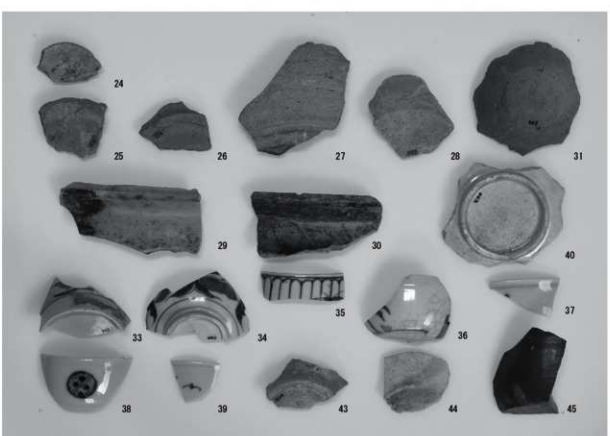
5　D1 区　SE02 石積み 3 段目（南から）

6　D1 区　SE02 基底石の状況（北から）

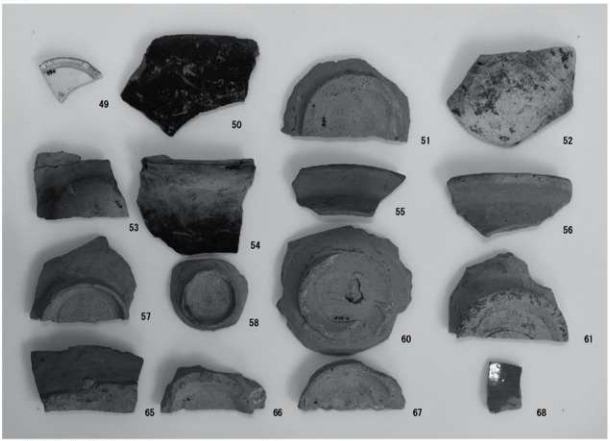
1　東地区　出土遺物（1）（SK01、SX04・05、SD01・03）



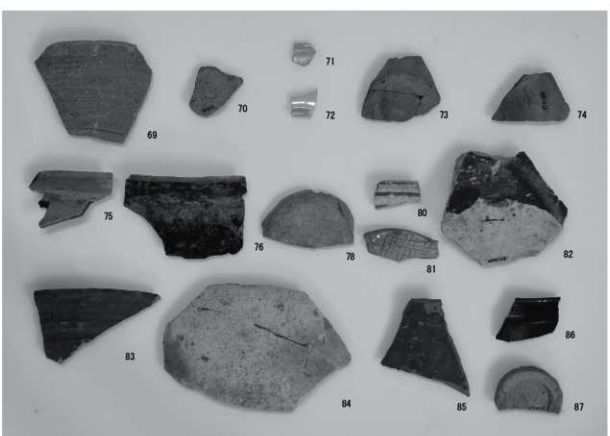
1　東地区　出土遺物（2）（SK01、SP05・12、SX01）



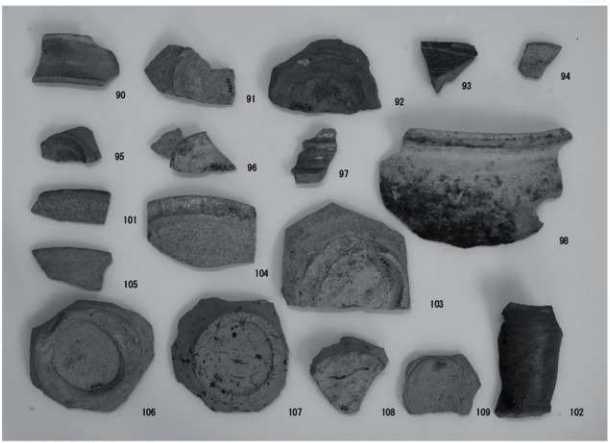
2　東地区　出土遺物（3）（SX02 ～ 04）



1　東地区　出土遺物（4）（SX05・06、SD01・02）

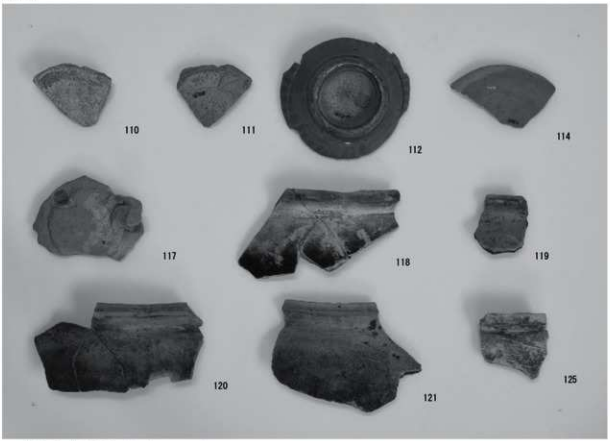


2　東地区　出土遺物（5）（SD03）

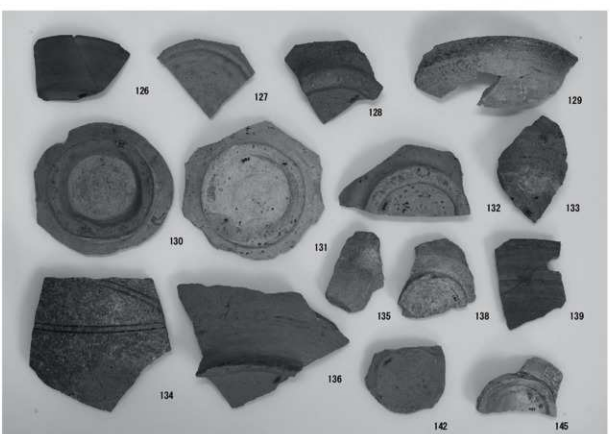


1　東地区　出土遺物（6）（SD05・06）

2　東地区　出土遺物（7）（SD04・08・09）



1　東地区　出土遺物（8）（SD08・14）



2　東地区　出土遺物（9）（遺構外出土遺物）

146

155

165

166

167

170

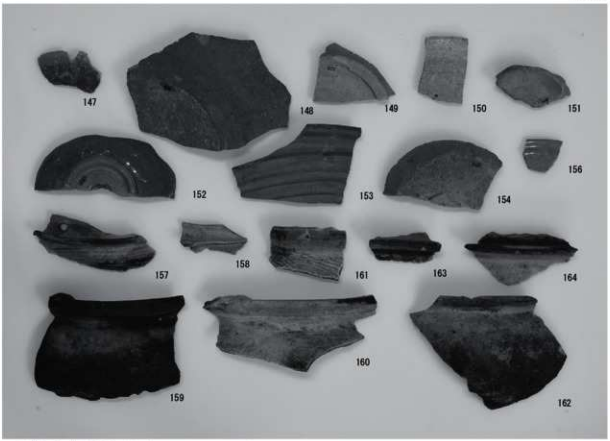
172

175

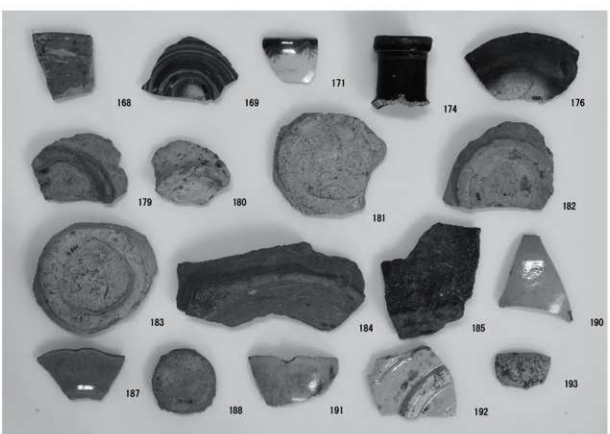
177

1　西地区　出土遺物（1）（SK05、SX09・10、SD10）

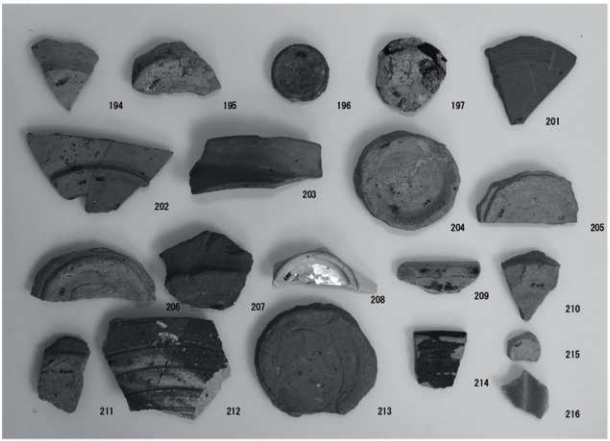
1　西地区　出土遺物（2）（SD10・11・13・22・27 ～ 29、SD15 ～ 18 包含層）



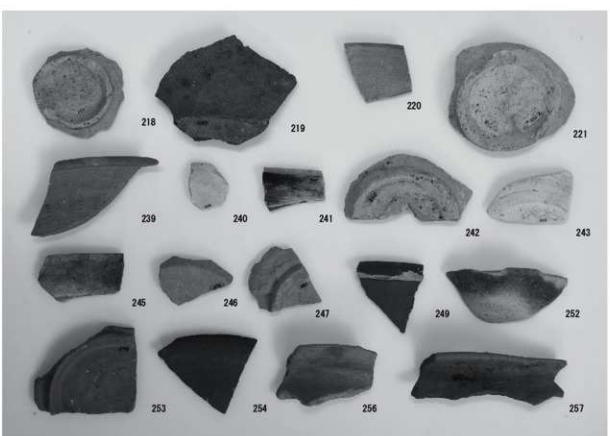
1　西地区　出土遺物（3）（SP16、SX07 ～ 09）



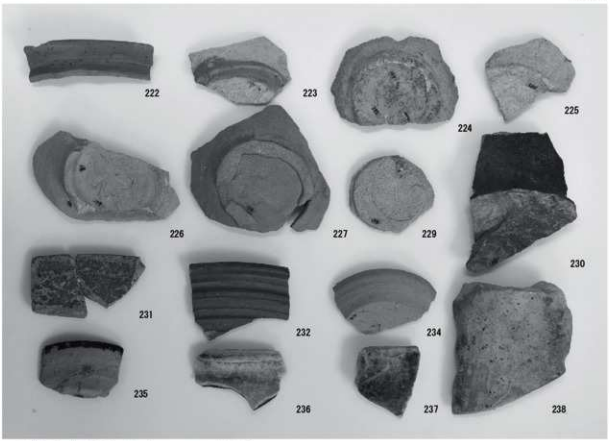
2　西地区　出土遺物（4）（SD10・11）



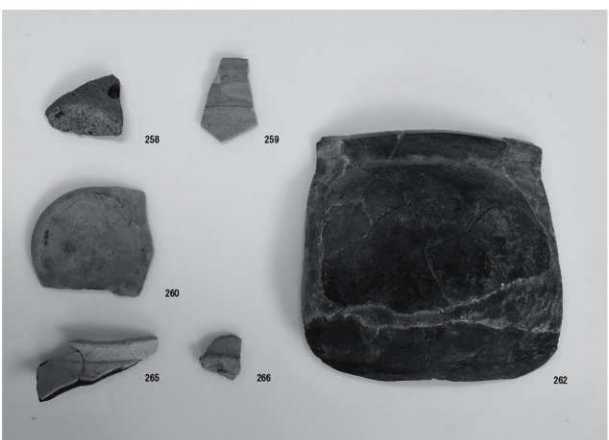
1　西地区　出土遺物（5）（SD12・13・15 ～ 17）



2　西地区　出土遺物（6）（SD18 ～ 20・22・23・28）

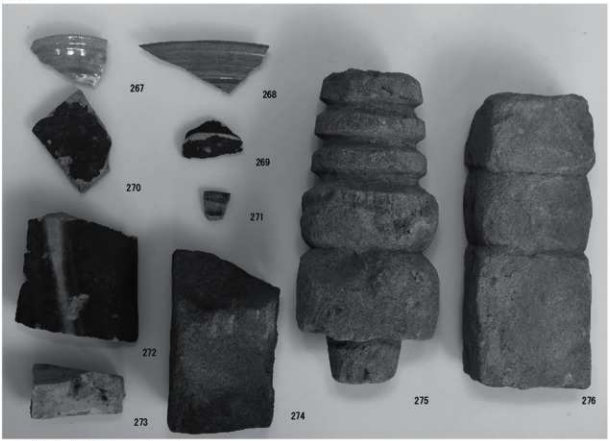


1　西地区　出土遺物（7）（SD15 ～ 18 包含層）



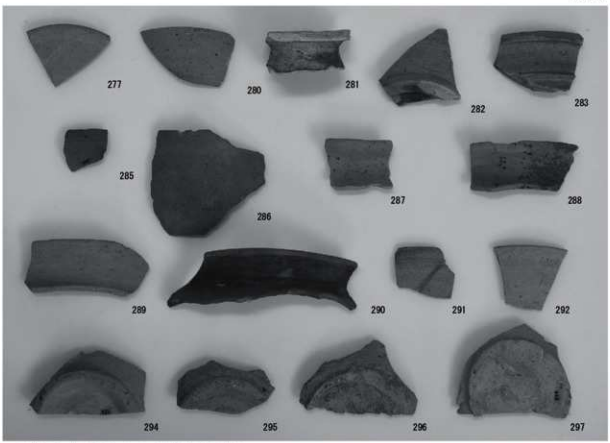
2　西地区　出土遺物（8）（SD29・30）

PL. 32

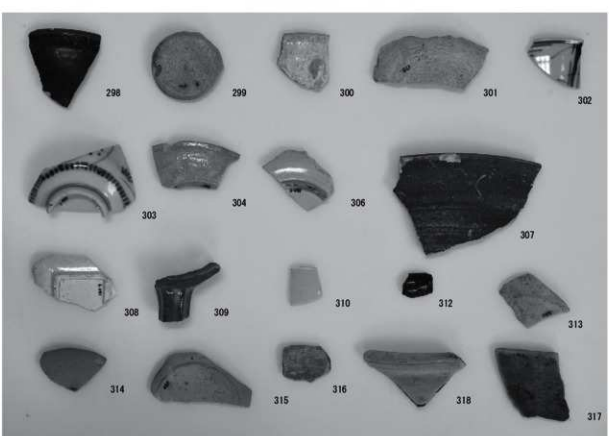


1　西地区　出土遺物（9）（SE02）

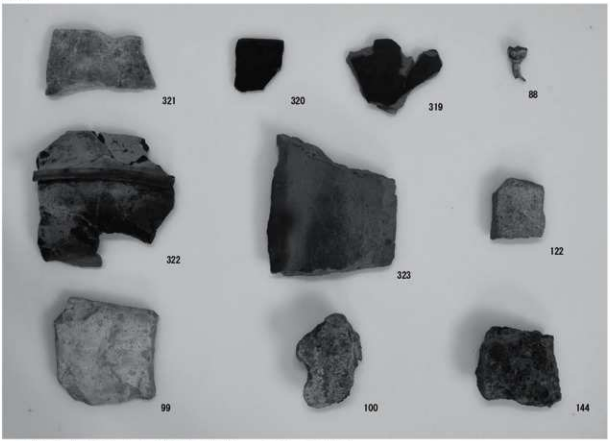
2　西地区　出土遺物（10）（遺構外出土遺物）



1　西地区　出土遺物（11）（遺構外出土遺物）



2　西地区　出土遺物（12）（遺構外出土遺物）



1　西地区　出土遺物（13）（遺構外出土遺物、石製品、金属製品）

2　13次調査の舶載陶磁器

報 告 書 抄 録

書名（ふりがな）	浜松城下町遺跡３　（はままつじょうかまちいせき３）
編著者名	井口智博、辻広志（編）、塚本和弘、鈴木敏則
編集発行機関	浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課 〒430-8652　浜松市中区元城町 103-2 TEL(053)457-2466　FAX(050)3730-1391
発行年月日	2021 年 3 月 19 日

遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浜松城下町遺跡（はままつじょうかまちいせき）	静岡県 浜松市 中区 八幡町	22131	1-04-18	34 度 42 分 48 秒	137 度 44 分 09 秒	2020 年 8 月 17 日 ～ 10 月 26 日	450 ㎡	道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜松城下町遺跡	城下町	古墳～奈良時代 鎌倉時代 戦国時代 江戸時代	竪穴状遺構 溝、小穴 土坑、小穴 溝、土坑	須恵器、土師器、中世陶器、近世陶磁器、土師質土器、金属製品、石製品	中世の道路遺構

要約

飛鳥時代～江戸時代までの遺構と遺物を確認した。遺構や遺物の出土から、7 世紀後半～8 世紀の古代集落の存在が想定される。中世後期に遡る側溝を伴う道を 1 条確認した。道に取り付く区画溝や側溝から出土した土師質土器・鍋類の出土量の多さから、中世の引間宿の一角である可能性が考えられる。近世では 17 世紀～19 世紀中葉までの遺構が検出され、東海道の経路変更後の引間宿の衰退、近世城下における一般農村から、耕作地へと変遷していく過程を確認できた。

浜松城下町遺跡 3

2021 年 3 月 19 日

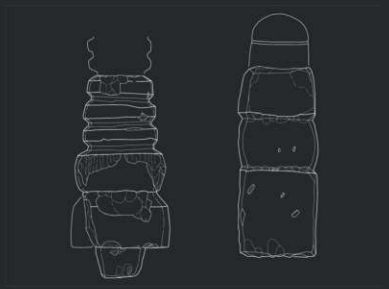
発　行　浜松市教育委員会
編集　浜松市市民部文化財課
（浜松市教育委員会の補助執行機関）
〒430-8652　浜松市中区元城町 103-2

印　刷　三星商事印刷株式会社

Hamamatsu Castle Town Site

The 13th excavation report

A Report of Archaeological Investigation on 16 th -19 th Century Castle Town in Western Shizuoka,Japan



March,2021

Hamamatsu Municipal Board of Education